石台遺跡 II

——馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告——

年3月

育委員会

石台遺跡 II

――馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告――

1993年3月

島根県教育委員会

序

島根県教育委員会では松江土木建築事務所の委託を受け，1992年度馬橋川河川局部改修に伴い石台遺跡の発掘調査を実施しました。

石台遺跡は松江市郊外を流れる馬橋川の下流にあり，縄文時代，弥生時代，さらに中世の遺物が多く出土する遺跡として知られています。馬橋川の河川改修に伴う調査は1978年度から開始しました。本年度の調査はその中心に近いところと思われ，縄文土器，弥生土器，石器などが出土しました。今回の調査で得られた資料は，当地方の縄文時代から弥生時代への移り変わり及びその時代の生活の実態を知る上で重要な資料と考えております。

本報告が広く埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに多少なりとも役立てば幸いです。

なお，発掘調査にあたりましては，各方面からの多くのご支援，ご協力をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

1993年 3 月

島根県教育委員会

教育長　**坂　本　和　男**

例　　言

1．本書は，松江土木建築事務所の委託を受けて，島根県教育委員会が平成４年度に実施した馬橋川河川局部改修工事に伴う石台遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

事務局　目次理雄（文化課長）　山根成二（同課長補佐）

勝部　昭（島根県埋蔵文化財調査センター長）　久家儀夫（文化課長補佐）

工藤直樹（調整企画係主事）　田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　内田律雄（調査第４係長）　柳浦俊一（同主事）　守岡正司（同主事）

石谷二朗（調査補助員）

調査指導　千葉　豊（京都大学埋蔵文化財研究センター）

遺物整理　若佐裕子，津森眞弓，正井るみ子，堀江五十鈴，荒川あかね

調査協力　田中迪亮，山崎順子

3．挿図中の方位は，国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向で磁北より7°12′東の方向を示す。

4．本書第１図の「周辺の遺跡」は建設省国土地理院発行の地形図を，第２図の「周辺の地形図」は松江圏都市計画図を使用した。

5．掲載図面は調査員が作成し，津森，正井，堀江，荒川が浄書した。

6．本書の執筆は，調査指導の諸先生の助言を得て，調査員があたった。

7．遺物の実測は調査員があたり，遺物写真は柳浦，守岡が撮影した。

8．本書の編集は，柳浦，守岡が協議してこれを行った。

9．出土遺物，実測図及び写真は島根県教育委員会（島根県埋蔵文化財調査センター）に保管している。

10．本書で掲載した航空写真（図版１）は㈱ワールド航測の撮影による。

11．石台遺跡発見者の恩田清氏には多大な協力，助言を得た。1977年調査当時の現地の風景，土層などの写真は恩田氏の提供による。

12．参考として1977年に恩田氏が採集された資料の一部についても写真を掲載した。

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調 査 の 経 過 …… 8
Ⅳ　検出遺構と遺物 …… 10
(1)　土層の堆積状況 …… 10
(2)　竪穴住居跡状遺構 …… 11
(3)　溝状遺構 …… 17
(4)　A区第3層出土遺物 …… 19
(5)　その他の遺物 …… 28
Ⅴ　小　　結 …… 35

挿 図 目 次

第1図　周辺の遺跡 …… 3
第2図　調査区配置図 …… 5・6
第3図　調査区全体図 …… 7
第4図　1977年調査時の土層略図（恩田清氏による） …… 8
第5図　A区土層堆積図 …… 9
第6図　B区竪穴住居跡状遺構実測図 …… 10
第7図　石台遺跡SI01出土土器実測図(1) …… 12
第8図　石台遺跡SI01出土土器実測図(2) …… 14
第9図　石台遺跡SI01出土土器実測図(3) …… 15
第10図　石台遺跡SI01出土石器実測図(4) …… 16
第11図　B区溝状遺構実測図 …… 17
第12図　石台遺跡SD01出土遺物実測図 …… 18
第13図　石台遺跡A区第3層出土土器実測図(1) …… 22
第14図　石台遺跡A区第3層出土土器実測図(2) …… 23
第15図　石台遺跡A区第3層出土土器実測図(3) …… 24

第16図　石台遺跡Ａ区第３層出土土器実測図（4）…… 25
第17図　石台遺跡Ａ区第３層出土土器実測図（5）…… 26
第18図　石台遺跡Ａ区第３層出土土器・石器実測図（6）…… 27
第19図　石台遺跡出土土器実測図（1）…… 30
第20図　石台遺跡出土土器実測図（2）…… 31
第21図　石台遺跡出土土器実測図（3）…… 32
第22図　石台遺跡出土石器実測図（4）…… 33
第23図　石台遺跡出土土器・石器実測図（5）…… 34

図　版　目　次

図版１　石台遺跡周辺の地形（1990年撮影）
図版２　石台遺跡近景（1990年）
　　石台遺跡近景（1977年頃の風景恩田清氏による）
図版３　Ｂ区全景（調査後）
　　Ｂ区竪穴住居跡状遺構
図版４　Ｂ区竪穴住居跡状遺構遺物出土状態
　　Ｂ区竪穴住居跡状遺構土層堆積状態（1）
図版５　Ｂ区竪穴住居跡状遺構土層堆積状態（2）
　　Ｂ区竪穴住居跡状遺構土層堆積状態（3）
図版６　Ｂ区溝状遺構
　　Ｂ区溝状遺構土層堆積状態
図版７　Ｂ区溝状遺構遺物出土状態
　　Ａ区全景（完掘後）
図版８　Ａ区土層堆積状態
　　Ａ区土層堆積状態（細部）
図版９　Ａ区土層堆積状態（西端部分）
　　Ａ区遺物出土状態
図版10　Ａ区遺物出土状態
　　調査風景
図版11　石台遺跡SI01出土土器
　　石台遺跡SI01出土土器
図版12　石台遺跡SI01出土土器
　　石台遺跡SI01出土土器
図版13　石台遺跡SI01出土土器
　　石台遺跡SI01出土土器
図版14　石台遺跡SI01出土石器
　　石台遺跡SD01出土土器・石器
図版15　石台遺跡Ａ区第３層出土土器
　　石台遺跡Ａ区第３層出土土器
図版16　石台遺跡Ａ区第３層出土土器
　　石台遺跡Ａ区第３層出土土器
図版17　石台遺跡Ａ区第３層出土土器
　　石台遺跡Ａ区第３層出土土器
図版18　石台遺跡Ａ区第３層出土土器
　　石台遺跡Ａ区第３層出土土器
図版19　石台遺跡Ａ区第３層出土土器
　　石台遺跡Ａ区第３層出土土器
図版20　石台遺跡Ａ区第３層出土土器・石器
　　石台遺跡出土土器
図版21　石台遺跡出土土器

石台遺跡出土土器
図版22　石台遺跡出土土器
石台遺跡出土土器
図版23　石台遺跡出土土器
石台遺跡出土土器
図版24　石台遺跡出土土器
石台遺跡出土土器・石器
図版25　石台遺跡出土石器
石台遺跡出土石器
図版26　石台遺跡出土土器
モミ圧痕およびモミ
図版27　石台遺跡1977年当時の風景（恩田清氏撮影）
石台遺跡1977年の調査地点（同）
図版28　石台遺跡土層堆積状況（同）
石台遺跡土層堆積状況（同）
図版29　石台遺跡遺物出土状況（同）
石台遺跡遺物出土状況（同）
図版30　石台遺跡遺物出土状況（同）
石台遺跡「炉跡状遺構」（同）
図版31　石台遺跡出土土器（恩田氏採集）
石台遺跡出土土器（恩田氏採集）
図版32　石台遺跡出土土器（恩田氏採集）
石台遺跡出土土器（恩田氏採集）
図版33　石台遺跡出土土器（恩田氏採集）
石台遺跡出土土器（恩田氏採集）
図版34　石台遺跡出土土器（恩田氏採集）
石台遺跡出土土器（恩田氏採集）

I　調査に至る経緯

石台遺跡は1976年冬に馬橋川の護岸工事中に焼橋付近で恩田清氏によって多くの縄文土器や石器などが採集され，世に知られるようになった。地表下１～1.5mの砂層から多量の縄文後期，晩期の土器および石鍬とされる大型打製石斧が出土した。これらの中には三角形石包丁や籾痕を有する縄文晩期の土器が含まれており縄文農耕が論議された。また，弥生土器も多く出土し，片岡善貞氏もこの地を踏査され，焼橋の上流の右岸から南関東の須和田式土器（搬入品）を採集されている。

馬橋川改修工事は順次行われてきた。1978年度に焼橋の上流部分で工事が計画されたため島根県教育委員会は，調査を行ったが遺構や遺物は検出されなかった。また，1980年度には国道９号バイパス建設工事に伴い焼橋上流の右岸に位置する水田地帯が発掘調査されたが，遺物などは発見されなかった。このことにより遺跡の中心は焼橋付近から下流と考えられた。なお，現在では馬橋川周辺だけでなく馬橋川から南東に約200m離れた丘陵部も石台遺跡として扱われている。

1982，83年度には焼橋の下流左岸の護岸工事に伴い発掘調査を行った。この地点ではこれまであまり知られていなかった中世の陶磁器や土師質土器が出土したが，これまで石台遺跡で確認されていた縄文・弥生時代の遺物は全体の10％しか検出されず，1978年の調査と内容が異なっていた。

馬橋川の下流ではほぼ護岸工事が終了し，水の流れをよくするため中洲状に残っている部分の土取りが計画された。焼橋の下流80mに広がる中洲状の地点は石台遺跡の中心と推定されており，発掘調査が必要であった。そのため松江土木建築事務所と県文化課は協議を行い，1987年に試掘調査を実施したところ，中洲の上流部から土坑とピットが確認され，土坑内からは突帯文土器や打製石斧，磨製蛤刃石斧など多くの石器類が出土した。この結果，再度協議を行い，1992年度に中洲全面を発掘調査を実施した。調査区は川に接して中洲状になっていることから安全を図るため周囲に矢板を打ち，川の水位が下がる秋口から発掘調査を開始した。調査は10月５日から開始し12月22日に終了した。調査中は予期せぬ降雨のため湧水が激しく常時排水ポンプを作動させながらの調査であった。

1976年　恩田清氏，片岡善貞氏馬橋川護岸工事中に遺物を採集　註(1)，(2)，(3)，(4)，(11)

1978年　馬橋川改修工事に伴う試掘調査

1980年　国道９号バイパス建設に伴う発掘調査　註(5)

1982年　馬橋川改修工事に伴う試掘調査　註(7)

1983年　馬橋川改修工事に伴う発掘調査　註(8)，(10)

1987年　馬橋川改修工事に伴う試掘調査（土坑，ピット検出）　註(9)

1988年　国道９号バイパス建設に伴う発掘調査　註(6)

1992年　馬橋川改修工事に伴う発掘調査（今年度報告書）

註

1．前島己基　「籾痕のついた縄文土器の破片」『季刊文化財』31　1977年
2．岡崎雄二郎・恩田　清　「石台遺跡について」『松江考古』創刊号　1978年
3．岡崎雄二郎　「山陰の縄文後期・晩期の諸問題」『日本考古学協会昭和52年度大会発表要旨』　1977年
4．江川幸子・中村友博・松本岩雄　「松江市石台遺跡採集の須和田式土器」『島根考古学会誌』８　1991年
5．島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所　『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ　1981年
6．島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所　『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　1983年
7．足立克己　「松江・石台遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅹ　1983年
8．島根県教育委員会　『石台遺跡－馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告』　1986年
9．江川幸子・内田律雄　「石台遺跡の試掘調査－炭火米を出土した縄文晩期の土壙」『季刊文化財』62　1988年
10．広江耕史　「島根県内の中世の遺跡について」『中世土器研究』66　1992年
11．川原和人　「島根県における縄文晩期凸帯文土器の一試考－松江市石台遺跡出土の凸帯文土器を中心として－」『島根考古学会誌』１　1984年

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

石台遺跡は松江市の南東に位置する馬橋川流域の沖積地に立地する遺跡である。地籍は松江市東津田町石台に所在する。馬橋川は松江市南東の丘陵地帯にその源を発し，大庭・山代地区といった古代の要衝地を北流し，古志原町内でその流れを東に変え大橋川に注ぎ込む。その流れが変わるあたりに石台遺跡は所在している。馬橋川は1978年に護岸工事が行われるまでは，幅５ｍ程度の小河川で流路を幾度も変えていたと思われる。

この遺跡は縄文時代前期・後期・晩期の土器をはじめ，弥生土器から中世に至るまでの遺物が出土している。遺構は縄文時代の炉跡状の集石遺構や晩期の土坑が検出されている。

この周辺から出土した最も古い遺物としては国道９号バイパスに伴う調査で，石台遺跡（今回調査地点の南北約150ｍに位置する丘陵）から安山岩製の大型のナイフ形石器と思われる石器が出土している。また，下黒田遺跡でも旧石器時代の剝片石器がまとまって出土している。

縄文時代の遺跡としては石台遺跡の他に保地遺跡や竹矢小学校校庭遺跡がある。前者からは後期

1.石台遺跡　2.高杉古墳群　3.舟津田遺跡　4.タルミ遺跡　5.岡古墳群　6.岡横穴墓群
7.論田古墳群　8.室藤古墳群　9.古志原遺跡　10.向山西古墳群　11.大庭鶏塚古墳
12.山代二子塚古墳　13.井手平古墳群　14.山代方墳　15.永久宅後古墳　16.来美廃寺
17.狐谷横穴墓群　18.来美墳墓　19.十王免横穴墓群　20.廻田古墳　21.勝負遺跡
22.間内越墳墓群　23.平所遺跡　24.井ノ奥古墳群　25.才ノ峠遺跡　26.東光台古墳
27.石屋古墳　28.荒神畑古墳　29.保地遺跡　30.手間古墳　31.岩船古墳
32.魚見塚古墳　33.朝酌岩屋古墳　34.朝酌小学校古墳

第１図　周辺の遺跡(国土地理院25,000分の１)

の土器，後者からは前期の爪形文土器が出土している。

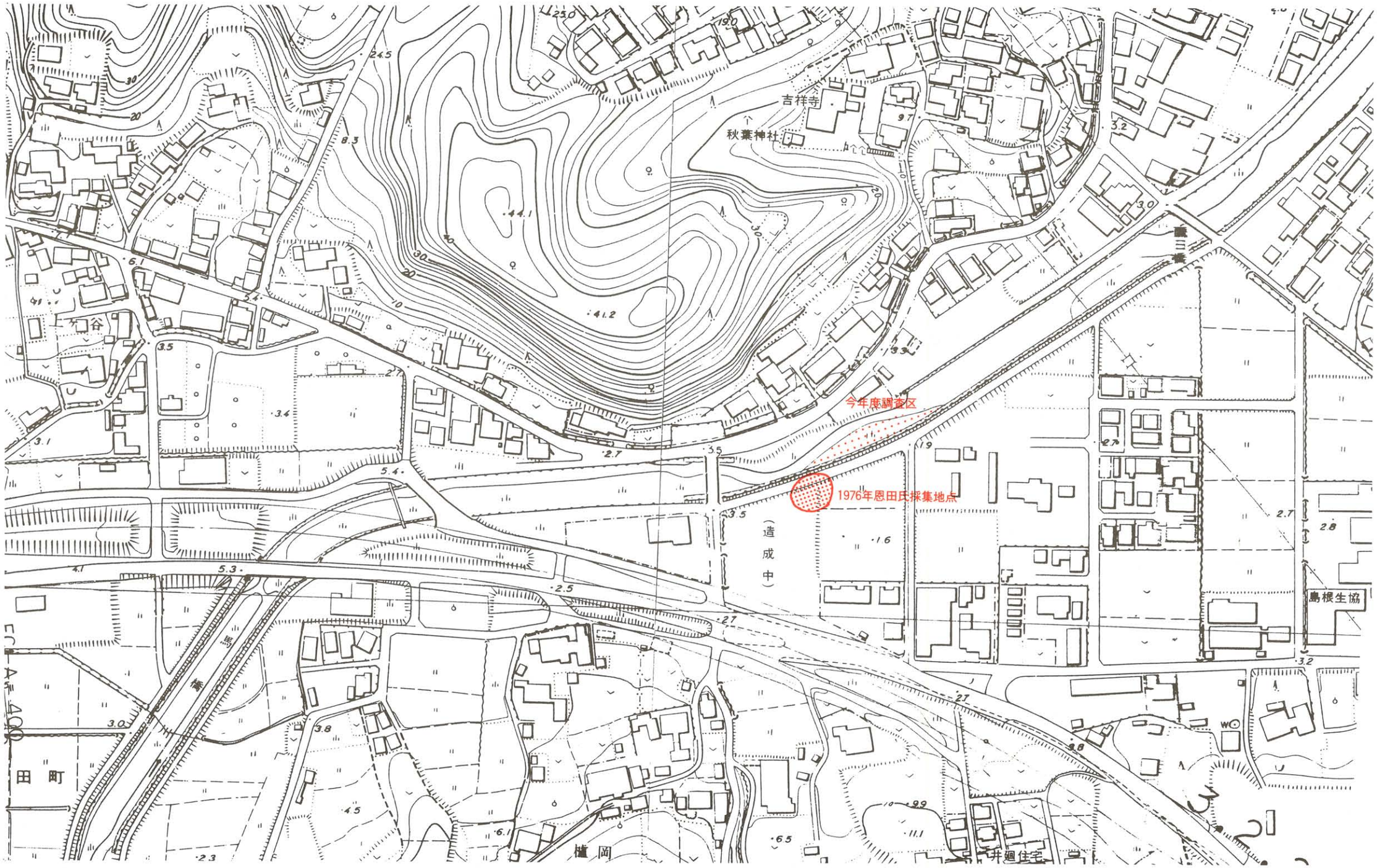
弥生時代になると石台遺跡の周辺の丘陵には多くの集落が営まれた。馬橋川が流れるこの平野の南に位置する丘陵に石台遺跡をはじめ，勝負遺跡や平所遺跡などが点在する。そこから掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出され，土器や多くの石器などが出土している。また，古志原遺跡からは石斧や石鏃が採集されている。墳墓については来美墳丘墓や間内越墳丘墓などの四隅突出墳丘墓が現れる。これらはいずれも後期の遺跡で，前期まで遡るものとしては布田遺跡，中竹矢遺，石台遺跡などわずかである。

古墳時代の集落としてタルミ遺跡，舟津田遺跡などがあり，奈良時代に続くものである。一方，古墳では前期古墳は今のところ知られていない。しかし，中期になると大橋川や馬橋川の流域に出雲を代表する大形の古墳が出現する。代表的なものとして大庭鶏塚古墳（方墳，42m），井の奥4号墳（前方後円墳，57m），手間古墳（前方後円墳，57m），石屋古墳（方墳，40m），竹矢岩船古墳（前方後方墳，47m）などが挙げられる。

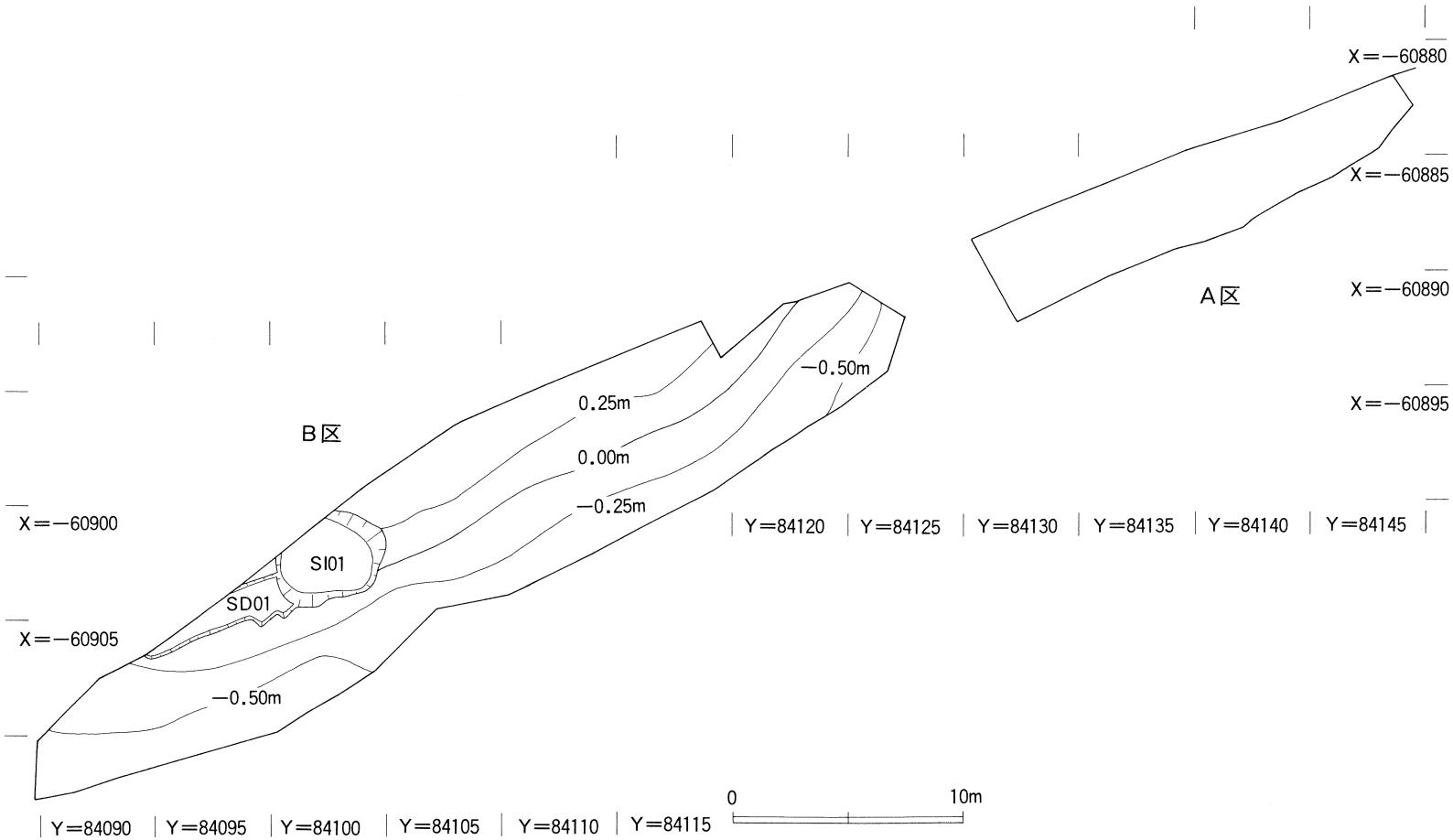
後期になると茶臼山西麓に山代二子塚古墳（前方後方墳，94m），岡田山1号墳（前方後方墳，24m）や御崎山古墳（前方後方墳，40m）などが築造される。また横穴墓も多く作られ，十王免横穴墓群や狐谷横穴墓群などは多くが群集しているものとして知られる。この周辺は古墳時代の遺跡が密集し律令時代に出雲国の中心となる基盤がこの時期に形成されたと考えられる。なお，築造時期が不明であるが馬橋川の北側の丘陵にも高杉古墳群や室藤1号墳など小規模な古墳が存在する。

次の律令時代になると『出雲国風土記』によると意宇平野に出雲国庁，意宇郡家や意宇軍団など公的機関が置かれた。また，出雲国分寺や国分尼寺の官寺や，来美廃寺や四王寺跡などの私寺も建立されこの地は出雲国の政治や文化の中心地であった。

中世には出雲国造館推定地黒田館跡，天満谷遺跡などで館跡・集落跡が検出されている。これらの遺跡からは12・13世紀の輸入陶磁器が多く出土し，石台遺跡からもこれらと同じ時期の白磁碗や越州窯系や龍泉窯の青磁碗が出土している。また，兵庫県魚住窯の須恵器や和泉型瓦器碗などの国産の搬入品も検出されている。この時期の石台遺跡は「舟津田」の地名などから中世の水運にかかわるなんらかの施設があったと推定されている。



第２図　調査区配置図(松江圏都市計画図 2,500分の１)



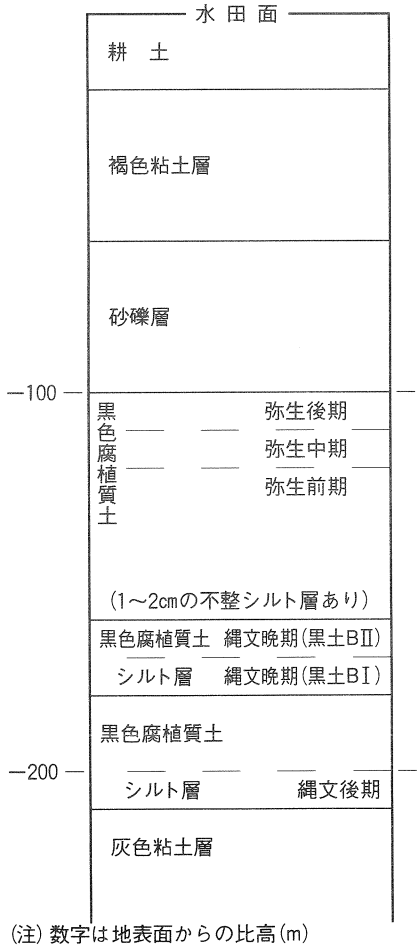
第3図　調査区全体図(1：300)

Ⅲ　調　査　の　経　過

今年度は，松江市東津田町石台所在の石台遺跡のうち焼橋の下流80mに位置する馬橋川の中洲の調査を行った。現地での調査期間は1992（平成４）年10月５日から12月22日までの約２ヶ月半である。

調査は1987年の試掘を受け，当初，中洲上流部のみの計画であった。しかし，当初試掘面積が限られていたことから下流部にも遺跡が広がっている可能性が強く，中洲の全域に７箇所のグリッドを設けたところ中洲の最上流部と下流部で遺物包含層を確認した。

このことから，表土および第２層の無遺物層を重機で除去し，以下を人力によって掘削することにした。また，調査の便宜上，下流部をＡ区，上流部をＢ区とし，Ａ区から調査を行うこととした。



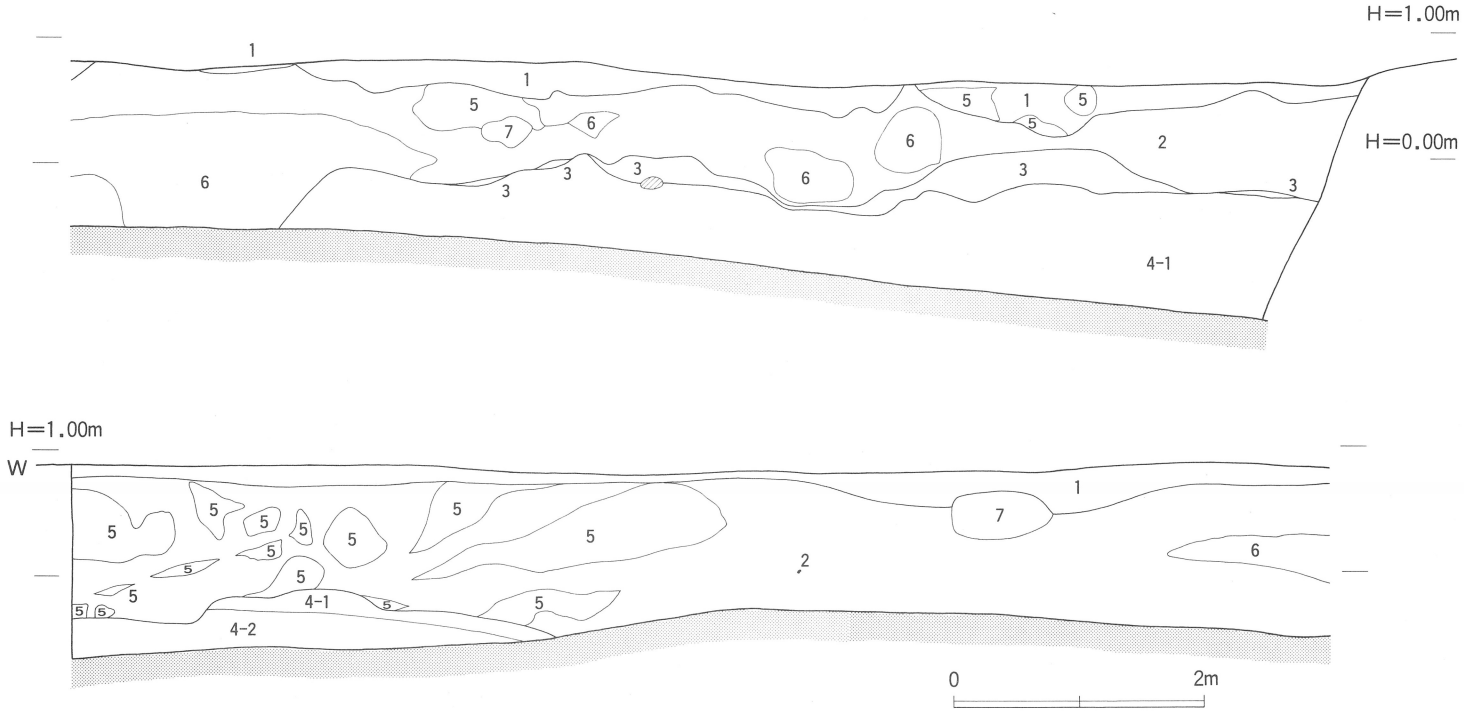
(注) 数字は地表面からの比高(m)

第４図　1977年調査時の土層略図(恩田清氏による)

Ａ区では地表下約0.6mで包含層が検出された。(第３層砂層)。ここから多くの突帯文土器が出土したので，第３層をＡ区全面に追いかけた。しかし，この層の範囲は２ｍ×４ｍと狭く，厚さも薄かった。ここでは遺構は認められず，第３層は川の流れによって堆積したものと考えられた。第４層は植物質を含んだ暗茶色粘質土で遺物はなく，一部で地山を確認してＡ区の調査を終えた。なお，第１，２層においても若干の遺物が出土した。

Ｂ区は表土を除去した後，最上流部で地山ブロックと考えられる白色粘質土が多量に混じる箇所で遺物が出土したため，ここで遺構の検出に努めた。ここでは，第４層での遺構の検出が困難なため地山まで掘り下げた後，精査を行った。その結果，竪穴住居状遺構および溝状遺構が重複して存在することを確認した。この作業を完了した後，Ｂ区の地山面の測量を行った。

以上の作業を行い，12月22日すべての現地調査を終了した。



1.黄褐色土層(表土)　2.黒色土層　3.青灰色砂層
4-1.暗茶灰色粘質土(植物質を含む)　4-2.暗茶灰色粘質土(植物質を含まない)
5.白色粘土ブロック　6.青灰色粘土ブロック　7.茶褐色粘土ブロック

第5図　A区土層堆積図(1：60)

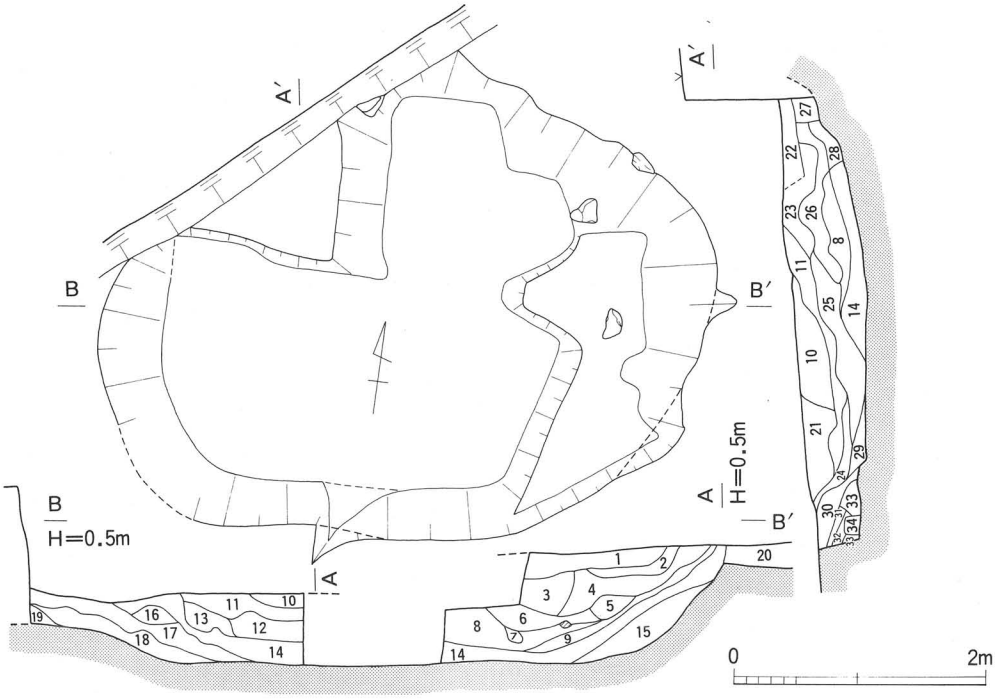
Ⅳ　検出遺構と遺物

(1)　土層の堆積状況（第４・５図）

今回の調査では基本的に上から黄褐色粘質土層（第１層表土），第２層は白色粘土ブロックや黄褐色粘土ブロックを多量に含む黒色土層（第２層植物質を含む），青灰色砂層（第３層），植物質を含む暗茶色粘質土層（第４層），地山（白色粘質土）の順で堆積していることが確認された（第５図）。

地山はＢ区中央が最も高く（標高0.4m），東，西，南に向かうにつれて徐々に低くなっており，Ａ区東端においては標高－1.2mの深さに達する（第３図）。

この地山の形状から考えると，今回調査した地点は，調査区北側にある丘陵からさらに南に派生した小丘陵の頂部に当たると思われる。その小丘陵は頂部で標高0.4mであることから，縄文海進時の沈殿物（堆積物）によって完全に埋没し，その後の海退によって現地形になったと推定される。



1.黄褐色土　2.暗黄褐色土　3.灰青白色粘土ブロック　4.白色粘土ブロック　5.黒色土　6.暗黄褐色土
7.黒色ブロック　8.灰青粘質土　9.暗灰粘質土　10.灰白色粘土ブロック　11.黒色土　12.黄褐色土
13.白色粘土ブロック　14.黒色土　15.黄褐色砂質土　16.黄褐色ブロック　17.灰白色粘土ブロック
18.黒色粘質土　19.明黄褐色粘質土　20.暗茶色粘質土　21.黒色土　22.黒色土　23.黒色土
24.黒色粘質土　25.灰色粘土ブロック　26.黒色粘質土　27.黒色土　28.灰白色粘土ブロック
29.黒色土　30.黒色土　31.黄褐色砂質土　32.黄褐色土　33.黒色土　34.灰白色粘土ブロック

第６図　Ｂ区竪穴住居跡状遺構実測図（１：60）

一方，1983年度馬橋川の左岸，埋没小丘陵基部付近と推定される地点の調査が行われ，地山は，標高－1.2mで検出されている。この調査結果では上述の地形の復元と矛盾するが，出土遺物が中世のものであることを考えると丘陵が完全に埋没した後に河川が流路を変えて現在の地点を流れるようになったため地山検出レベルが違うと想像される。

ところで，1977年恩田清氏が行った調査で確認された土層は第４図に示すとおりである（恩田清氏実測）。この土層図では地表下約１mの「黒色腐植質土」から地表下約2.1mの「シルト層」（「灰色粘土層」の上。地山と思われる）までの約1.1mが遺物包含層とされる。土層図ではこの包含層がさらに細分されているが，現在となっては恩田氏撮影の当時の写真を見ても詳細な土層は判別できない。写真を見る限りでは，包含層は黒色ないし暗灰色の粘質土と縞状の砂層が互層状に堆積した層のようである（図版28～30）。写真では遺物に砂がこびりついているものばかりで，主に砂層中から出土したことがわかる。この砂層の粒子が比較的大粒であることから，この包含層は河川内堆積物と推定される。[註3]

恩田氏が確認した包含層は，今年度調査区のうちA区第３・４層とよく似た状況と思われる。A区では第３層（砂層）を包含層，第４層を無遺物層としたが，第３層は第４層中に見られる砂層（層厚数cm）と成因は同じかもしれない。遺物の包含密度が1977年調査地点と今年度調査地点とで違うのは両地点の微地形的な堆積条件の違いのためではなかろうか。

(2) 竪穴住居跡状遺構（SI01　第６図，図版３～５）

B区の西側，地山がやや高くなっている比較的平坦なところに位置する。暗茶色粘質土（第４層）から掘り込まれ地山まで達する。平面形は不整楕円形を呈し，上場４m×4.8m，下場３m×3.8mを測る。壁の高さは東側で0.7m，西側は地山面から0.4mを測り，壁はやや急な斜面になっている。西側の壁を暗茶色粘質土層（第４層）から見つけることは困難であった。

床面は水平に近いながらも凸凹が著しく標高は－0.65mに当たり，柱穴は確認されなかった。床面の東側には幅１m，長さ２mにわたりテラスがあり，このテラスと床面との比高差は10cm程度である。このテラスからは25cmほどの丸みをもつ石材が２つほど検出されている。また，北側にも方形のテラスがあり，規模は一部が調査区外のため全体の規模は不明だが1.3m×1.2mの規模で検出され，床面との比高差は10～20cmを測る。

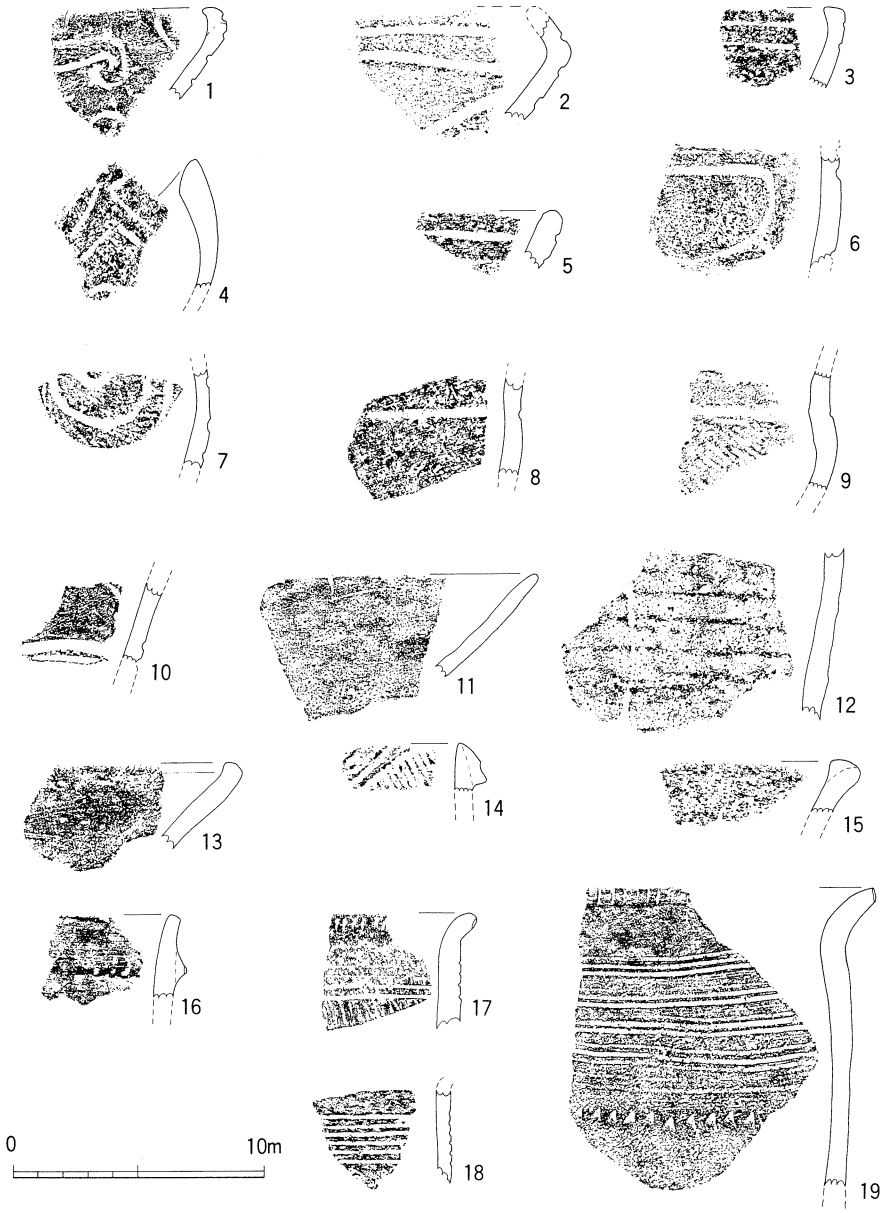
土層の堆積状況（第６図，図版４・５）は地山の上に黒色土（第14層）が薄く流れ込み，その上に地山と思われる灰白色粘土ブロックや黄褐色粘土ブロックが多く混じった黄褐色土が堆積する。

出土遺物は遺構内全域から出土しているが，東側壁際から多量に検出された。これらの遺物は上層から縄文時代後期を中心とした土器が，床面付近からは弥生土器，石器，剝片などが出土している。1976年の護岸工事の時の残土が上に積まれたため上部に古い遺物が出土する現象が起きたと推

定される。

この遺構は平面形が不整形であること，床面が凸凹が著しいことなどから，遺構の性格を竪穴住居跡と断定するのに若干躊躇される。そのためここでは「竪穴住居跡状遺構」とした。

出土遺物（第７～10図，図版11～14）　縄文土器，弥生土器，石器が出土しているが，いずれも小片で全形を窺えるものはない。



第７図　石台遺跡SI01出土土器(1)（1：3）

縄文土器（第７図１～16）は，後期，晩期の土器が出土している。有文土器のうち第７図１～８，10はいわゆる磨消縄文土器で，10以外は２本沈線による施文である。１，２が浅鉢，３～５が深鉢である。これらは沈線端部が不連続の入り組み状になっているものが多く，縄文帯の幅も狭いものばかりである。10は縄文帯の幅が非常に狭く，３本沈線の可能性がある。これらは，典型的な３本沈線の土器はないものの，福田Ｋ２式に併行すると思われる。

第７図９は胴部に縄文を施し頸部と胴部の境に沈線をいれるもの，14は口縁部を肥厚させ複合鋸歯文が施されるもので，ともに彦崎Ｋ１式に併行すると思われる。

第７図16は口縁部の下に突帯を付け，その上に浅い刻み目をいれる土器である。突帯を付けるという点では晩期の突帯文土器に似た要素であるが，突帯が口縁部のかなり下に付けられること，胎土が晩期後半のものと違うことなど，通常の突帯文土器とは異なる要素も多い。土器の趣きは瀬戸内地方の中山Ｂ式に似ているが，中山Ｂ式の分布が広島県西部，島根県西部に限られるとされることから，この土器についていまのところ型式を当てることは困難である。

第７図11～13，15は無文の土器である。11，13が浅鉢，12，15が深鉢である。15は後期，その他は晩期と思われる。

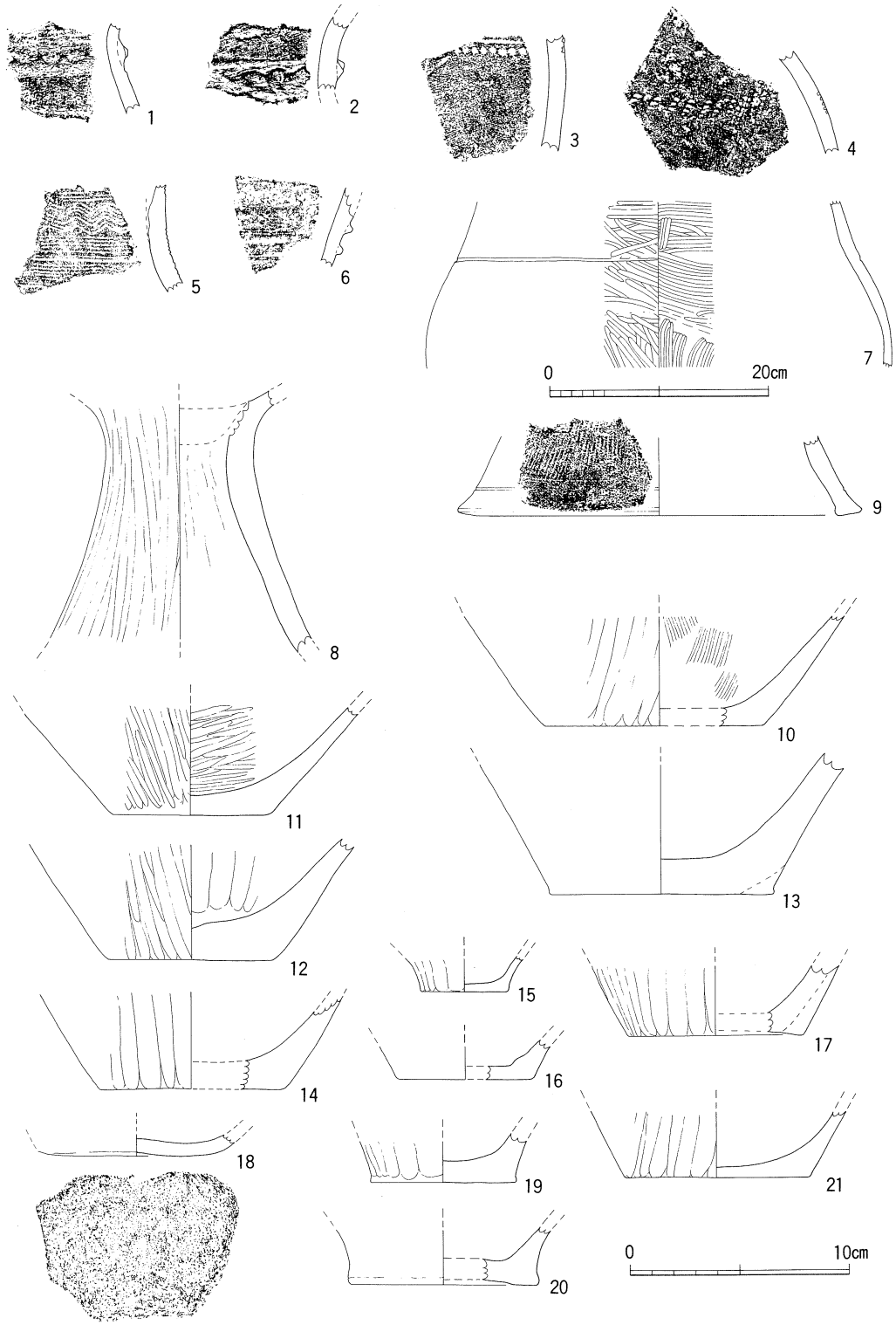
第８図18は深鉢の底部である。中央部がややくぼみ，胴部との境は不明瞭である。後期または晩期と思われる。

第７図17～19，第８・９図は弥生土器で，そのうち第７図17，18，第８図１，３，７，13は前期，その他は中期である。

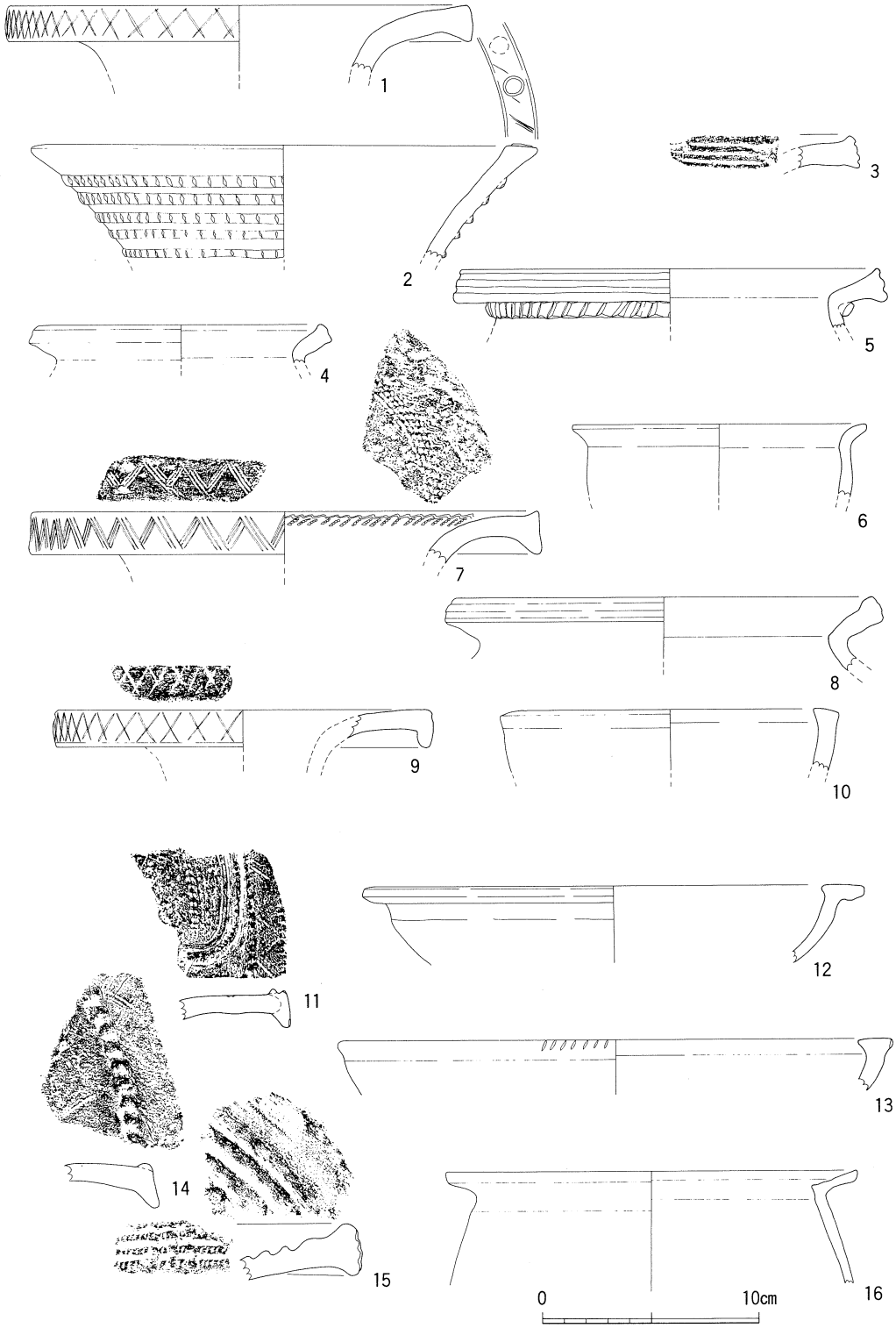
第８図１，７は壺である。１は頸部に刻み目突帯文，７は肩部にへらによる１条の沈線文が施されている。第７図17，18，第８図３は甕で，へら状工具によって第７図17は３条，18は６条の沈線文が，第８図３は沈線文の直下に円形の刺突文が施されている。13は甕の底部と思われる。

第８図２，４～６，第９図１～３，７，９，11，14，15は壺である。第９図２は口縁部が直口気味に，その他は朝顔型に大きく開き口縁端部は肥厚または垂下するものである。口縁端部には鋸歯文，格子文，斜線文などが施されるもの（第９図１，２，７，11，14）と，擬凹線文が施されるもの（同３，15）があり，後者がやや新しいと考えられる。同図７，11，14，15には内面にも突帯文，刺突文，波状文などが施されている。なお第７図７の胴部には明瞭なモミ痕がみられる（図版26）。

第７図19，第９図４，５，６，８，16は甕である。第７図19，第９図６は口縁部が外反，その他は「く」の字形に屈曲するもので，前者が中期前葉，後者が中期中葉と考えられる。第７図19は３条一単位のクシ状工具による施文を５回繰り返している。第９図16は口縁端部が平坦になるものの肥厚しない。これらは，中期中葉でも他よりやや古いと考えられる。４，５，８は口縁端部が肥厚し擬凹線を入れるものである。



第8図　石台遺跡SI01出土土器(2)（1：3, 7は1：6）

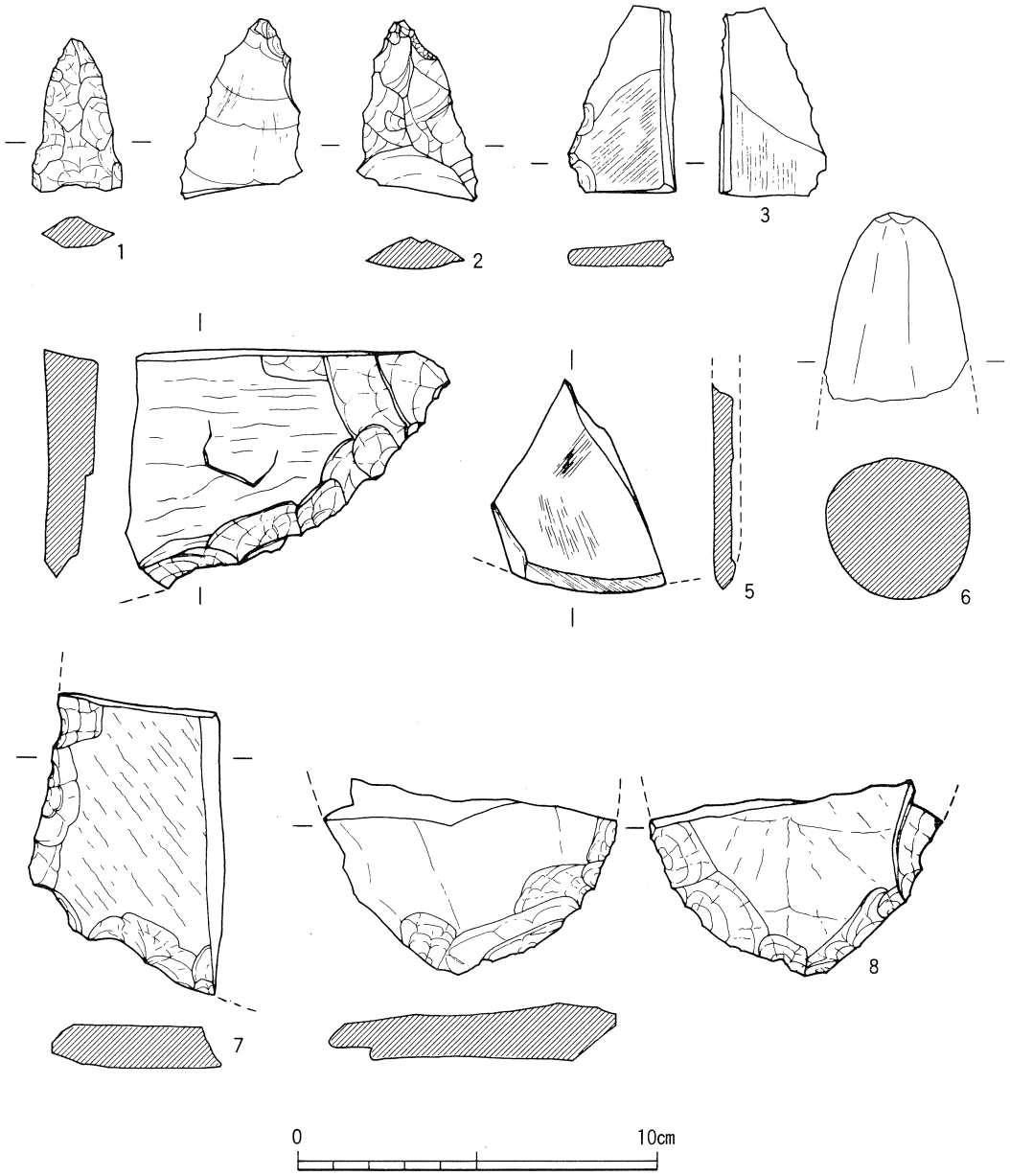


第９図　石台遺跡SI01出土土器(3)（1：3）

第９図10は鉢で，口縁端部は肥厚し平坦面をなす。

第８図８，９は高坏脚部，第９図12，13は高坏坏部である。第９図12は口縁部が鍔状の，13は肥厚して平坦面をもつ。

石器（第10図）は石鏃（同図１，２），擦り切り技法による石器未成品（同図３），磨製石斧（同図６），打製石斧（同図７，８），磨製石包丁（同図５），打製石斧様石器（同図４），剝片などが出



第10図　石台遺跡SI01出土石器(4) (1～3は７：10，4～8は１：２)

土した。第10図２は石鏃と考えたが，細かな剝離はなく一面には主要剝離面が大きく残る。石鏃としては調整が雑であることから，別器種の可能性もある。同図４，７，８はいずれも刃部に雑な二次調整が施される。７は側片とした部分につぶれがみられることから，この部分が刃部かもしれない。また８の一面には自然面が大きく残ることから打製石斧未成品の可能性がある。５は欠損部分が大きいが，非常にていねいに研磨されている。６は磨製石斧の基部で，断面形はほぼ円形を呈す。

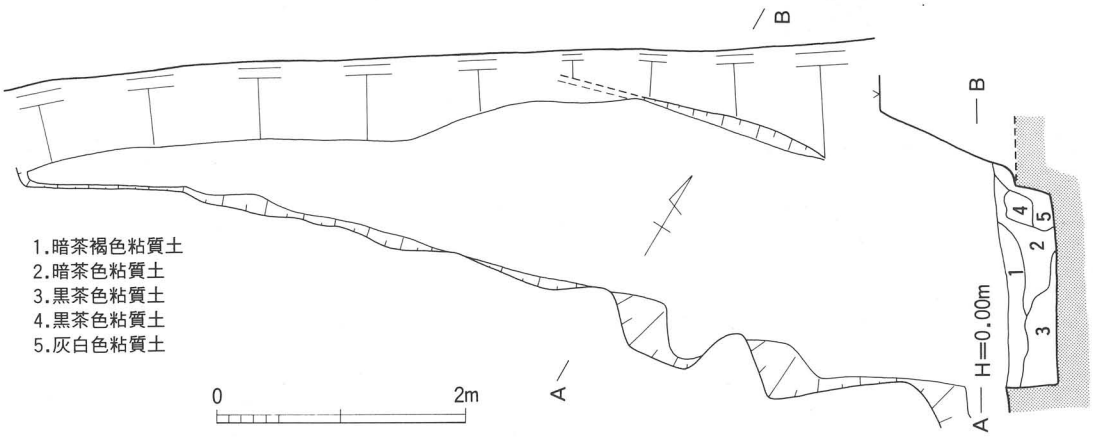
以上の出土遺物のうち第８・９図に示した土器群が弥生時代中期中葉でもやや新しい様相であることから，SI01はこのころの遺構と考えられる。

(3) 溝状遺構（SD01　第11図，図版６・７）

竪穴住居状遺構の西側に重複して標高－0.3mで確認された。現在，流路によって北側の壁は壊されているようで，南側の壁だけが長さ８ｍ，下幅1.4mの規模で検出された。壁はほぼ垂直に近く掘り込まれ，壁高は約0.5mであった。溝は東西方向にほぼ直線状に伸びる。一部では壁がオーバーハングとなっている。

底面は東側に向かって低くなっており，西側との比高差は10cmほどである。最も低い部分は標高－0.6mである。

遺物はすべて覆土内からの出土である。遺物は弥生時代中期の土器であり，その中でも底部が多い。また，玉髄質の石器もある。



第11図　B区溝状遺構実測図(1：60)

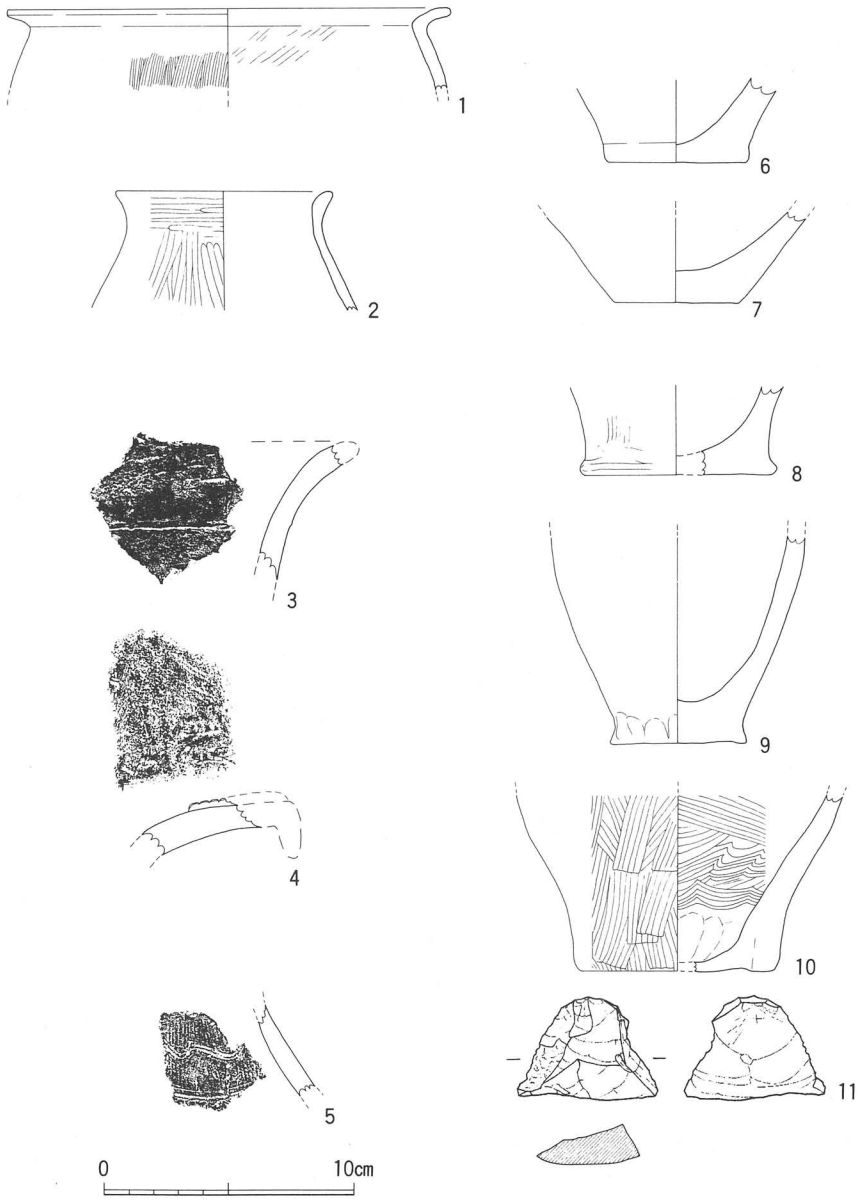
竪穴住居状遺構との前後関係は土層の観察から溝状遺構が古いと推定される。

出土遺物（第12図，図版14）　SD01からは弥生土器，石器が出土している。

第12図２，３，６，８～10はいずれも前期の土器で，３が壺，２が短頸壺，その他が壺または甕の底部である。３の頸部には，浅い段が付けられている。

同図１，４，５，７は中期中葉の土器で，１が甕，４，５が壺，７が壺底部である。１は頸部が「く」の字形に短く屈曲するもので，口縁端部は肥厚しない。４は口縁部内面に斜格子文，突帯文などが，５は頸部にクシ描による波状文が施されている。

同図11は玉髄質の剝片である。背面には自然面がわずかに残り，主要剝離面と同様の方向の剝離がみられる。二次加工はみられない。



第12図　石台遺跡SD01出土土器・石器（1：3）

これらの遺物のうち，SD01に伴うと考えられるのは１，４，５，７である。これらはSI01の時期と考えた遺物群と同様中期中葉であるが，SI01の土器群よりやや古い様相を呈している。これはSI01とSD01の重複関係と矛盾するものではない。

(4)　A区第３層出土遺物

A区第３層からは比較的まとまった量の遺物が出土している。この層からは主に縄文土器が出土しているが，わずかながら弥生土器も混在している。しかし，この層は１～２層と違い1976年の工事の影響を受けていない包含層であるため，ここでは１～２層の遺物と分けて掲載する。

縄文後期　第13図１～23は後期の土器である。恩田氏採集資料では後期の土器は多くみられるが，今回の発掘では出土数はわずかである。１，２，４，８，９，10，20は深鉢，12，13，21は壺（12，13は把手部分），14，16，19，22は鉢，15は異形土器である。

１～９は磨消縄文土器である。５は沈線が太いことから中津式と思われる。１～４，６～９は沈線幅や縄文帯幅が狭いこと，沈線文が不連続で端部が入り組み状になっている（4）ことなどから，福田Ｋ２式と考えられる。壺も当該期のものが多いことから，12，13，21も福田Ｋ２式と思われる。

14，19は口縁端部が肥厚する鉢形土器で19には端部外面に縄文がみられる。ともに彦崎Ｋ１式である。

10，11，16～18，20，22～24は型式の比定が困難な土器である。16～18，23は沈線文が施される。沈線文は16が細く，17，18，23はやや太い。18は沈線端部が入り組み状になる渦巻き文である。15は無文で平面形が沓形を呈す。22は横走する条線がみられる。24は無文の粗製土器である。これらは小片のため詳細な時期は不明であるが，布勢式または彦崎Ｋ１式の時期と考えたい。

縄文晩期前半　第13図25～36，第14図，第15図１は晩期前半の土器と考えた。第13図25～36，第14図５は沈線文が施される土器である。沈線文は口縁端部近くに１条から２条はいるものと，胴部稜のやや上に１～２条はいるものとがある。また同図35は口縁部内外面とも２条の沈線文が，36は横沈線の上にさらに縦の短沈線が入っている。これらは小片のため全形を窺うことのできるものはないが，第13図35が皿形の浅い器形，その他は第14図１～３，６～10と同じ器形と思われる。第14図１～３，６～10は胴部中程で強い稜がつき，口縁部が外反または内傾する。稜より上の口縁部は長いもの（第14図７～９など）と短いもの（同図６）などがある。口縁端部はほとんどが平坦に面取りされているが（第13図28，30～32など），まれに丸いままのものもある（同図26）。これらのうち第13図28，33，35などは外面がていねいに研磨されている。ほとんどの土器は摩滅が進んでいるため磨き調整が確認でないものが多いが，本来はていねいに磨かれていたものも多いと思われる。これらは晩期前葉でも古い時期に位置づけられると考えられるが，周辺地域との型式の対応などは不明である。なお，第13図33にはモミ痕と思われる圧痕がみられる。

第14図13，14も胴部に沈線文が施されるものだが，沈線は浅く引かれ幅は広い。13の右端には菱形に掘り込まれた文様がみえる。これらは胴部に屈曲がほとんどみられない器形のようである。これらは瀬戸内地方の岩田４類に似た文様があり，土器の様相も似ていることから晩期初頭に位置づけられるが，上記沈線文土器との前後関係は不明である。

同図11は底径４cmを測る小型の器種で，胴部は急に立ち上がる。胴部に細い沈線によって曲線文様が描かれる。15も小型の器種であるが，無文である。

第14図４，12は浅鉢で４は口縁端部が上方に繰り上がるもの，12は口縁端部が肥厚し内面をていねいに研磨するものである。16は口縁端部がやや長く伸びる浅鉢と思われるが，鉢の可能性もある。４は晩期前半でもやや新しいと思われる。

第15図１は口縁端部に大きな刻みを入れる土器である。器壁は前述の土器に比べると薄く，調整は二枚貝条痕によっている。これは文様はないが調整，器厚などが瀬戸内東部の谷尻式に似ることから，突帯文出現直前と考えたい。

第15図２～５はボール形の浅鉢で，口縁端部がうすく，わずかに外反している。口縁部の形態から突帯文土器に伴う浅鉢と考えたが，詳細な時期は不明である。

第15図６～25，第16，17図，18図１～３は突帯文土器である。小片が多く全形が窺えるものは少ないが，口縁部，頸部が外反するものは少なく第15図６を図示したにすぎない。その他は口縁部が直口するか内湾する砲弾形の器形である。口唇部はほとんどが先細りになっている（第15図10，12など）が，やや厚めのもの（第15図19，20など）や，面取りして平坦になるものもわずかながらある（第15図25，第16図10，第17図５，13など）。第16図２や４のように突帯が口唇部と密着しているために一見口唇部が厚くみえるものもあるが，突帯貼り付け前の口唇部はほとんどが先細りとなっているようである。また口縁部を内側から押さえるため，口縁部がわずかに外傾または外反するものが非常に多い（第15図16～24など）。これは突帯貼り付け後にこの部分を押さえたためと思われる。

突帯の形は，断面形が二等辺三角形を呈するものが一番多く（第15図10～19など），次にかまぼこ形を呈すものが多い（第16図10，第17図３，５～17など）。前者はいずれも突帯の上下をつまむようにして調整しているようで，第17図26のように突帯がうすい鍔状になるものもある。また，突帯端部が鋭い稜になるものも一定量みられる（第16図９，11，15など）。突帯の高さは高いものが多いが，第15図15などのように非常に低いものもある。

突帯の貼り付け位置はほとんどが口縁部近くにあり，口唇部に密着したものも多い（第17図７～25など）。突帯が口唇部の下方に位置するものは第15図20，25などわずかである。全体に突帯が口縁部と一体化しているといえる。

文様は刻み目だけである。口唇部と突帯上に刻み目があるもの，突帯上にだけ刻み目があるもの，刻み目がないものがあるが，口唇部と突帯上の２ケ所に刻み目があるものはわずかで，第15図18，20，第17図５，13の４点を図示したにすぎない。多くは突帯上にのみ刻み目が施されているが，刻み目をどこにももたないものも多い。刻み目は深いものが多くまれに浅いものがある（第15図21，第16図２，７）。工具は先端の鋭い工具が使用されており，指または棒状工具によるものは確認していない。刻み目の形は「D」字形，「V」字形のみで，「O」字に近い「D」字もある。

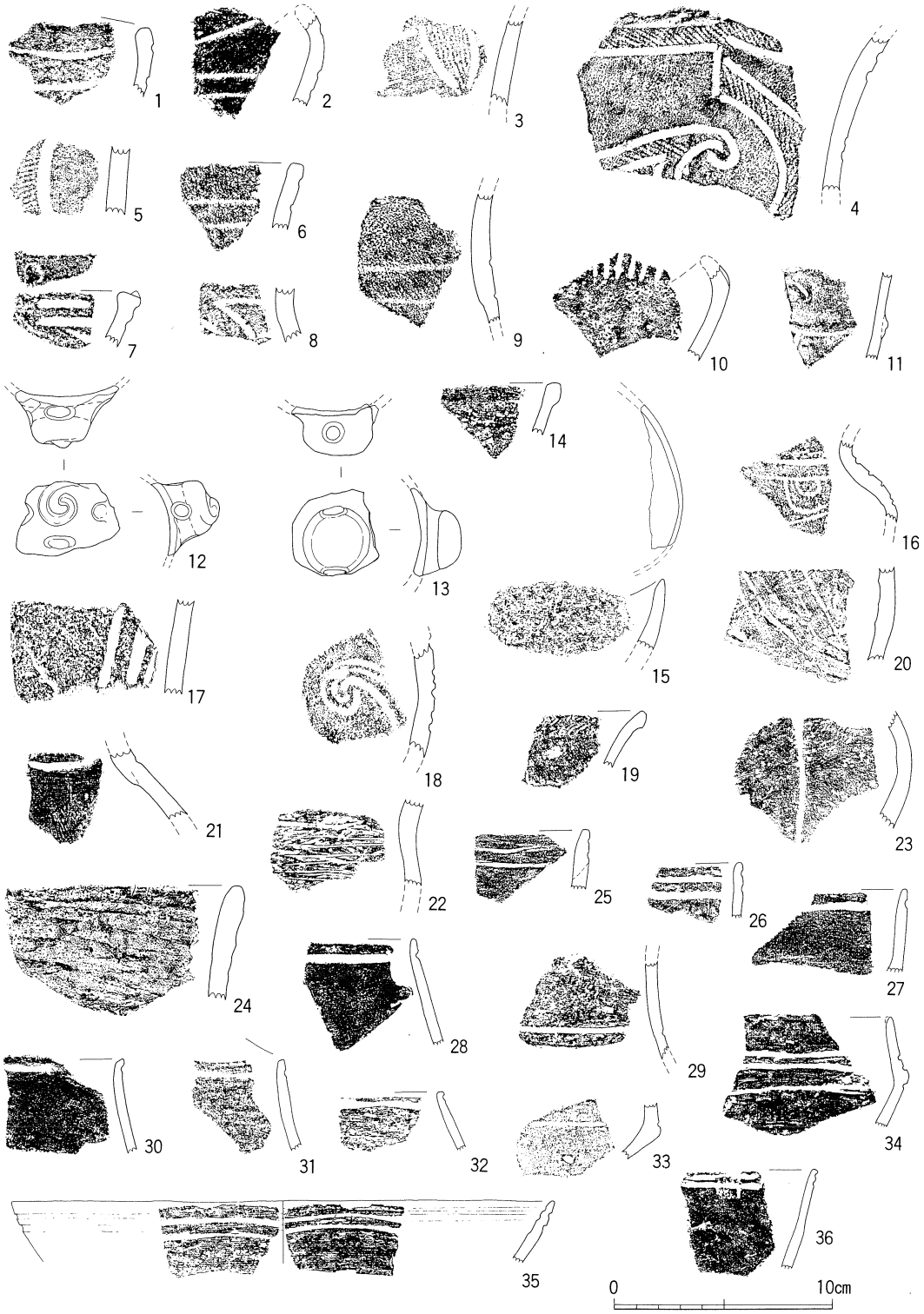
これらの突帯文土器は，前池式に併行するような土器が出土していないことから，突帯文土器の中でもやや新しい時期と思われる。

第18図２は２条突帯文土器の胴部突帯である。胴部があまり屈曲しない器形で，内外面ともなでていねいに調整されていることから，２条突帯でもやや新しいと思われる。

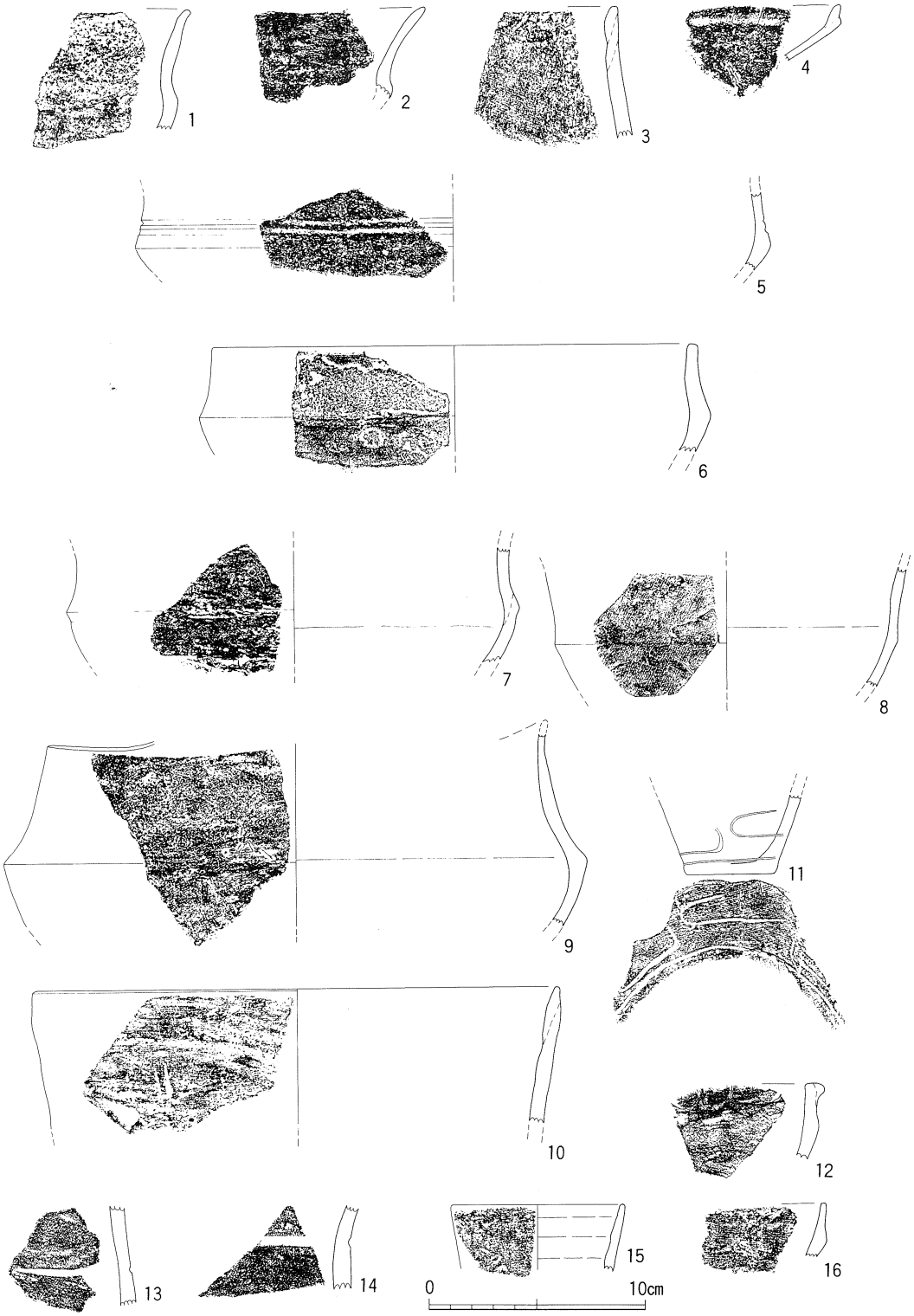
同図３は壺と考えた。口唇部は面取りされ，そのやや下に断面形が二等辺三角形の突帯が付けられている。

同図４～11は底部である。いずれも晩期であろうか。11は内面にクモの巣状の調整痕が残る。同図12は弥生中期中葉，13は古墳時代後期の甕である。これらはこの包含層の堆積時期を示すと思われる。

同図14は磨製の石包丁，15は石垂である。

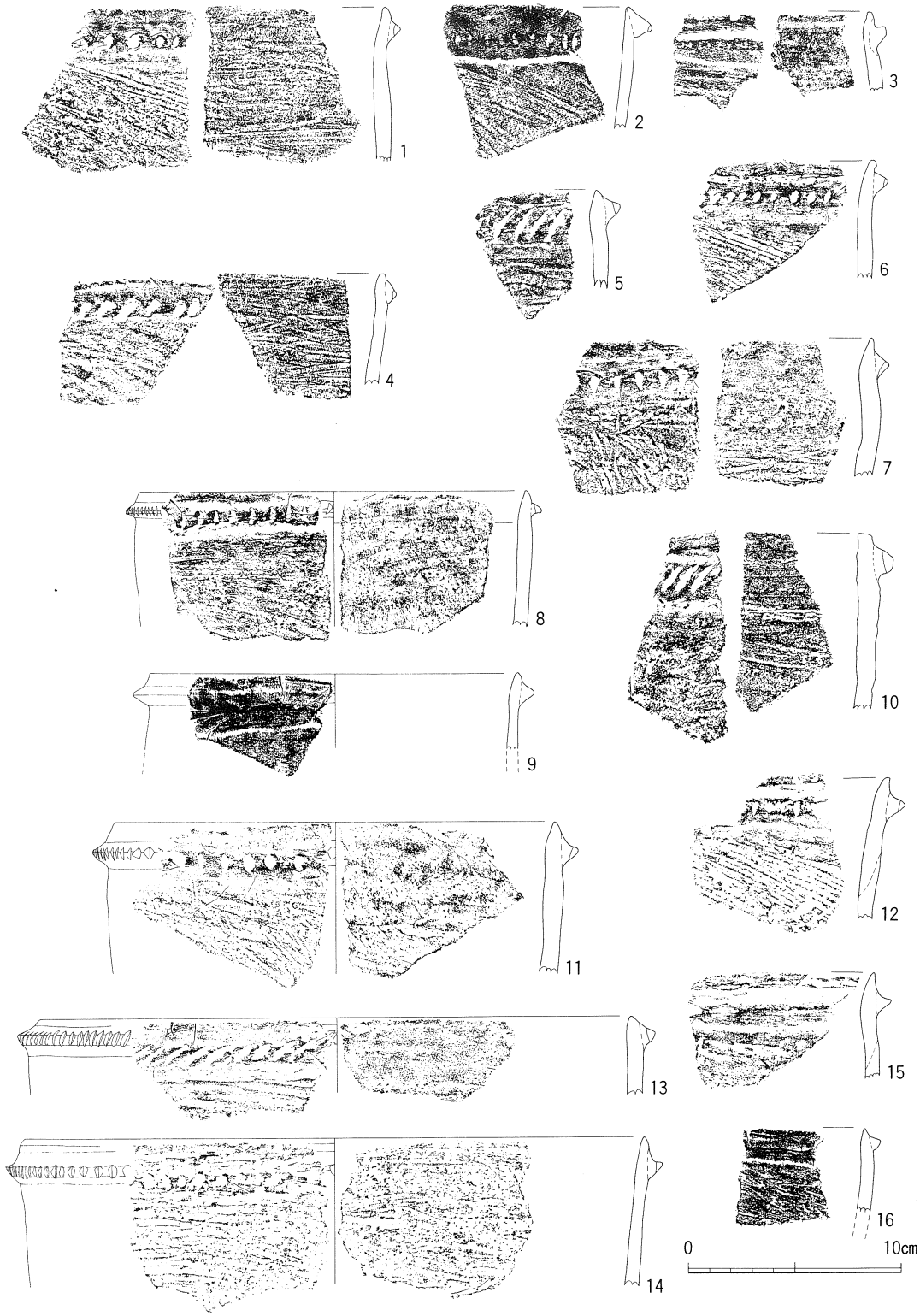


第13図　石台遺跡A区第３層出土土器(1)（1：3）



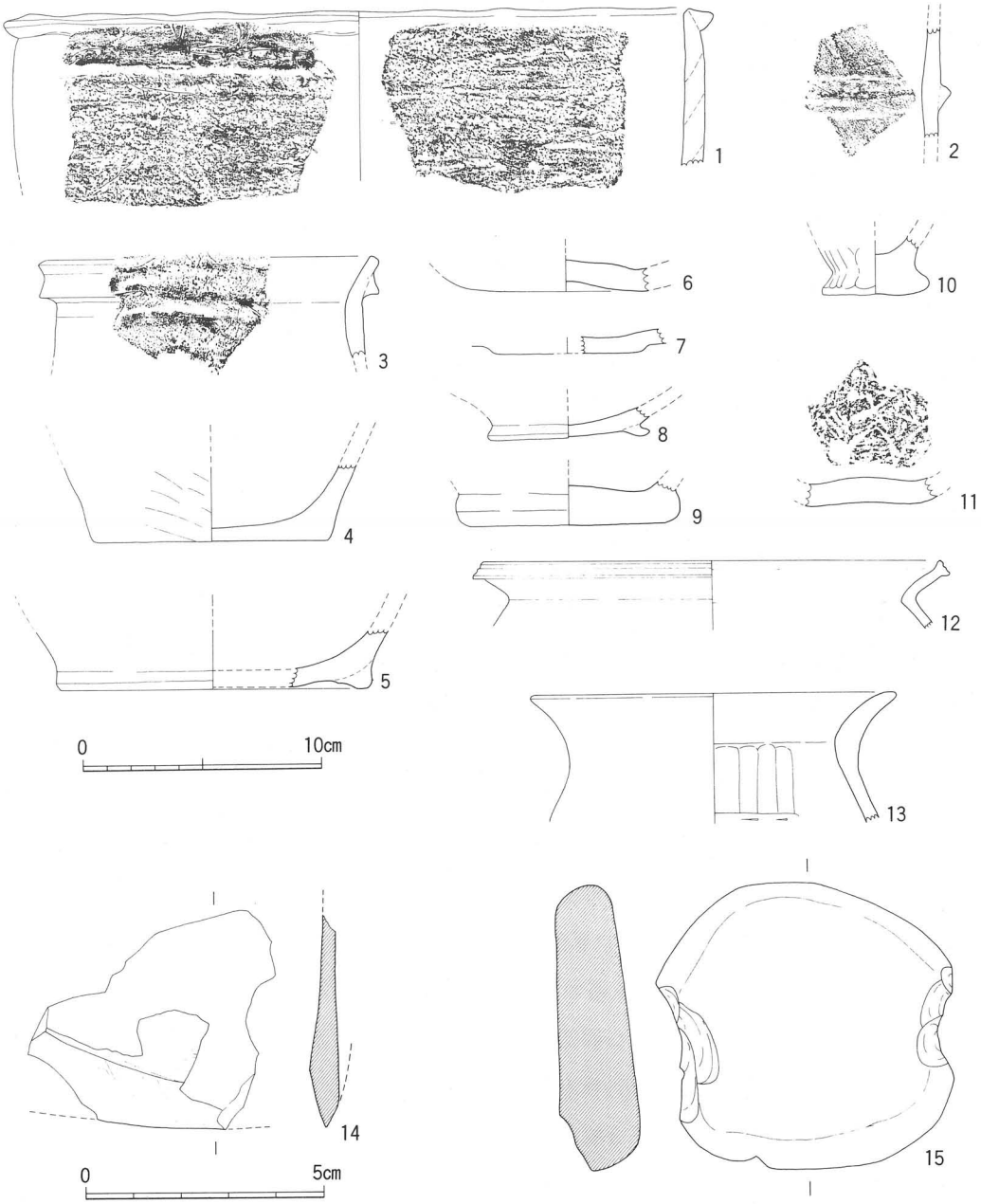
第14図　石台遺跡A区第３層出土土器(2)（1：3）

第15図　石台遺跡A区第３層出土土器(3)（1：3）



第16図　石台遺跡A区第３層出土土器(4)（1：3）

第17図　石台遺跡A区第３層出土土器(5)（1：3）



第18図　石台遺跡A区第３層出土土器(6)(1～13，1：3)・**石器**(14・15，2：3)

(5) その他の遺物（第19図～第23図）

SI01，SD01，A区第３層以外の遺物を出土した層は，二次堆積土の可能性があり一括性が疑わしい。そのため遺構，層位と切り離してここで扱う。

縄文土器（第19図～第22図６）　第19図１～13，17は後期の土器で，１，17が浅鉢，２～６，７，13が深鉢，11が壺である。

１～６，11は磨消し縄文土器である。口縁部の形，沈線文の幅，縄文帯の幅などから，福田Ｋ２式に併行すると思われる。11は沈線が非常に細く，縄文もまばらである。還状の把手が付けられている。17は無文であるが内面に段がつくことなど，やはり福田Ｋ２式の特徴をもつ。７は口縁部が肥厚し，その上に複合鋸歯文が施される土器，８は縄文が施される土器で，ともに彦崎Ｋ１式と思われる。なお７の頸部には縄文が施されている。

第19図14～16，18～32，第20図１～３，６は晩期前半の土器である。14～16，19，20，24，25は口縁部または胴部に沈線文をいれるもので，胴部は屈曲して稜ができる。14～16の表面はていねいに研磨されている。18，22，32は無文で調整はやや粗いが胴部が屈曲した器形である。23は胴部に浅く広い凹線を引き，頸部にＸ字文が描かれる。26は口唇部に内側から刻み目が施されている。第19図28～30，第20図１～３，６は浅鉢である。28，30は深く広い沈線によって文様が描かれており，一見レリーフ状の文様にみえる。29は非常に細い沈線によって縦および斜方向に文様が描かれている。第20図６は口縁部にそって深い沈線を引き，それと直交するように垂下する突帯がつけられている。第20図１～３は無文の浅鉢で，晩期前半とする根拠はないが，１，２の口唇部が面取りされていること，３の口縁部が屈曲して外反していることから後半まで下らないと考えた。

第20図４，５，７は浅鉢である。口唇部が先細りであることから，突帯文に伴う浅鉢と考えた。

第20図９～20，第21図は突帯文土器である。第20図８は頸部に山形の沈線文を入れた土器である。口唇部と突帯に刻み目があるが，口唇部が先細りであること，突帯が口唇部にかなり近づいていることから，沢田式に併行すると思われる。

この他の突帯文土器は，A区第３層出土の突帯文土器と同様な特徴を持つ。器形のわかるものは口頸部がくびれて外反するものはなく，すべて砲弾形の器形である。ほとんどが口唇部が先細りになるもので，面取りされるのは第21図14，15のみである。口唇部を内側から押さえるものもかなりあり（第20図９～14など），面取りされる14，15も面取りというより押さえる意識があったのかもしれない。突帯の形は上下をともに調整する断面形二等辺三角形を呈するものがほとんどで，突帯頂部が鋭い稜となるものも多い（第20図14～20，第21図９，15，18など）。第21図３のように突帯が垂れ下がり，突帯下面が未調整のものは少ない。

突帯の貼り付け位置は，第20図９～11が口縁端部よりやや下方であるが，それ以外は突帯と口縁

部との一体化がかなり進んでいる。第21図11～21などは口唇部に完全に接して付けられている。

刻み目は突帯上にのみ施されるものが一番多く，口唇部と突帯の２箇所に施されるものは第21図４だけである。例外的に突帯上に刻みがなく口唇部のみに刻みがあるものが１点だけある（第21図６）。刻み目がまったく施されないものも多い。

第21図23は壺と思われる。口縁部上端に低いかまぼこ形の突帯がつけられている。

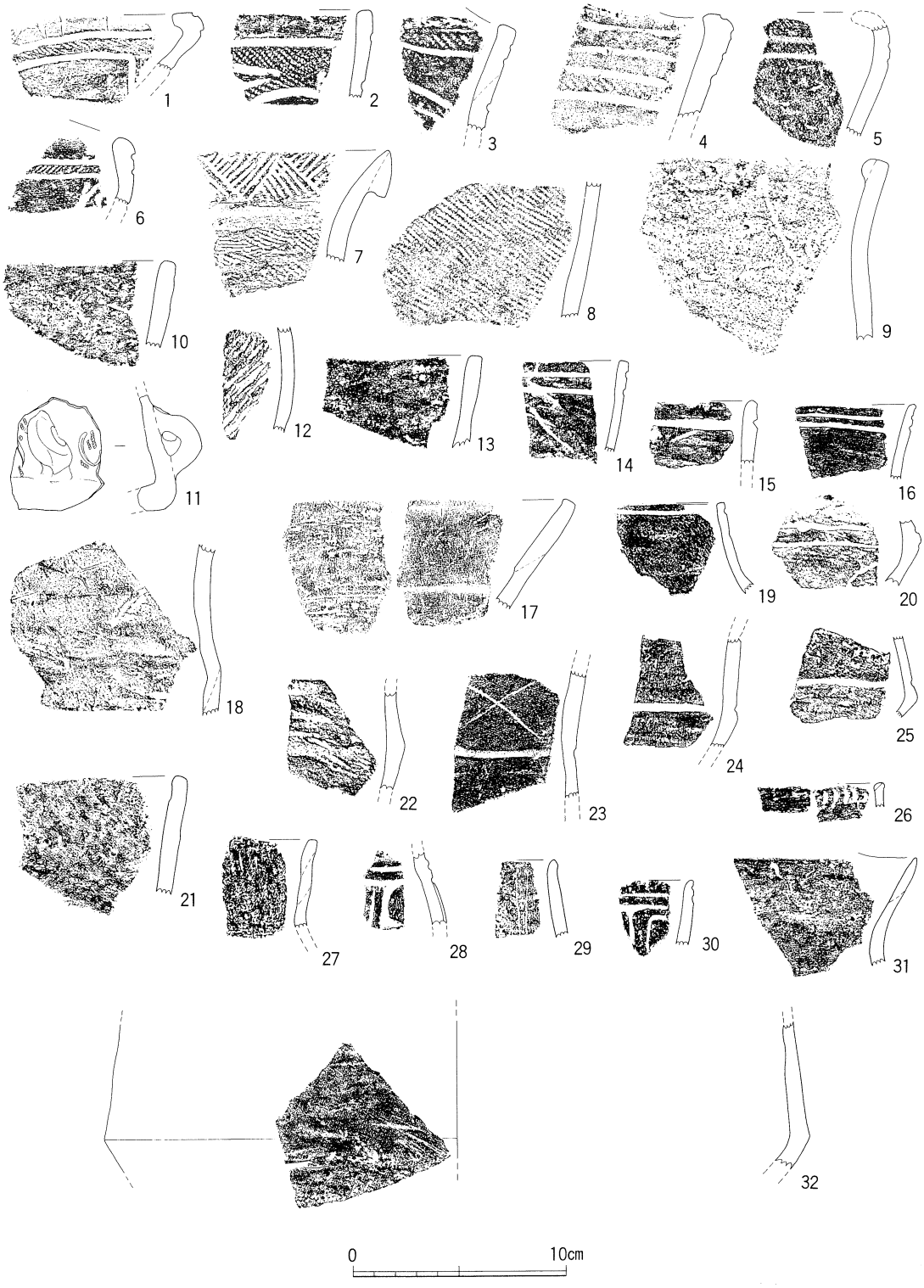
第22図１～６は縄文土器の底部である。４は方形の底部である。

第22図７～19，第23図１～４は弥生土器である。第22図７～18は前期の土器で，７～10，13，16，17が壺，11，12，14，15，18が甕である。17に段が付けられている。

第22図19，第23図１～４は中期の土器で，第22図19，第23図１が中期前葉，第23図２～４が中期中葉である。

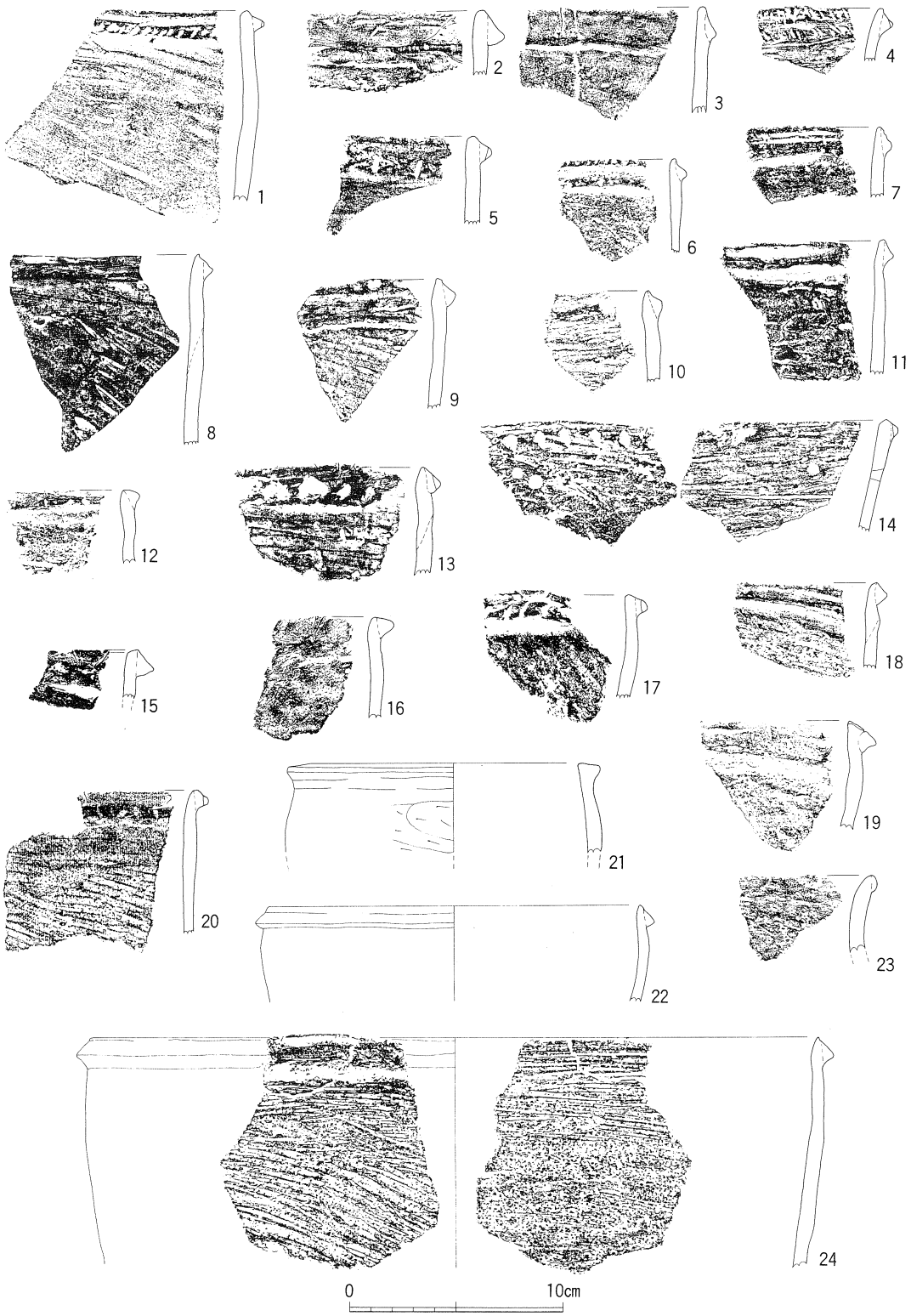
第23図５は土師器甕，６は須恵器坏である。前者は古墳時代中期頃，後者は第３期の須恵器である。

第23図７～13は石器で，７，８が石鏃，９～11が剝片，12が打製石斧の基部，13が磨製石包丁である。９は横長，10，11は縦長の剝片で，いずれも背面，腹面とも同一方向から剝離されている。11の側縁には小さな剝離が，さらに両者の側縁には刃こぼれ様の使用痕がみられる。13は刃部のみに研磨が施されている。これは大型の石包丁の欠損品とも考えられるが，周縁の摩滅の具合からこれが完形の可能性もある。

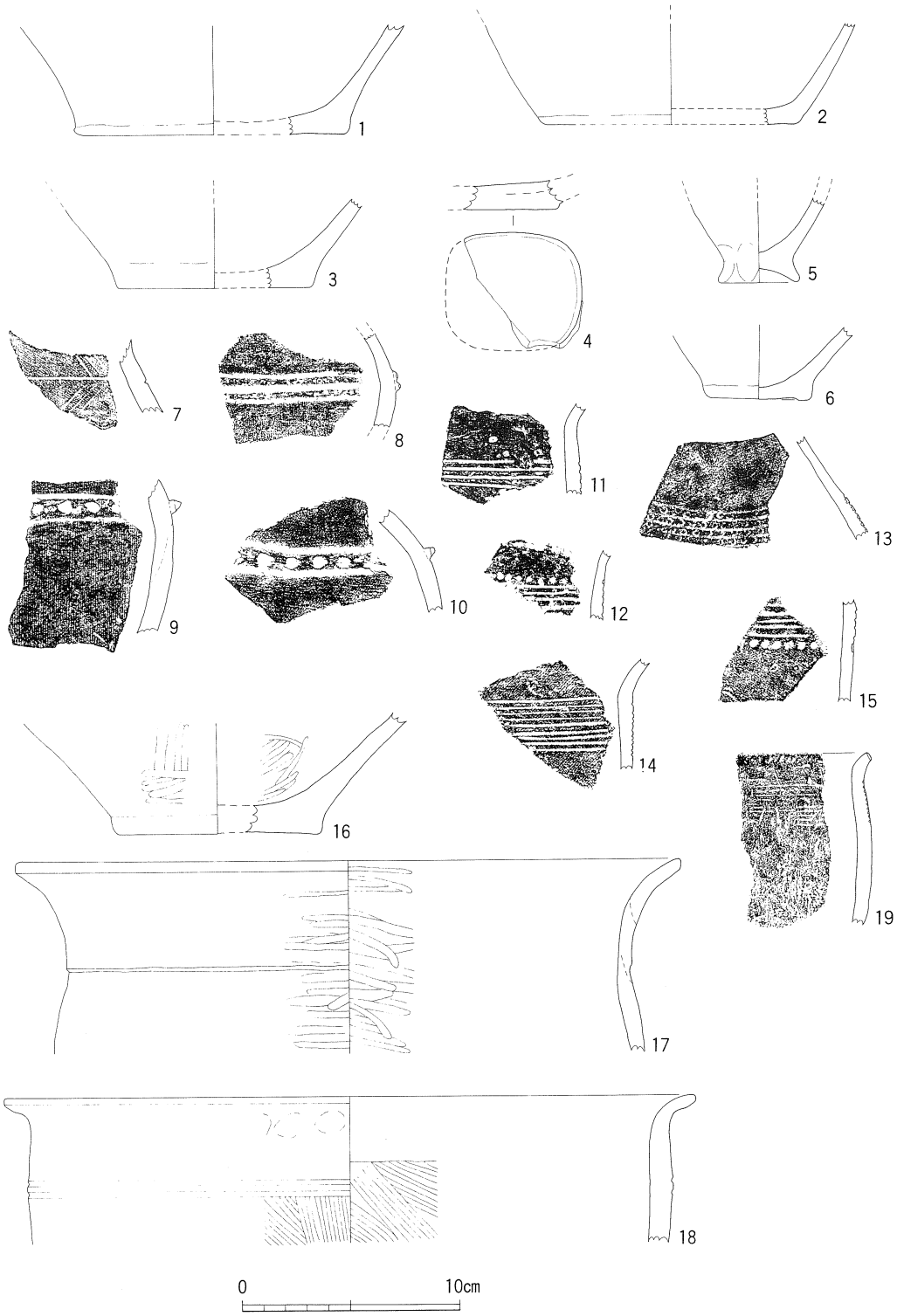


第19図　石台遺跡出土土器(1)（1：3）

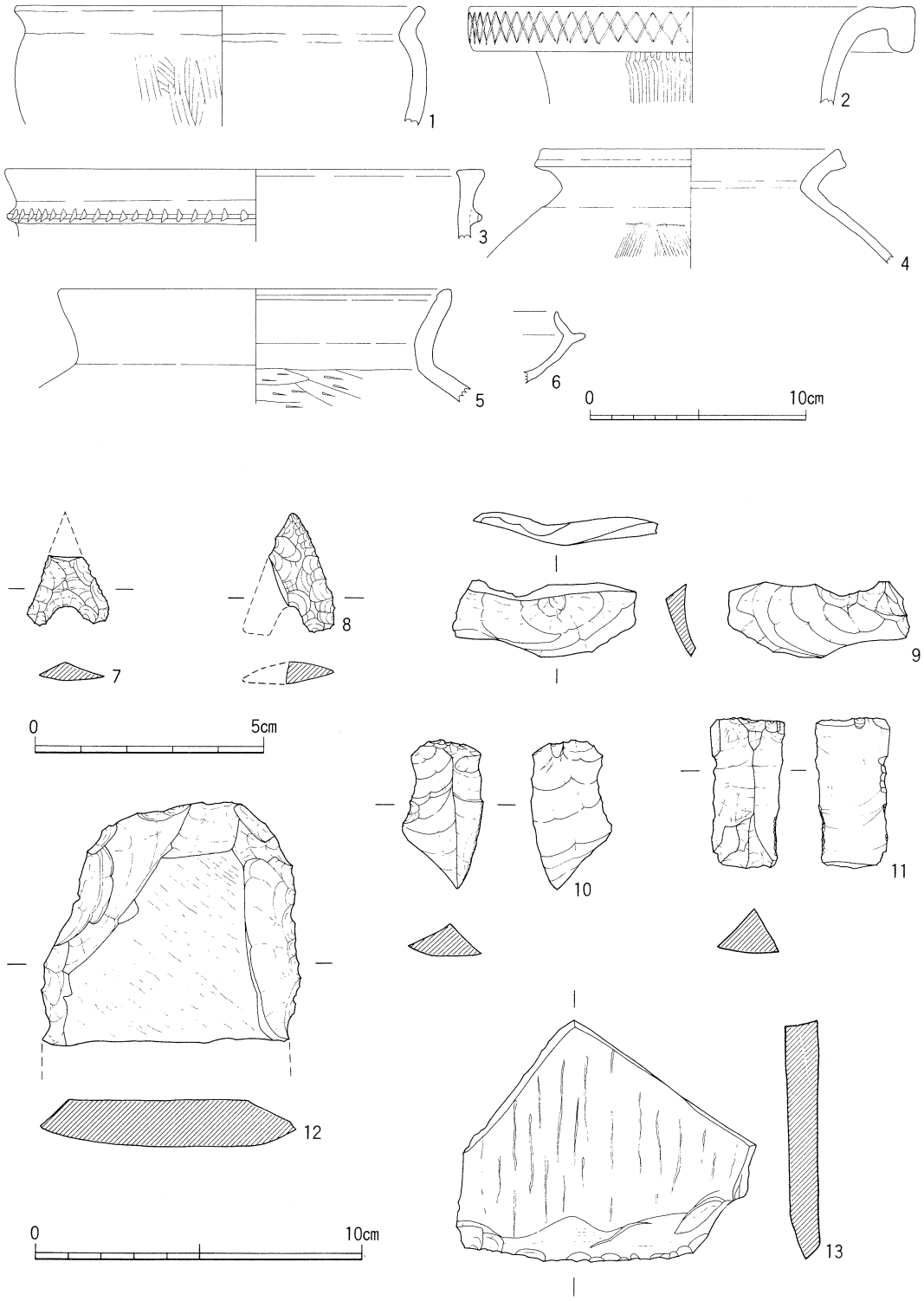
第20図　石台遺跡出土土器(2)（1：3）



第21図　石台遺跡出土土器(3)（1：3）



第22図　石台遺跡出土土器(4)（1：3）



第23図　石台遺跡出土土器・石器(5) (1～5は 1：3，7・8は 7：10，9～13は 1：2)

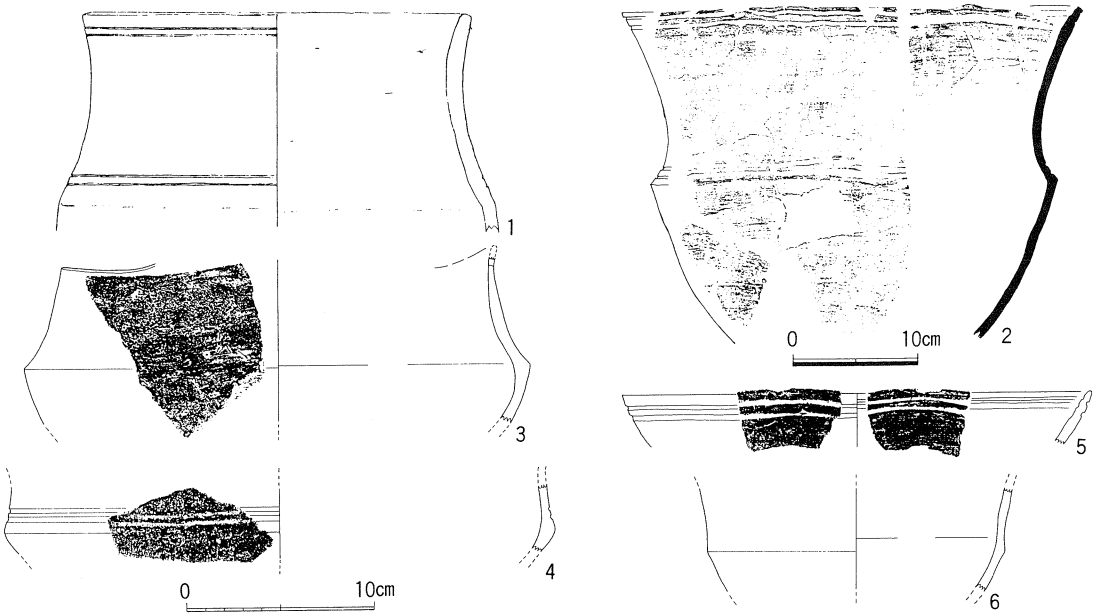
V　小　　結

石台遺跡では恩田清氏が1977年に採集された縄文土器のなかにモミ痕のついた土器片があり，発見当初から米が弥生時代以前に存在することを示す資料として注目されていた。この土器は小片であるが，調整などから突帯文土器の胴部であることがわかる。現在では突帯文土器の一部は弥生時代早期とする考え方が主流となりつつあるが[註1]，それは置くとしても，島根県ではこれまでこれ以外にモミ痕がついた突帯文土器の出土はなく，恩田氏が採集されたこの土器は島根県で米の存在を示す最古の資料であった。

今回の発掘調査で出土した資料のうち第13図33に図示した土器は，これをさらに遡る可能性がある。モミ痕と思われる圧痕は，専門家の鑑定が行われてないため断定はできないが，圧痕の形状，圧痕内の筋状の痕跡など，稲の籾と非常に似ている（図版26下１）。この土器は後述するように若干の検討が必要ではあるが，少なくとも突帯文土器の時期まで下るものではなく，晩期前葉または初頭の土器と考えられる。もしこの圧痕がモミ痕であるなら，山陰地方でも米の初現が縄文時代晩期前葉まで遡ることになる。これについては，近年，岡山県総社市南溝手遺跡などで縄文時代後期の土器にモミの圧痕があることが確認されており，当地方で晩期前葉に米が存在していても矛盾するものではない。

石台遺跡ではこの他にも弥生時代前期の土器にもモミ痕と思われる圧痕がついた土器が２点出土している（第８図７，図版26下２，３）。これらは上記縄文土器よりさらに明瞭な圧痕で，３にはモミそのものと思われる種子が圧痕内に残っていた（図版26下４）。弥生時代前期の土器にモミ痕がある土器は比較的多いが，これほど明瞭なものは珍しいといえる。ただしこれが本当にモミ痕であるかどうかは，今後専門家による鑑定が必要であろう。

今回の調査で出土した土器は縄文時代後期前半，晩期前半，晩期末または弥生時代早期の突帯文土器が主に出土している。縄文時代後期の土器は中津式が若干含まれるものの，主体となるのは福田Ｋ２式から彦崎Ｋ１式にかけてである。これは恩田氏採集資料でも同じ傾向がみられ，彦崎Ｋ２式以降の後期の土器は石台遺跡ではまったく出土していない。また晩期についても突帯文土器直前の土器や突帯文土器でも古いものはほとんどみられないようである。このことは石台遺跡は縄文時代後期以降弥生時代にいたるまで連綿とした遺跡ではなく，断続的に人が居住していたことを示している。この現象については人々の移動後にまったく違う人々が移り住んだというより，同じ集団が一定の領域の間を繰り返し移動した結果ではないかと想像される。この周辺の縄文時代遺跡については実態が把握できていないため，当時の人々の移動領域について考えるには資料が不足してい



第24図　1・2, 下鴨倉遺跡（1は注5, 2は注6より）**3〜6, 石台遺跡**（3は第14図9, 4は同5, 6は同8, 5は第13図35と同一）

るが，将来調査が進めば縄文時代の移動領域を設定することも可能であろう。

なお，これまでふれられることがなかったが，恩田氏採集資料に前期前葉の土器が一片ある（図版31上）。これは，C字の爪形文をもつもので，瀬戸内地方の羽島下層Ⅲ式でも新しく位置づけられるものである。島根県の東部平野部では早期末から前期前葉にかけての土器は西川津遺跡，佐太講武遺跡など比較的多くの遺跡で発見され実態が分かりつつあるが，その後の時期から中期末の間についてはほとんど解明されていない。石台遺跡でも状況は同じで，この期間は平野部では居住に適していなかったのであろうか。あるいはこの時期の遺跡が偶然発見されていないだけかもしれないが，これについても今後縄文海進の問題もからめて考えていかなければならないと思われる。

石台遺跡では前述のように縄文晩期の土器が多量に出土した。このうち，量はやや少ないが，晩期前半の土器が注目される。島根県では突帯文土器以前の晩期前半の土器は，松江市西川津遺跡[註2]，タテチョウ遺跡[註3]，益田市安富王子台遺跡[註4]などの土器が有名であるが，東部の遺跡である西川津遺跡，タテチョウ遺跡では突帯文直前と思われる土器がほとんどで晩期前葉の土器はあまり出土していない。近年このころの土器は増えつつあるが晩期前葉の土器群として抽出できるものはなく，当地方では晩期前葉の土器はいままで不明であったといえる。石台遺跡でも各時期の土器が混在しているので，晩期前葉の土器群を明確にするには良好な遺跡とはいいがたい。しかしながらその前後の後期末および突帯文土器直前の土器がほとんどみられないことから，ある程度は晩期前葉の土器の実

態を表していると思われる。

今回晩期前半とした土器は第13図25～36，第14図，第15図１，第19図14～16，18～32，第20図１～３，６である。このうち前葉と考えたのは第13図25～36，第14図，第19図14～16，18～30，32である。そのなかで胴部が強く屈曲するもの器形の土器や(第14図５～９など)，口縁部または胴部屈曲部に平行沈線が入るもの（第13図25～36など）が一群として抽出できる。これらは表面を研磨されるものがあり，黒色磨研土器の影響をうけたものと考えることができる。このような土器は全形がわかる例として仁多郡仁多町下鴨倉遺跡の土器がある。[註5,6] これも胴部中程で強く屈曲して稜がつき，口縁部は単純に外反する器形である（第24図)。仁多町は広島県境の山間部で当地とはかなり離れているが，同様な土器が広く分布していると思われる。この土器については岩田Ⅳ類土器として報告されているが，公表されている岩田Ⅳ類土器には同じ土器はないので「岩田Ⅳ類」と呼ぶのに若干疑問がある。[註6] しかし，下鴨倉遺跡の土器に沈線間に巻き貝の押捺があること，岩田遺跡の無文粗製土器に似た器形があることから時期的には岩田Ⅳ類と同じ時期と考えてもよいと思われる。

ここでは比較的理解しやすいものをとりあげたが、これらの型式学的位置，これに伴うべき粗製土器の実態，上記以外に晩期前半とした土器との前後関係，など不明な点は多く当地での晩期前半の土器編年は今のところ確定することはできない。今後に期待するところが大きいといわざるをえない。

出土量のもっとも多かった突帯文土器は，西川津遺跡，タテチョウ遺跡と比較すると，口縁端部に特徴がみられる。すなわち，口唇部が先細りとなり内側から押さえることによって口縁部が外反または外傾するものが非常に多い。また刻み目が口唇部に入れられるものは非常に少なく突帯上にのみ入れられるかまったくないものがほとんどである。これは恩田氏採集の資料をみても同様である。西川津遺跡，タテチョウ遺跡では口唇部が面取りされ，口唇部上にも刻み目が施されるものが一定量含まれるのとは対照的である。これは西川津遺跡，タテチョウ遺跡では存在する古い型式が石台遺跡では欠落していることを示すのかもしれない。全体としては石台遺跡の突帯文土器群が新しい様相であり，[註7] これを分離した西川津遺跡，タテチョウ遺跡の突帯文が古く位置づけられる可能性がある。突帯文土器の細分についても，今後さらに詳細な分析を加えたうえで検討されなければならない。

以上，石台遺跡出土の土器について縄文晩期を中心に述べた。上述のように当地の晩期の土器は不明な点が多く，今後検討されなければならない問題が多い。将来の良好な状態での出土を期待するだけでなく，現在ある資料を全体的に観察し実態を把握することによって，ある程度の編年は可能である。層位不明といって無視することなく，分析する必要がある。

註

1　平井　勝　「岡山県における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備10』　1988年
2　島根県教育委員会　『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ～Ⅴ』　1987～1989年
3　島根県教育委員会　『タテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』　1979～1992年
4　益田市教育委員会　『安富王子台遺跡発掘調査概報』　1981年
5　仁多町教育委員会　『下鴨倉遺跡緊急発掘調査』　1981年
6　仁多町教育委員会　『下鴨倉遺跡』　1990年
7　潮見　浩　「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部研究紀要18』　1960年
8　家根祥太　「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』　帝塚山考古学研究所　1984年

参考文献

春成秀爾　「中国　四国」『新版考古学講座』3　1969年
泉　拓良　「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』4　1990年
家根祥太　「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4　雄山閣出版　1981年
鎌木義昌・高橋　護　「縄文文化の発展と地域性9　瀬戸内」『日本の考古学Ⅱ』　1965年

石台遺跡土器観察表

器種	挿図番号	図版番号	出土地点 層位	法量（cm）	形態の特徴	文様	手法	備考
浅鉢	7－1	11－1	SI01			磨消縄文，RL	ミガキ	縄文後期
浅鉢	7－2	11－1	SI01 N4・5　E7・8			磨消縄文，RL	ミガキ	縄文後期
深鉢？	7－3	11－1	SI01		口縁肥厚	磨消縄文，RL		縄文後期
深鉢	7－4	11－1	SI01 N4・5　E7・8		波状口縁	沈線文	内面，ミガキ？	縄文後期
浅鉢	7－5	11－1	SI01			沈線文		縄文後期
深鉢？	7－6	11－1	SI01			沈線文		縄文後期
深鉢？	7－7	11－1	SI01			磨消縄文，RL		縄文後期
深鉢	7－8	11－1	SI01			磨消縄文		縄文後期
鉢	7－9	11－1	SI01			沈線文,胴部縄文，RL	ナデ	縄文後期
浅鉢？	7－10	11－1	SI01 N4　E8			磨消縄文，RL， ３本沈線？　浮線？	内外，ミガキ	縄文帯に赤色塗彩，縄文後期
浅鉢	7－11	11－1	SI01				ナデ	縄文後期？
深鉢	7－12	11－1	SI01				幅広のナデ	縄文
浅鉢	7－13	11－1	SI01		口縁肥厚		細密条痕？＋ナデ	縄文後期？
深鉢	7－14	11－2	SI01		縁帯部	複合鋸歯文		縄文後期
	7－15	11－2	SI01		口縁肥厚			縄文後期
深鉢	7－16	11－2	SI01 N4　E8		口唇平担	刻目突帯文（小「D」字）	ナデ	縄文晩期（前半？）
甕	7－17	11－2	SI01			口唇刻目文，直線文４（ヘラ）	ミガキ，ハケ目	すす付着，弥生前期
甕	7－18	11－2	SI01			直線文６（ヘラ）	ナデ？	弥生前期
甕	7－19	11－2	SI01		口唇面取	口唇刻目文，直線文15（クシ５回），三角形刺突文	ナデ	弥生中期
壺	8－1	12－1	SI01 下層			突帯上に刻目文	ナデ	弥生前期
壺	8－2	12－1	SI01 N4　E8			突帯上に刻目文	ヨコナデ	弥生中期
甕	8－3	12－1	SI01			沈線文（ヘラ），竹管状刺突文	ナデ，ミガキ	弥生前期
壺	8－4	12－1	SI01			刺突文（クシ）	ミガキ，ハケ目，ナデ	弥生中期

器種	挿図番号	図版番号	出土地点 層位	法量（cm）	形態の特徴	文様	手法	備考
壺	8－5	12－1	SI01 E7・8　N4・5 下層			直線文，15？（クシ），波状文7（クシ）		弥生中期
壺	8－6	12－1	SI01			貼付突帯		弥生中期
壺	8－7	12－1	SI01			ヘラ直線文	ミガキ	モミ痕あり，弥生前期
高坏	8－8	12－2	SI01				しぼり目，ミガキ	弥生中期
高坏	8－9	12－2	SI01 N9・10　E7	底径 17.2	端部肥厚		ハケ目，ナデ	弥生中期
	8－10	12－2	SI01	底径　9.9			ハケ目，ミガキ	弥生中期
	8－11	12－2	SI01	底径　7.1			ミガキ	弥生中期
	8－12	12－2	SI01 N4・5　E7・8 下層	底径　7.5			ナデ，ミガキ	弥生中期
	8－13	12－2	SI01	底径 10.2			ナデ	弥生前期
	8－14	12－2	SI01	底径　8.3			ナデ，ミガキ	弥生中期
	8－15	12－2	SI01 N4・5　E7・8 下層	底径　4.0			ナデ，ミガキ	弥生中期
	8－16	13－1	SI01	底径　6.1				弥生前期？
	8－17	13－1	SI01	底径　7.9			ナデ，ミガキ	弥生中期
	8－18	13－1	SI01	底径　7				縄文
	8－19	13－1		底径　6.6			ナデ，ミガキ	弥生中期
	8－20	13－1	SI01	底径　8.6				弥生前期？
	8－21	13－1	SI01	底径　8.4			ナデ，ミガキ	弥生中期
壺	9－1	11－2	SI01	口径 20.9		口縁斜格子文	ヨコナデ	弥生中期
壺	9－2	11－2	SI01	口径 23.0		突帯上に刻目文，口縁部，円形浮文，斜線文	ヨコナデ	弥生中期
壺	9－3	11－2	SI01 N4　E8			擬凹線文3	ヨコナデ	弥生中期
甕	9－4	13－2	SI01 N4・5　E7・8	口径 12.7			ヨコナデ	弥生中期
甕	9－5	13－2	SI01 下層	口径 18.8		口縁凹線文2，頸部刻目突帯文	ヨコナデ	弥生中期
甕	9－6	13－2	SI01 N4・5　E7・8	口径 13.3			ミガキ？	弥生前期または中期
壺	9－7	13－2	SI01	口径 23.0		口縁鋸歯文（クシ），内面波状文（クシ），刺突文（クシ）	ヨコナデ	弥生中期
甕	9－8	13－2	SI01	口径 19.0		口縁凹線文2	ヨコナデ，ハケ目	弥生中期

器種	挿図番号	図版番号	出土地点 層位	法量(cm)	形態の特徴	文様	手法	備考
壺	9－9	13－2	SI01	口径 16.8		口縁斜格子文(ヘラ)	ヨコナデ	弥生中期
鉢	9－10		SI01 N4　E8	口径 13.3		口唇平坦		弥生中期
壺	9－11	13－2	SI01			口縁鋸歯文(ヘラ),内面突帯上に刻目,刺突文(クシ)		弥生中期
高坏	9－12	13－2	SI01	口径 20.8	口縁鍔状に拡張		ナデ	弥生中期
高坏	9－13	13－2	SI01 下層	口径 23.4	口唇平坦	口唇刻目文		弥生中期
壺	9－14	12－1	SI01			口唇斜格子文(クシ),内面突帯上に刻目文	ヨコナデ	弥生中期
壺	9－15	12－1	SI01			口縁凹線文3,刻目文,垂下突帯文,内面突帯文	ヨコナデ	弥生中期
甕	9－16	12－1	SI01	口径 18.4			ヨコナデ	すす付着,弥生中期
石鏃	10－1	14－1	SI01	長 3.1　幅 1.8 厚 0.6				安山岩
石鏃	10－2	14－1	SI01	長 3.9　幅 2.4 厚 0.6			主要剥離面は二次加工ほとんどなし	玉髄質
擦切未成品	10－3	14－1	SI01 N4･5　E7･8	長 3.7　幅 2.1 厚 0.5			両面から擦切り	緑色凝灰岩
石斧？	10－4	14－1	SI01 上層	長 6.7　幅 8.6 厚 1.3			雑な剥離	上端および両面に自然面残る,緻密な石材
石包丁	10－5	14－1	SI01 N4･5　E7･8 下層	長 5.9　幅 4.2 厚 0.5			ていねいな研磨	縞状層理明瞭
磨製石斧基部	10－6	14－1	SI01	長 5.3　幅 3.9 厚 3.9				粒子粗い石材,濃緑色
石斧	10－7	14－1	SI01 N4･5　E7･8 上層	長 7.8　幅 5.4 厚 1.2			雑な剥離	両面に大きな自然面残る
石斧未成品？	10－8	14－1	SI01	長 5　幅 8.2 厚 1.4			雑な剥離	一面に大きな自然面
甕	12－1	14－2	SD01	口径 17.0			ヨコナデ,ハケ目	弥生中期
短頸壺	12－2	14－2	SD01	口径　8.3			ミガキ	弥生前期
壺	12－3	14－2	SD01			段	ミガキ	弥生前期
壺	12－4	14－2	SD01			内面突帯上に刻目文,斜格子文	ハケ目	弥生中期
壺	12－5	14－2	SD01			波状文3(クシ),直線文3(クシ)	ハケ目	弥生中期
	12－6	14－2	SD01	底径　5.5			ハケ目,ナデ	弥生前期
	12－7	14－2	SD01	底径　5.0				弥生中期
	12－8	14－2	SD01	底径　7.4			ナデ,ハケ目,ミガキ	弥生前期
	12－9	14－2	SD01	底径　5.4	底厚い		ナデ	弥生前期

器種	挿図番号	図版番号	出土地点層位	法量（cm）	形態の特徴	文様	手法	備考
	12－10	14－2	SD01	底径 7.8			ハケ目	弥生前期
剝片	12－11	14－2	SD01	長 4.0 幅 5.4 厚 2.5			背復とも同一方向の剝離	玉髄質
深鉢	13－1	15－1	A区3層		波状口縁	磨消縄文？ R？		縄文後期
深鉢？	13－2	15－1	A区3層		波状口縁？	磨消縄文？ R？		縄文後期
	13－3	15－1	A区3層			磨消縄文，RL	ナデ，ミガキ	縄文後期
深鉢	13－4	15－1	A区3層			磨消縄文，RL	ナデ	縄文後期
	13－5	15－1	A区3層			磨消縄文，RL	ナデ，ミガキ	縄文後期，沈線太い
	13－6	15－1	A区3層			沈線のみ		縄文後期
	13－7	15－1	A区		渦巻状の突起	磨消縄文，RL？		縄文後期，渦巻状の突起
深鉢？	13－8	15－1	A区3層			磨消縄文，RL	ナデ	縄文後期
深鉢	13－9	15－1	A区3層			磨消縄文，RL		縄文後期
深鉢	13－10	15－1	A区3層		波状口縁	波頂部に刻目		縄文後期
	13－11	15－1	A区2層			隆帯文	ナデ？	縄文後期？
双耳壺	13－12	15－1	A区3層			4方向の孔，渦巻文		縄文後期
双耳壺	13－13	15－1	A区3層			縦方向の孔		
鉢	13－14		A区3層		口縁肥厚		ナデ？	縄文後期
浅鉢	13－15	15－1	A区3層		波状口縁，沓形		ナデ	縄文後期？
鉢	13－16	15－2	A区3層			細沈線文	ナデ	縄文後期
	13－17	15－1	A区3層			沈線文	ナデ	縄文後期
	13－18	15－2	A区3層			3本沈線	ナデ	
鉢	13－19	15－2	A区3層		口縁肥厚	口縁縄文，RL？	ナデ	縄文後期
	13－20	15－2	A区3層			条線	ナデ	縄文
	13－21	15－2	A区3層			太い沈線文	ミガキ	
	13－22	15－2	A区3層			条線	ナデ	縄文後期
	13－23	15－2	A区3層			沈線文	ナデ，二枚貝条痕？	縄文後期か？

器種	挿図番号	図版番号	出土地点層位	法量（cm）	形態の特徴	文様	手法	備考
深鉢	13－24	15－2	A区3層				強いナデ	縄文後期？
	13－25	15－2	A区3層		口唇面取	沈線文	ミガキ	縄文晩期
	13－26	15－2	A区3層			沈線文	ミガキ，ナデ	縄文晩期
	13－27	15－2	A区3層		口唇面取	沈線文	ミガキ	縄文晩期
	13－28	16－1	A区3層		口縁内傾	沈線文	ミガキ	縄文晩期
	13－29	16－1	A区3層			沈線文	ナデ	縄文晩期
	13－30	16－1	A区3層		口縁端部平坦	沈線文	ミガキ，ナデ	縄文晩期
	13－31	16－1	A区3層		波状口縁	沈線文	ミガキ	縄文晩期
	13－32	16－2	A区3層		口縁内傾，口唇面取	沈線文	ナデ	縄文晩期
浅鉢	13－33	16－2	A区3層			沈線文	ミガキ	縄文晩期，モミ痕あり
浅鉢	13－34	16－1	A区3層		口縁短い	沈線文	ナデ，ケズリ＋ナデ	縄文晩期
浅鉢	13－35	16－1	A区3層	口径 25.0		内外に沈線文	ミガキ	縄文晩期
浅鉢	13－36		A区3層		口唇面取	沈線文，短沈線	ナデ	縄文晩期
	14－1	16－1	A区3層		胴部屈曲，口唇面取		ナデ	縄文晩期
	14－2	16－1	A区3層		胴部屈曲		ナデ	スス付着，縄文晩期
深鉢	14－3	16－1	A区3層		口唇面取		ナデ	縄文晩期
浅鉢	14－4	16－2	A区3層	口径 14.8			ナデ，ケズリ？	縄文晩期
	14－5	16－2	A区3層	胴部径 29.2	胴部屈曲	沈線文	ミガキ	縄文晩期
	14－6	16－2	A区3層	口径 22.4	口唇面取，胴部屈曲		ミガキ	縄文晩期
	14－7	16－2	A区3層	胴部径 21.0	胴部屈曲		ナデ？	縄文晩期
	14－8	16－2	A区3層	胴部径 16.0	胴部屈曲		ナデ	縄文晩期
深鉢	14－9	16－2	A区3層	口径 22.8	口縁内傾，波状口縁		ミガキ	スス付着，縄文晩期
深鉢	14－10	16－2	A区3層	口径 24.4	口唇面取り		ナデ，木擦過	縄文晩期
	14－11	16－2	A区3層	底径 4.0	コップ形	細沈線文	ナデ	縄文晩期
浅鉢	14－12	16－2	A区3層		口唇肥厚		ミガキ	縄文晩期

器種	挿図番号	図版番号	出土地点層位	法量(cm)	形態の特徴	文様	手法	備考
深鉢	14−13	16−2	A区3層			浅い沈線文	ナデ，ミガキ	縄文晩期
	14−14	16−2	A区3層			浅い沈線文	ナデ，ミガキ	縄文晩期
	14−15	17−1	A区3層	口径 8.0	小型の器形		ナデ	縄文晩期
	14−16	17−1	A区3層		口縁に稜		ミガキ，ナデ？	縄文晩期
深鉢	15−1	17−1	A区3層			口唇刻目文	ナデ，2枚貝条痕	縄文晩期
浅鉢	15−2	17−1	A区3層		口縁端部折り返し		ナデ	縄文晩期
浅鉢	15−3	17−1	A区2層	口径 14.0	口縁端部折り返し		ナデ	スス付着，縄文晩期
浅鉢	15−4	17−1	A区3層	口径 14.6	口唇外反		ミガキ，ナデ	縄文晩期
深鉢	15−5	17−1	A区3層				内面二枚貝条痕，外面木擦過	縄文晩期
深鉢	15−6	17−1	A区3層			刻目突帯文(「V」字)	ナデ	スス付着，突帯文期
深鉢	15−7	17−1	A区3層		突帯低い	刻目突帯文(「V」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	15−8	17−1	A区3層			突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	15−9	17−1	A区3層		口唇外反	刻目突帯文(「V」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	15−10	17−2	A区3層		口唇わずかに外反	刻目突帯文(「D」字)	ナデ，木擦過	突帯文期
深鉢	15−11	17−1	A区3層		口唇内側平坦面	突帯文	ナデ，木擦過	突帯文期
深鉢	15−12	17−2	A区3層		口唇わずかに外傾	突帯文	木擦過，突帯下面未調整	突帯文期
深鉢	15−13	17−2	A区3層		口唇やや厚い	刻目突帯文(「D」字)	木擦過	突帯文期
深鉢	15−14	17−2	A区3層		小型の器形	刻目突帯文(「V」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	15−15	17−2	A区3層		突帯低い	刻目突帯文(「V」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	15−16	17−2	A区3層			突帯文	ナデ，木擦過？	突帯文期
深鉢	15−17	15−2	A区3層	口径 30.4	口唇わずかに外傾	刻目突帯文(「V」字)	ナデ，木擦過？	突帯文期
深鉢	15−18	15−2	A区3層		口唇外反	口唇，突帯刻目(「D」字)	木擦過	突帯文期
深鉢	15−19	15−2	A区3層		口唇わずかに外傾	刻目突帯文「D」字	外面擦過？ 内面二枚貝条痕	突帯文期
深鉢	15−20	15−2	A区3層		口唇面取	口唇，突帯刻目(大きな「V」字)	内面二枚貝条痕，外面擦過	突帯文期
深鉢	15−21	15−2	A区3層		口唇外反	刻目突帯文「O」字	内面二枚貝条痕，外面ケズリ	突帯文期

器種	挿図番号	図版番号	出土地点 層位	法量（cm）	形態の特徴	文様	手法	備考
深鉢	15－22	18－1	A区 3層		口唇外反	刻目突帯文(「D」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	15－23	18－1	A区 3層		口唇わずかに外傾	刻目突帯文「D」	木擦過	突帯文期
深鉢	15－24	18－1	A区 3層		口唇わずかに平坦	刻目突帯文(「D」字)	木擦過	突帯文期
深鉢	15－25	18－1	A区 3層		口唇面取	刻目突帯文(「V」字)	二枚貝条痕？木擦過	突帯文期
深鉢	16－1	18－1	A区 3層		口唇外反	刻目突帯文(「D」字)	木擦過	突帯文期
深鉢	16－2	18－1	A区 3層			刻目突帯文(「V」字)	木擦過	突帯文期
深鉢	16－3	18－1	A区 3層		口唇外傾	刻目突帯文(「V」字)	木擦過	突帯文期
深鉢	16－4	18－1	A区 3層			刻目突帯文(「D」字)	木擦過	突帯文期
深鉢	16－5	18－1	A区 3層		口唇外傾	刻目突帯文(「V」字)	木擦過？	突帯文期
深鉢	16－6	18－1	A区 3層		口唇外反	刻目突帯文(「O」字)	ナデ，木擦過	突帯文期
深鉢	16－7	18－1	A区 3層		口唇外傾	刻目突帯文(「D」字)	ナデ，ケズリ	突帯文期，刻目は突帯下面に施文
深鉢	16－8	18－1	A区 3層		口唇外傾	刻目突帯文「D」字	ナデ，木擦過	突帯文期
深鉢	16－9	18－2	A区 3層	口径 17.1	口唇外傾	突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	16－10	18－2	A区 3層		口唇平坦	刻目突帯文(「V」字)	ナデ，木擦過	突帯文期，刻目は突帯上部に施文
深鉢	16－11	18－2	A区 3層		口唇外傾	刻目突帯文「D」字	ナデ，ケズリ	突帯文期，刻目は突帯下面に施文
深鉢	16－12	18－2	A区 3層		口唇外反	刻目突帯文(「V」字)	木擦過	突帯文期，刻目は突帯下面から施文
深鉢	16－13	18－2	A区 3層			刻目突帯文(大きな「V」字)	ナデ，木擦過？	突帯文期
深鉢	16－14	18－2	A区 3層		口唇外傾	刻目突帯文(「O」字)	木擦過	突帯文期
深鉢	16－15	18－2	A区 3層		口唇外反	突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	16－16	18－2	A区 3層		小型の器形	突帯文	ナデ，ケズリ＋ナデ	突帯文期
深鉢	17－1	18－2	A区 3層		口唇平坦	突帯文	木擦過	突帯文期
深鉢	17－2	18－2	A区 3層		口唇外反	突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	17－3	18－2	A区 3層		口唇平坦	刻目突帯文(「D」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	17－4	18－2	A区 3層	口径 23.6	口唇外反	突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	17－5	19－1	A区 3層		口唇平坦	口唇，突帯刻目(「V」字)	二枚貝条痕，木擦過	突帯文期，施文具は二枚貝か

器種	挿図番号	図版番号	出土地点層位	法量（cm）	形態の特徴	文様	手法	備考
深鉢	17－6	19－1	A区3層		口唇内湾，突帯かまぼこ形	刻目突帯文(「V」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	17－7	19－1	A区3層	口径 23.0	突帯かまぼこ形	突帯文	ナデ，ケズリ	突帯文期
深鉢	17－8	19－1	A区3層		突帯かまぼこ形	刻目突帯文「V」字	ナデ，ケズリ	突帯文期
深鉢	17－9	19－1	A区3層			刻目突帯文(「V」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	17－10	19－1	A区3層		突帯かまぼこ形，口唇外傾	刻目突帯文(「O」字)	木擦過	突帯文期，施文具他と違う
深鉢	17－11	19－1	A区3層		口唇わずかに外傾	刻目突帯文(「D」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	17－12	19－1	A区3層		口唇内湾，突帯かまぼこ形	突帯文	ナデ，木擦過？	突帯文期
深鉢	17－13	19－1	A区3層		小型の器形	口唇，突帯刻目(「D」字)	ナデ，木擦過	突帯文期
	17－14	19－1	A区3層		口唇上に突帯被る	突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	17－15	19－1	A区3層		突帯かまぼこ形	突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	17－16	19－1	A区3層		口唇外傾	突帯文	ナデ	スス付着，突帯文期
深鉢	17－17	19－2	A区3層		突帯かまぼこ形	刻目突帯文(「D」字)	木擦過	突帯文期
深鉢	17－18	19－2	A区3層		口唇わずかに外反	突帯文	木擦過	突帯文期
深鉢	17－19	19－2	A区3層		口唇わずかに外反	刻目突帯文(「O」字)，口唇内面沈線文	二枚貝条痕？	突帯文期
深鉢	17－20	19－2	A区3層		突帯かまぼこ形	刻目突帯文(「V」字)	木擦過	突帯文期
深鉢	17－21	19－2	A区3層		口唇内湾	刻目突帯文(「V」字)	ナデ	刻目は突帯上面から施文，突帯文期
深鉢	17－22	19－2	A区3層		突帯かまぼこ形	突帯文	ナデ	スス付着，突帯文期
深鉢	17－23	19－2	A区3層		突帯かまぼこ形	突帯文	ナデ，木擦過	突帯文期
深鉢	17－24	19－2	A区3層		口唇内湾	突帯文	ナデ，木擦過	突帯文期
深鉢	17－25	19－2	A区3層		口唇内湾	突帯文	ナデ，木擦過	突帯文期
深鉢	17－26		A区3層		口唇外反	突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	18－1	19－2	A区3層	口径 30.0		突帯文	擦過	突帯文期
深鉢	18－2	19－2	A区3層			突帯文	ナデ	胴部突帯，突帯文期
壺	18－3	19－1	A区3層		口唇平坦	突帯文	ナデ	突帯文期
	18－4	20－1	A区3層				ナデ，擦過	縄文晩期

器種	挿図番号	図版番号	出土地点 層位	法量（cm）	形態の特徴	文様	手法	備考
	18－5	20－1	A区 3層	底径 13.0			ナデ	縄文晩期
	18－6	20－1	A区 3層		中央凹む		ナデ	縄文
	18－7	20－1	A区 3層	底径 6.0			ナデ	縄文晩期
浅鉢？	18－8	20－1	A区 3層	底径 6.8			ミガキ，ナデ	縄文晩期
	18－9	20－1	A区 3層	底径 9.4			ナデ	縄文
	18－10	20－1	A区 3層	底径 4.6			ケズリ，ナデ	縄文
	18－11	20－1	A区 3層		中央やや凹む		内面クモの巣状の擦過	縄文
甕	18－12	20－1	A区 3層	口径 20.0	口唇肥厚	口縁凹線文？	ヨコナデ，ナデ	弥生中期
甕	18－13		A区 3層				ナデ，ケズリ，ハケ目	古墳後期
石包丁	18－14	20－1	A区 3層	長 4.7　幅 4.7 厚 0.7				黒色の粒子細かい石材
石錘	18－15	20－1	A区 3層	長 6.7　幅 5.4 厚 1.5				
浅鉢	19－1	20－2	N5　E7 2層		水平口縁	磨消縄文，RL	ナデ？　ミガキ	縄文後期
深鉢	19－2	20－2	N3　E6 4層		口唇平坦	磨消縄文，RL	ミガキ？　ナデ?	縄文後期
深鉢	19－3	20－2	N3　E5 2層		波状口縁？　口唇平坦	磨消縄文，RL		縄文後期
深鉢？	19－4	20－2	B区 2層		突起？	磨消縄文，RL	ナデ	縄文後期
	19－5	20－2	N3　E4 4層			磨消縄文（縄文の有無は不明）	ナデ？	縄文後期
	19－6	20－2	N5　E7 2層			磨消縄文，LR	ミガキ	縄文後期
鉢？	19－7	20－2	N3　E6 2層			口縁複合鋸歯文，頸部縄文，RL	ミガキ，ナデ	縄文後期
	19－8	20－2	N4　E7 4層			縄文，RL	ミガキ	縄文後期
	19－9	20－2	B区 2層		口縁肥厚		ナデ？	縄文後期
深鉢？	19－10	20－2	A区 2層				内面ていねいなナデ	縄文後期
壺？	19－11	20－2	N5　E7 2層		把手	磨消縄文，RL	ナデ	縄文後期
	19－12	20－2	A区 2層			縄文	ナデ	縄文後期
深鉢	19－13	21－1	N4　E6 2層		口唇平坦面		ナデ	縄文後期
浅鉢	19－14	21－1	A区 2層		口唇平坦	沈線文	ミガキ	縄文晩期

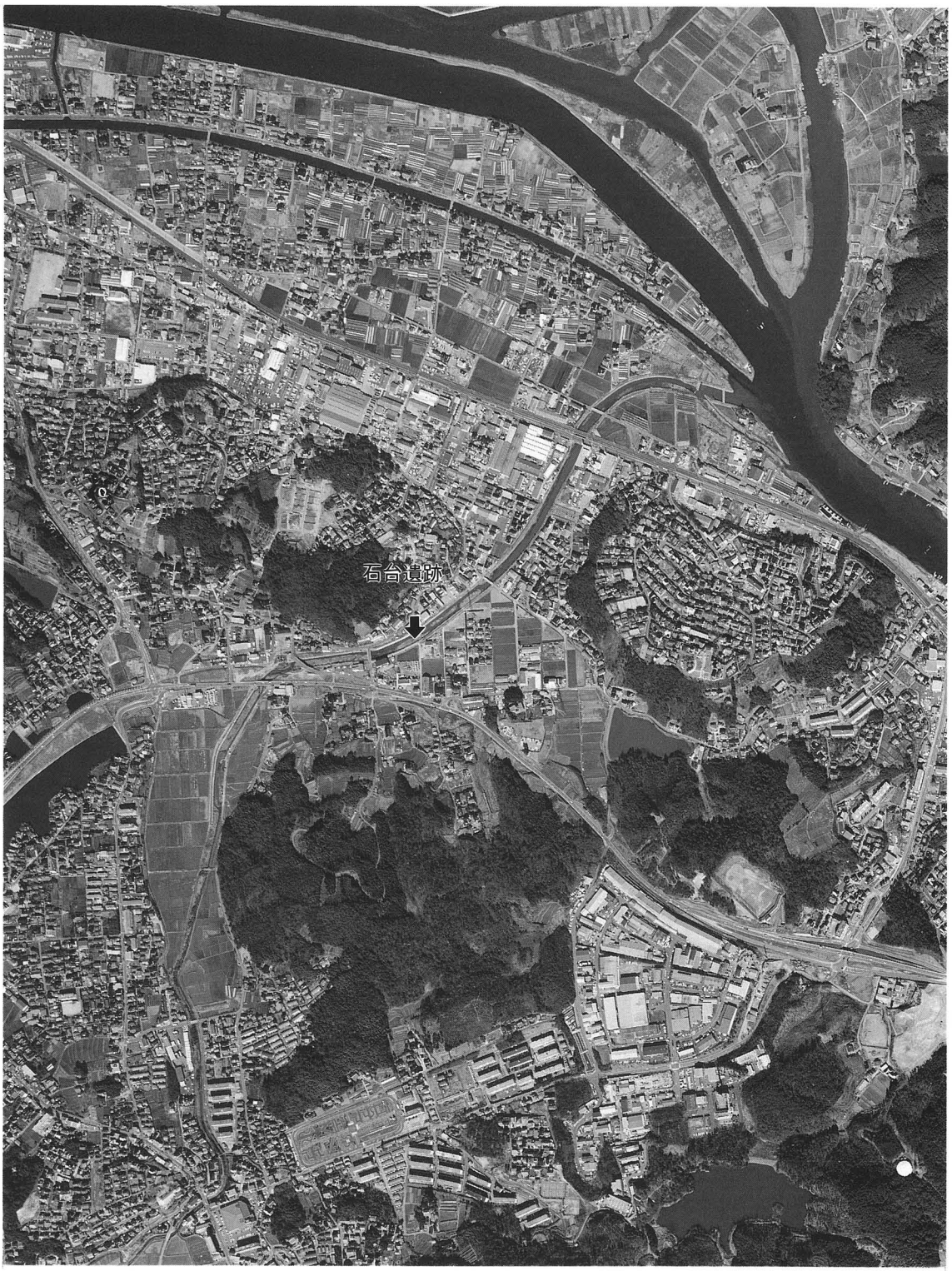
器種	挿図番号	図版番号	出土地点 層位	法量（cm）	形態の特徴	文様	手法	備考
浅鉢	19－15	21－1	B区 3層			沈線文	ミガキ	縄文晩期
	19－16	21－1	A区 2層			沈線文	ミガキ	縄文晩期
浅鉢	19－17	21－1	N5 E7 2層		内面に段		ミガキ，擦過	縄文後期
深鉢	19－18	21－1	B区 2層		胴部鈍く屈曲		ナデ，擦過	縄文晩期
	19－19	21－1	A区 2・3層		口縁内傾	沈線文	ナデ	縄文晩期
	19－20	21－1	N3 E5 2層		胴部屈曲	沈線文	ナデ，ミガキ	縄文晩期
深鉢	19－21	21－1	A区 2層				ナデ	補修孔，縄文後期
	19－22	21－1	B区 2層		胴部屈曲		擦過，ナデ	縄文晩期
深鉢	19－23	21－1	A区 2層			「X」字の細沈線下に浅い凹線	ナデ，ミガキ	縄文晩期
	19－24	21－2	B区 2層			口縁，胴部に沈線文	ミガキ，ナデ	縄文晩期
	19－25	21－2	A区 2層		胴部屈曲	沈線文	ミガキ	すす付着，縄文晩期
	19－26	21－2	A区			内面刻目文	ナデ？	縄文晩期
	19－27	21－2	A区 2層		口唇面取，小型の器形		ナデ	縄文晩期
浅鉢	19－28	21－2	B区 3層			沈線文，段	ナデ，ミガキ	縄文晩期
	19－29	21－2	A区 2層			細沈線文	ナデ	縄文晩期
浅鉢	19－30	21－2	N3 E6 2層			沈線文		縄文晩期
深鉢	19－31	21－2	A区		山形突起？		ナデ	縄文晩期
	19－32	21－2	A区 2・3層		胴部屈曲		ミガキ	縄文晩期
浅鉢	20－1	21－2	A区 2層		口唇面取		ナデ，ミガキ	縄文晩期
浅鉢	20－2	21－2	B区 3層	口径 21.2	口唇面取		ナデ	縄文晩期
浅鉢	20－3	22－1	B区	口径 26.6	口唇面取		ナデ？ ミガキ？	縄文晩期
	20－4	22－1	B区 3層		口唇折り返す		ナデ	スス付着，縄文晩期
浅鉢	20－5	22－1	A区 2層				ミガキ，ナデ	縄文晩期
浅鉢	20－6		A区 2・3層	口径 13.2	口唇面取	沈線文，垂下突帯	ナデ，ミガキ	縄文晩期
浅鉢	20－7	22－1	N3 E6 4層				二枚貝条痕，ナデ	スス付着，縄文

器種	挿図番号	図版番号	出土地点 層位	法量(cm)	形態の特徴	文様	手法	備考
浅鉢	20－8	22－1	N3 E6 4層			口唇突帯刻目，細沈線文	擦過	突帯文期
深鉢	20－9	22－1	A区 2層		口唇外反	刻目突帯文(大きな「D」字)	ナデ	突帯文期，刻目施文具は二枚貝か
深鉢	20－10	22－1	B区 3層		口唇外反	刻目突帯(「V」字)	ナデ？	突帯文期
深鉢	20－11	22－2	B区 3層		口唇外傾	刻目突帯文(「V」字)	二枚貝条痕？ ケズリ	突帯文期
深鉢	20－12	22－2	B区 3層		突帯かまぼこ形，口唇外傾	刻目突帯文(「V」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	20－13	22－2	N4 E5 4層		口唇外傾	刻目突帯文「D」	擦過	突帯文期
深鉢	20－14	22－2	N5 E6 2層		口唇外傾	刻目突帯文(「V」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	20－15	22－2	B区 3層		口唇内湾	刻目突帯文(「V」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	20－16	22－2	N3 E6 4層			突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	20－17	22－2	B区 3層		口唇外反	刻目突帯文「V」字	ナデ	スス付着，突帯文期
深鉢	20－18	22－2	A区			突帯文	ナデ，擦過	突帯文期
深鉢	20－19	22－2	B区 3層		口唇外反	刻目突帯文(「V」字)	ナデ	スス付着，突帯文期
深鉢	20－20	22－2	B区 2層			突帯文	ナデ	スス付着，突帯文期
深鉢	21－1	22－2	B区 3層			刻目突帯文(「V」字)	ナデ，擦過	突帯文期
深鉢	21－2	22－2	A区 2層			突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	21－3	23－1	N5 E7 2層			突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	21－4	23－1	B区 3層			口唇突帯刻目文	ナデ，擦過	突帯文期
深鉢	21－5	23－1	B区 2層			刻目突帯文(「D」字)	ナデ	刻目は突帯下面から施文，突帯文期
深鉢	21－6	23－1	B区 1層			口唇刻目(「V」字)	ナデ	スス付着，突帯に刻目なしか，突帯文期
深鉢	21－7	23－1	N5 E7 2層			突帯文	ナデ	突帯上に沈線状の線，突帯文期
深鉢	21－8	23－1	B区 3層		口唇外反	突帯文	擦過，ナデ	突帯文期
深鉢	21－9	23－1	B区 2層		口唇外傾	突帯文	擦過，ナデ	突帯文期
深鉢	21－10	23－1	B区 3層		口唇外反	突帯文	ナデ，擦過	突帯文期
深鉢	21－11	23－1	B区 2層		口唇外傾	突帯文	ナデ，擦過	突帯文期
深鉢	21－12	23－1	B区 3層			突帯文	粗いミガキ？ 擦過，ナデ	スス付着，突帯文期

器種	挿図番号	図版番号	出土地点 層位	法量（cm）	形態の特徴	文様	手法	備考
深鉢	21－13	23－1	N3 E6 4層		口唇外傾	刻目突帯文(「D」字)	擦過	突帯文期
深鉢	21－14	23－1	B区 3層		口唇内傾するような平坦面，口縁大きく開く	刻目突帯文(「D」字)	擦過	焼成前の穿孔か？ 突帯文期
深鉢	21－15	23－2	N5 E7 2層		口唇平坦	突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	21－16	23－2	A区 2層		突帯かまぼこ形	突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	21－17	23－2	N5 E6 2層			刻目突帯文(「V」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	21－18	23－2	N3 E6 4層		口唇外反	突帯文	ナデ，ケズリ	突帯文期
深鉢	21－19	23－2	B区 3層			非常に浅い刻目文(「V」字)	ナデ	突帯文期
深鉢	21－20	23－2	A区 2層		口唇外反	刻目突帯文(「V」字)	ナデ，擦過	突帯文期
深鉢	21－21	23－2	A区 2・3層	口径 14.8	胴部張る	突帯文	ナデ，擦過	突帯文期
深鉢	21－22	23－2	B区 3層	口径 17.2	胴部張る	突帯文	ナデ	突帯文期
壺？	21－23	23－2	N3 E6 4層		口縁玉縁状の突帯	突帯文	ナデ	突帯文期
深鉢	21－24	23－2	N3 E6 4層	口径 34.0	口唇外反	突帯文	擦過	突帯文期
	22－1	23－2	N3 E7 2層	底径 12.2			擦過	縄文晩期
	22－2	23－2	N5 E7 2層	底径 12.0			ミガキ，ナデ	縄文晩期
	22－3	24－1	B区 2層	底径 9.0				縄文晩期
	22－4	24－1	N3 E5 2層					方形の底部，縄文
	22－5	24－1	N3 E5 2層	底径 3.5	小型の器形		指圧	縄文
	22－6		B区 2層	底径 4.8			ナデ，ケズリ	縄文晩期
壺	22－7	24－1	A区 2層			羽状文	ナデ？ ミガキ?	弥生前期
壺	22－8	24－1	N5 E7 2層			幅広の突帯上に沈線	ハケ目，ナデ	弥生前期
壺	22－9	24－1	N4 E7 4層			突帯上に刻目文，突帯付近に赤色顔料	ナデ，ミガキ	弥生前期
壺	22－10	24－1	B区 粘土層			突帯上に刻目文	ナデ？ ミガキ	弥生前期
甕	22－11	24－1	B区			沈線文4（ヘラ）	ナデ，ハケ目，ナデ	弥生前期
甕	22－12	24－1	B区 2層			円形刺突文，沈線文4（ヘラ）		弥生前期
壺	22－13	24－1	B区 2層			沈線間に竹管文	ナデ？	弥生前期

器種	挿図番号	図版番号	出土地点 層位	法量（cm）	形態の特徴	文様	手法	備考
甕	22－14		N3　E4 4層			沈線文9（ヘラ）	ナデ，ハケ目，ナデ	弥生前期
甕	22－15	24－1	N4　E8 2層			沈線文5，円形刺突文	ナデ	弥生前期
壺	22－16	24－2	B区 2層	底径　9.4			ミガキ，ナデ	弥生前期
壺	22－17		N3　E5 2層	口径 30.2		段	ミガキ，ナデ	弥生前期
甕	22－18		B区 2層	口径 31.8		沈線文2（ヘラ）	ハケ目，ナデ	弥生前期
甕	22－19	24－1	B区 2層			沈線文10(クシ)，口唇刻目文	ナデ，ハケ目？	弥生中期
鉢	23－1	26－1	N5　E7 2層	口径 18.6			ナデ，ハケ目	弥生前期
壺	23－2	26－1	N4　E6 2層	口径 20.8		斜格子文	ミガキ，ナデ	弥生中期
鉢	23－3	26－1	B区 粘土層	口径 21.2	口唇平坦	突帯上に刻目文	ナデ	弥生中期
甕	23－4	26－1	N5　E7 2層	口径 13.8	口唇肥厚		ナデ，ハケ目，ナデ	弥生中期
甕	23－5	26－1	A区 2層				ケズリ，ヨコナデ	古墳後期
坏	23－6	26－1	A区 2層				回転ナデ	須恵器3期
石鏃	23－7	25		長 2.5　幅 1.7 厚 0.4				安山岩
石鏃	23－8	25		長 2.8　幅 1.9 厚 0.5				黒曜石，摩滅著しい
剥片	23－9	25	N3　E6 2層	長 2.1　幅15.6 厚 0.7			背腹とも同一方向の剥離	安山岩？
剥片	23－10	25	N5　E7 2層	長 4.5　幅 2.3 厚 1.0			背腹とも同一方向の剥離	玉髄質，上部につぶれ
剥片	23－11	25	N5　E7 2層	長 4.6　幅 2.2 厚 1.4			背腹とも同一方向の剥離	玉髄質，上部につぶれ
石斧基部	23－12	24－2	N4　E6	長 7.3　幅 7.4 厚 2.0			側縁に粗い剥離	両面に自然面残る
石包丁	23－13	24－2	B区 2層	長 7.3　幅 8.2 厚 1.0			刃部に研磨痕（剥離痕残る）	両面に自然面残る

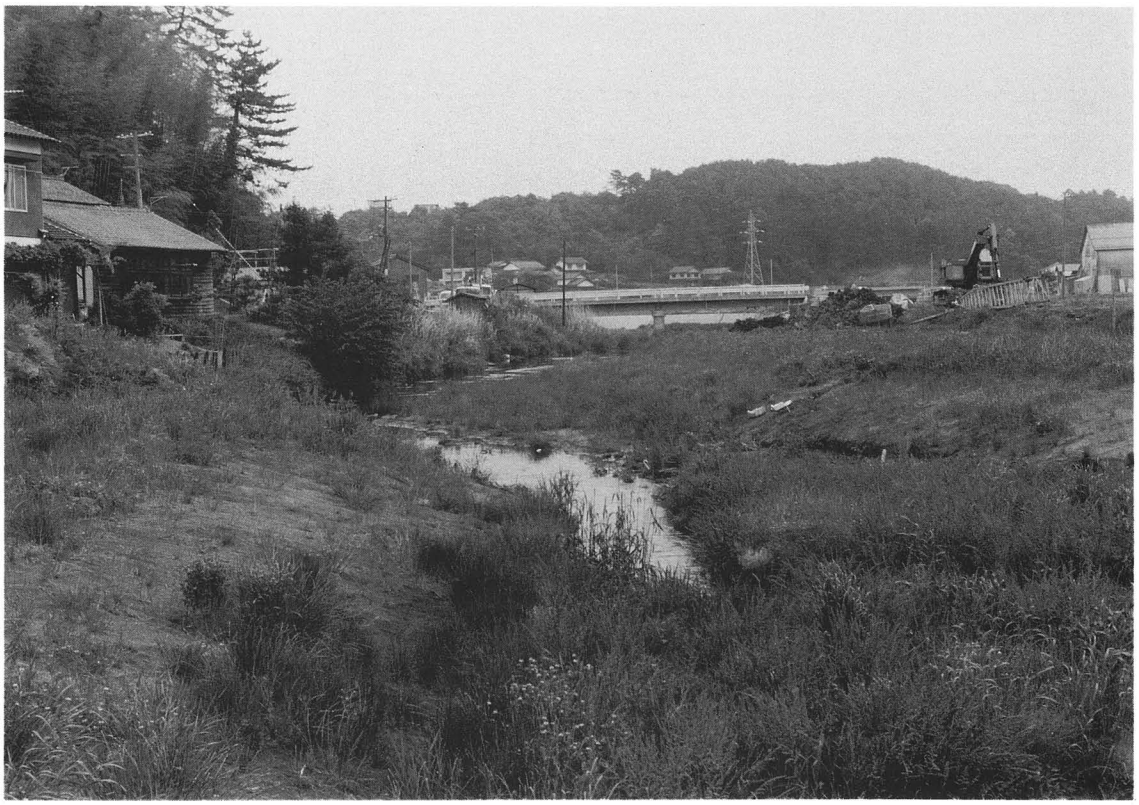
図　　版



石台遺跡周辺の地形(1990年撮影)

図版 2

石台遺跡近景(1990年)



石台遺跡近景(1977年頃の風景,恩田清氏撮影)

B区全景（調査後）

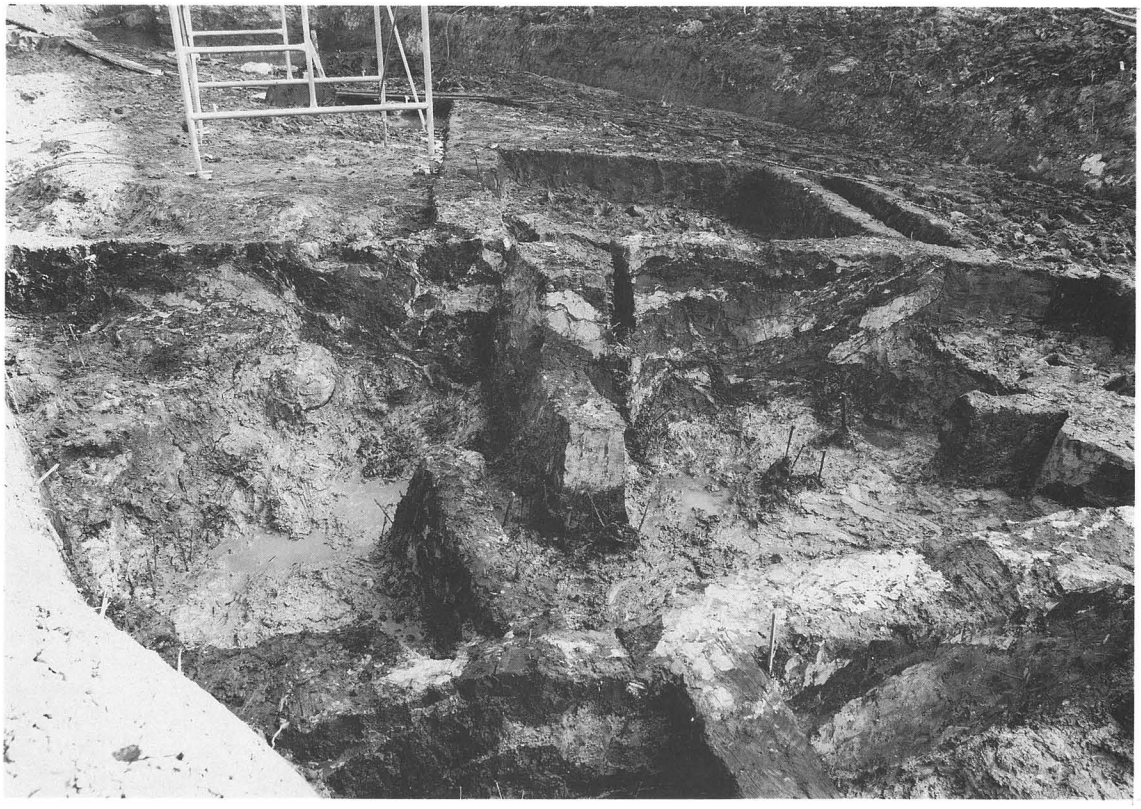
B区竪穴住居跡状遺構

図版 4

B区竪穴住居跡状遺構遺物出土状況

B区竪穴住居跡状遺構土層堆積状況(1)

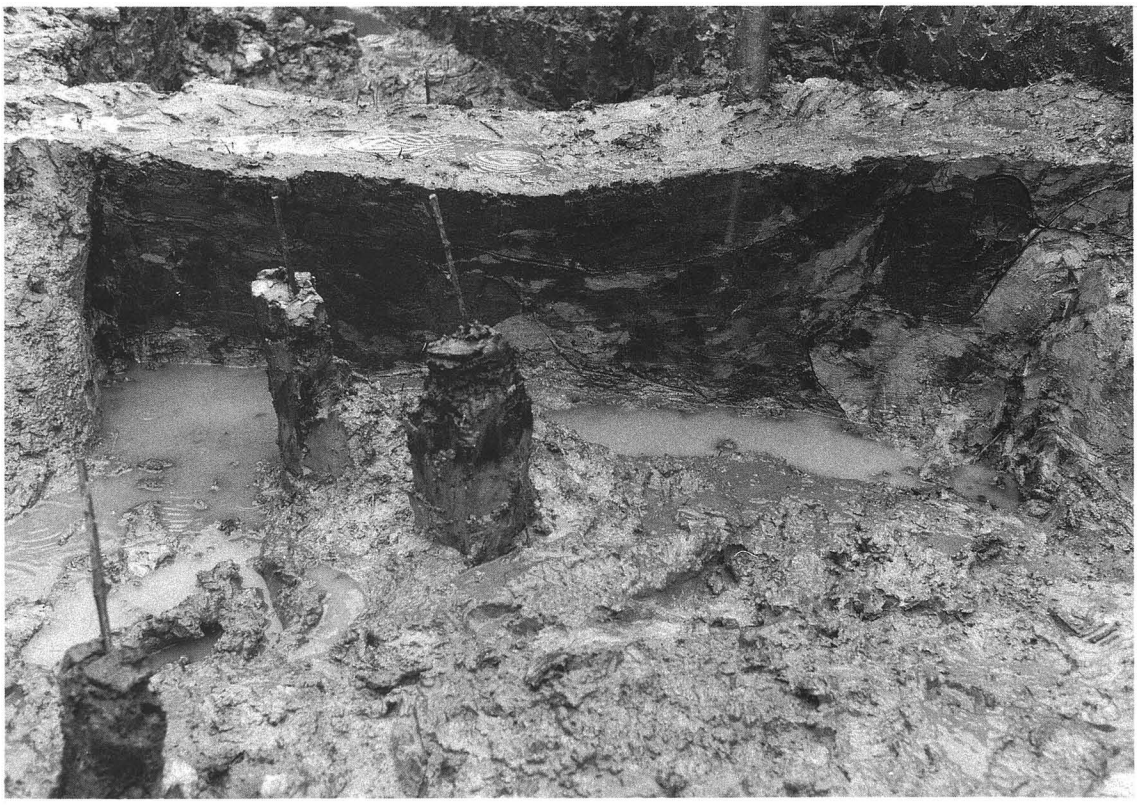
B区竪穴住居跡状遺構土層堆積状況(2)



B区竪穴住居跡状遺構土層堆積状況(3)

図版 6

B区溝状遺構

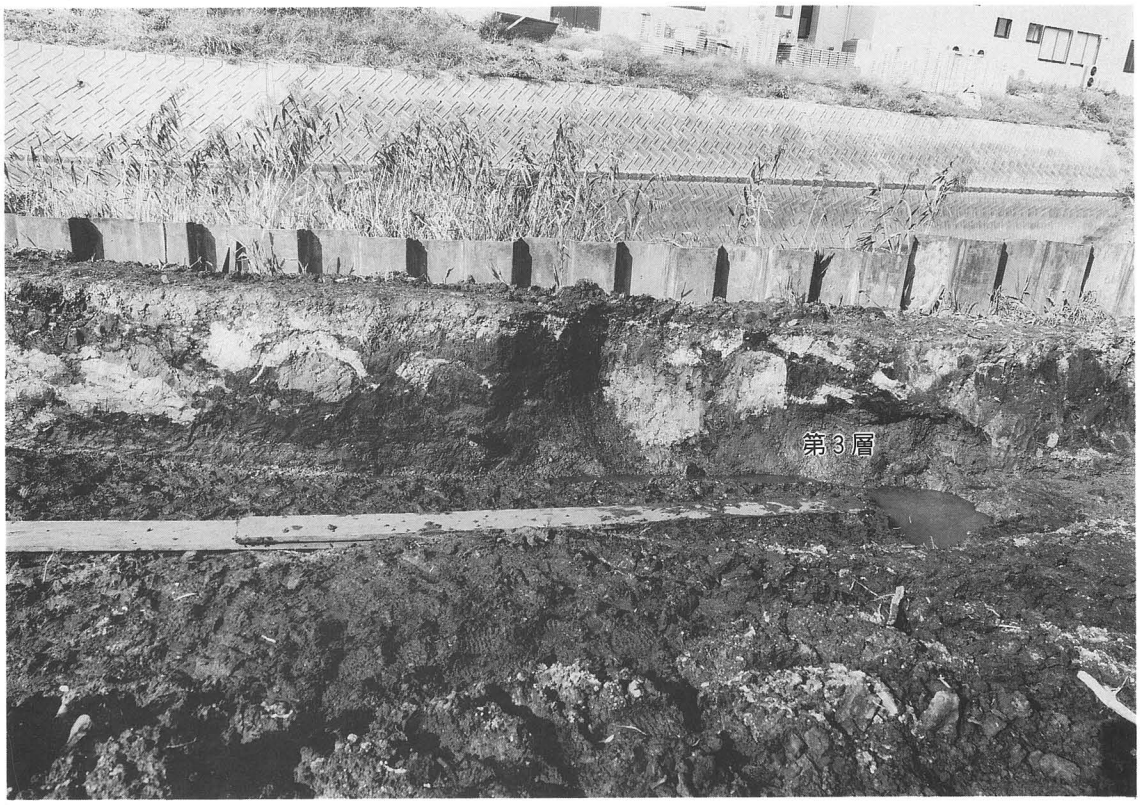


B区溝状遺構土層堆積状況

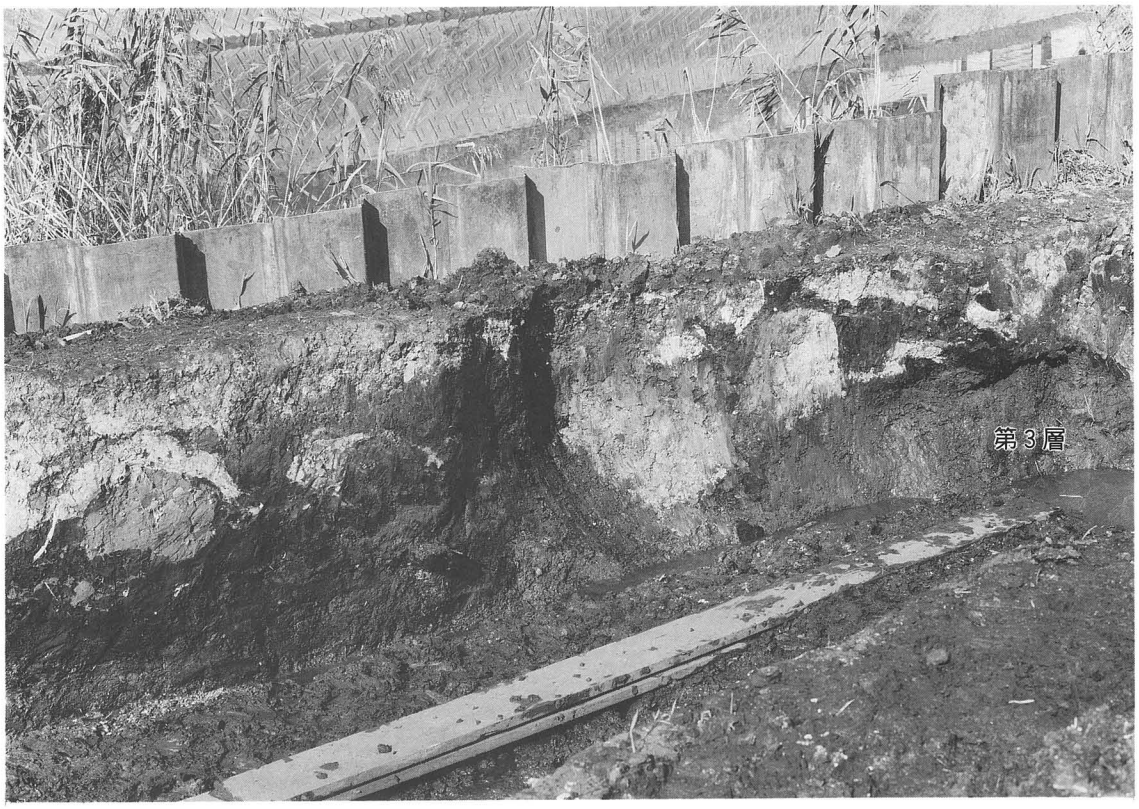
B区溝状遺構遺物出土状況

A区全景

図版 8

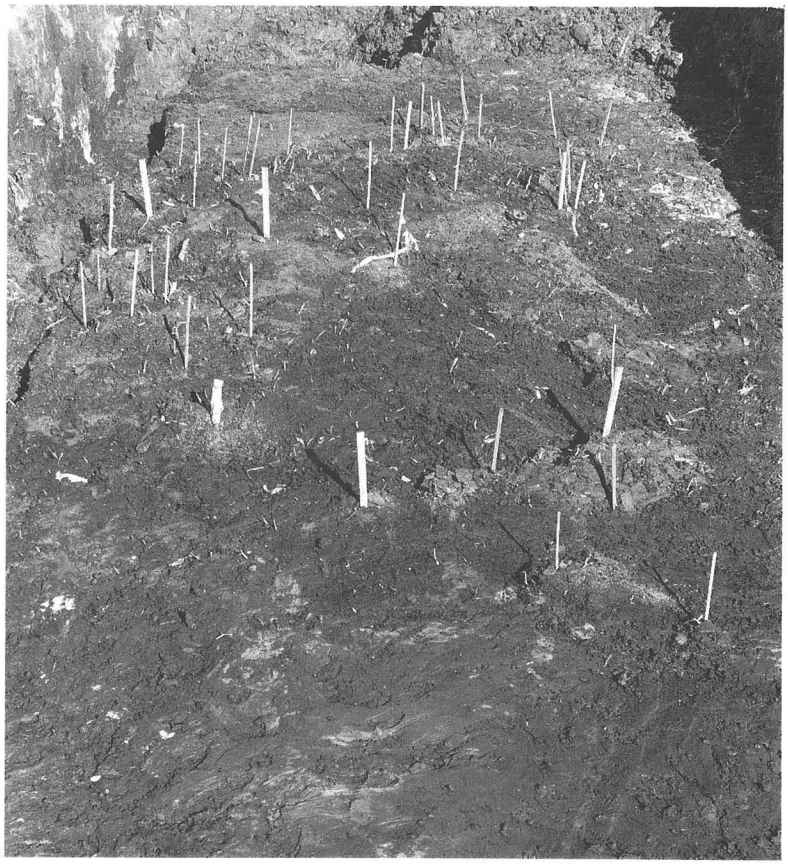


A区土層堆積状況



同　細部

A区土層堆積状況（西端部分）

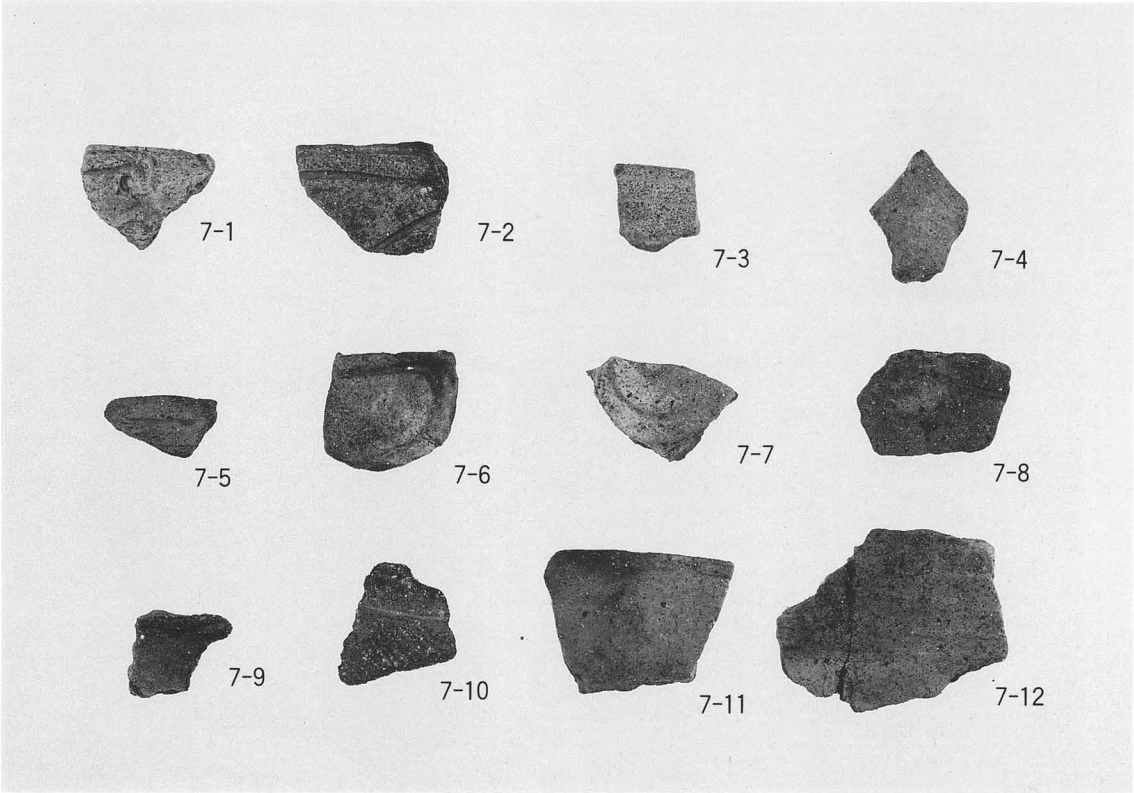


A区第 3 層遺物出土状況

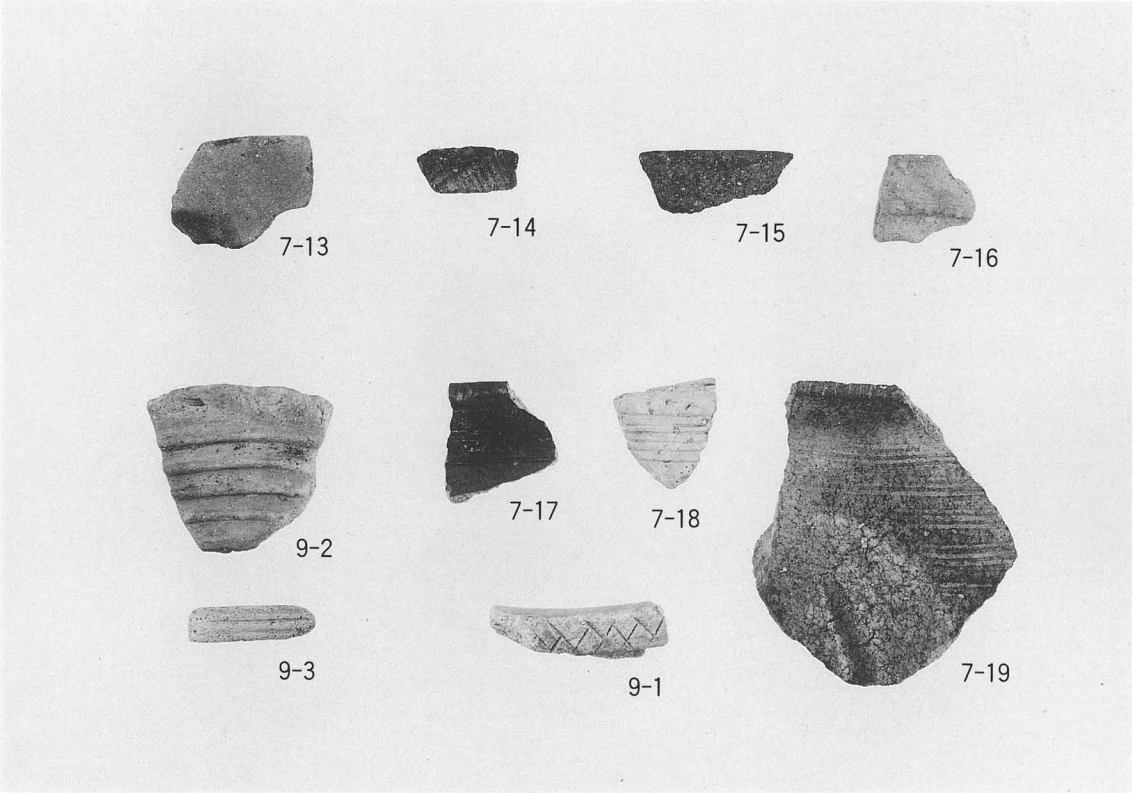
図版10

A区遺物出土状況

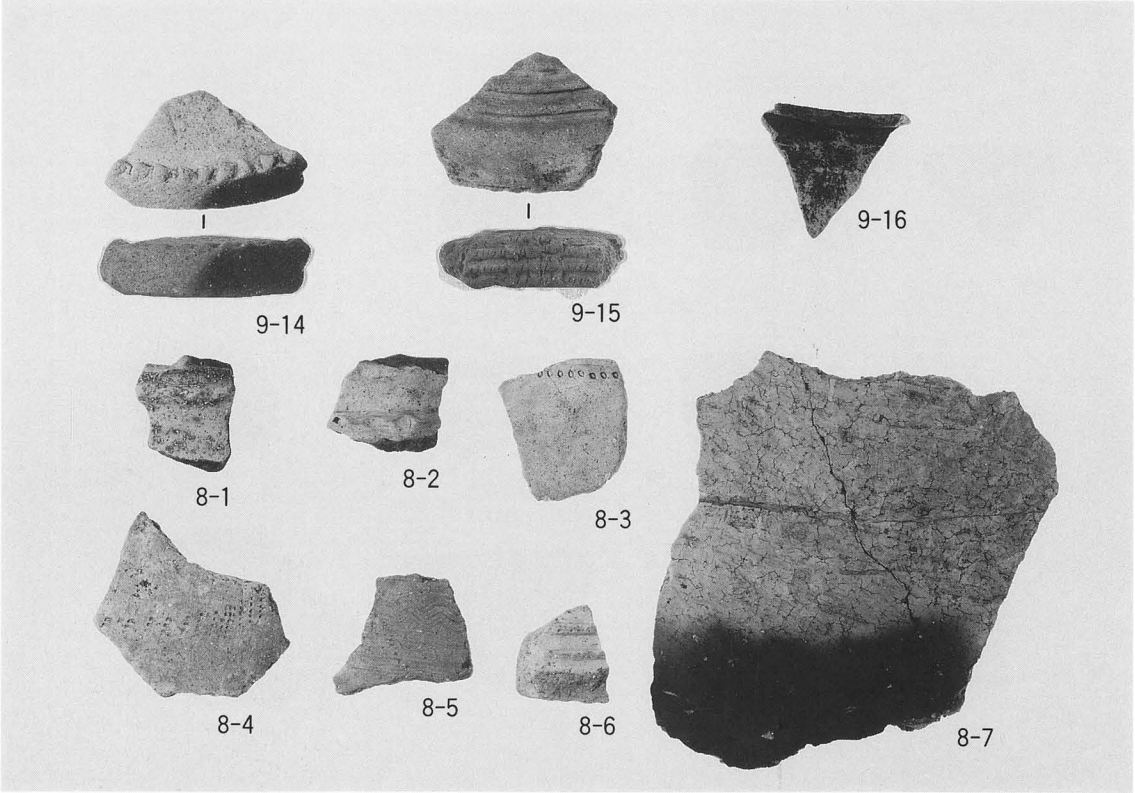
調 査 風 景



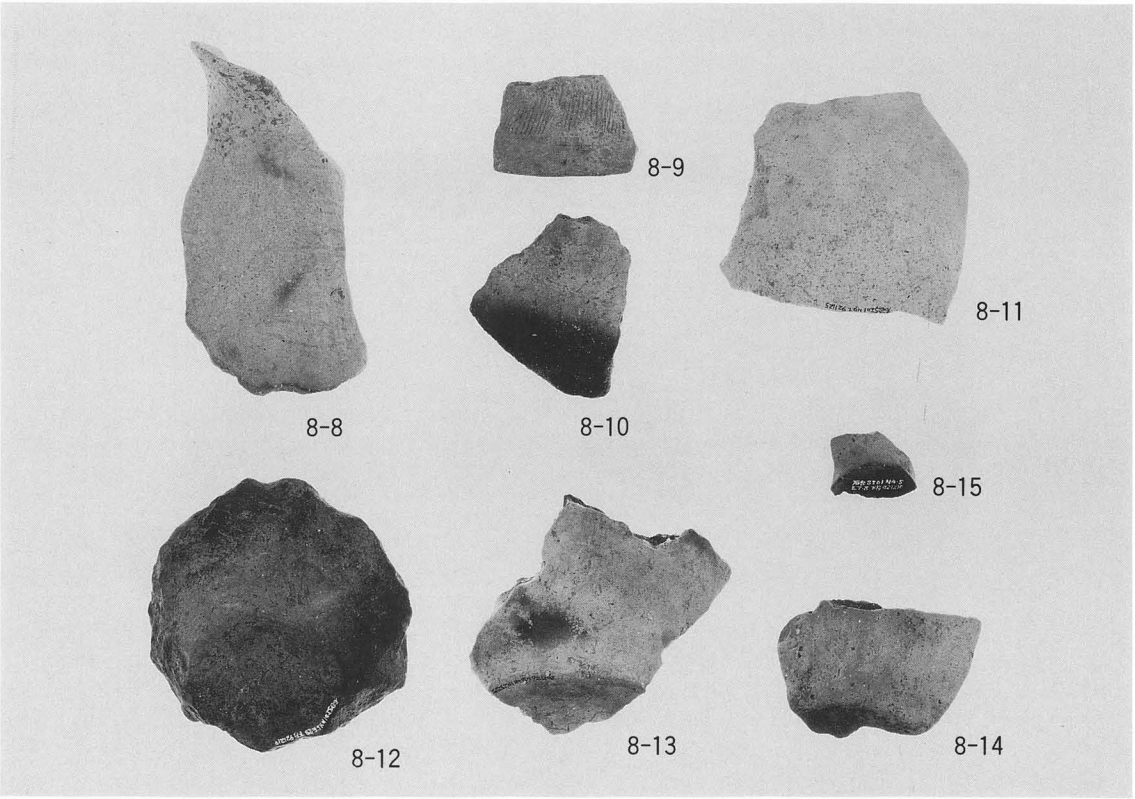
石台遺跡SI01出土土器（1：3）



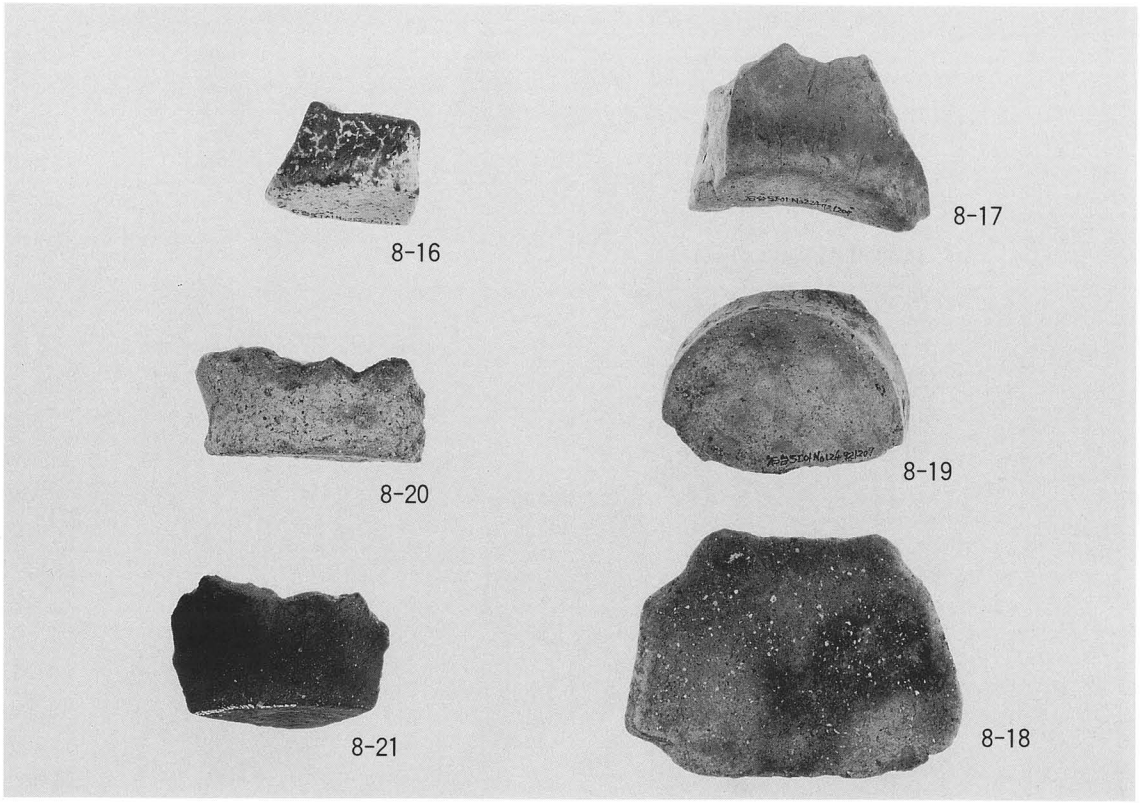
石台遺跡SI01出土土器（1：3）



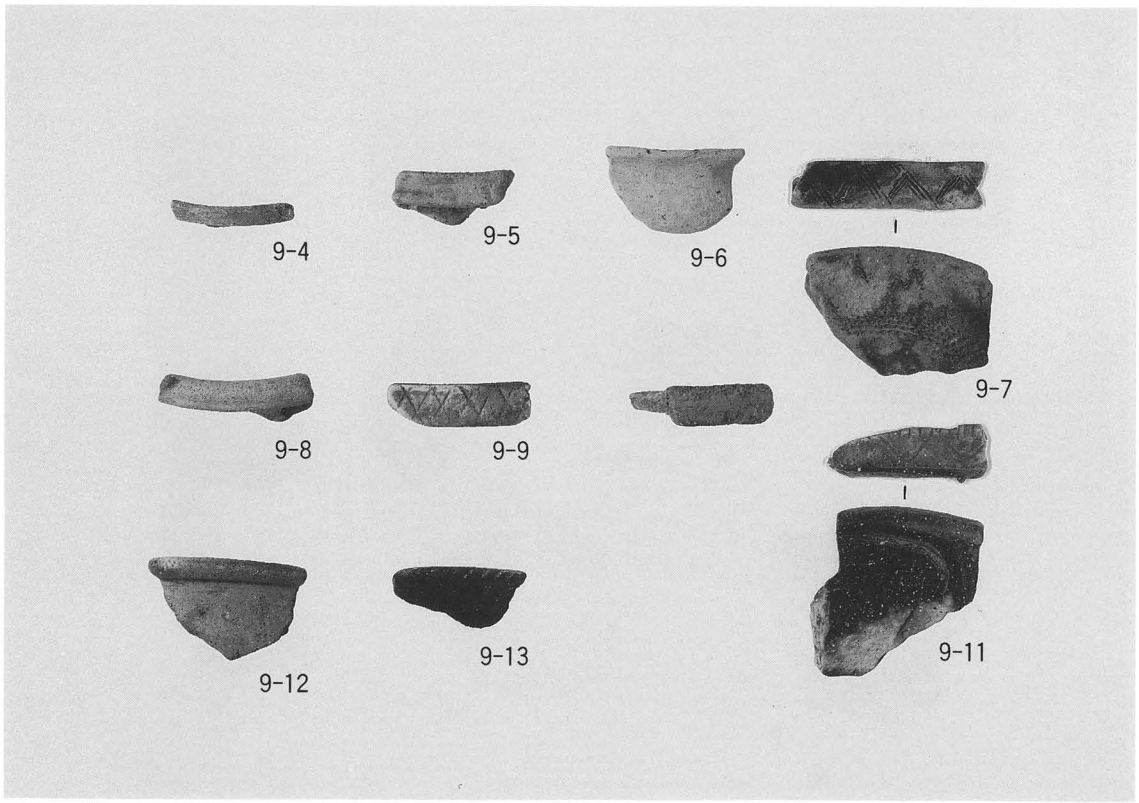
石台遺跡SI01出土土器（1：3）



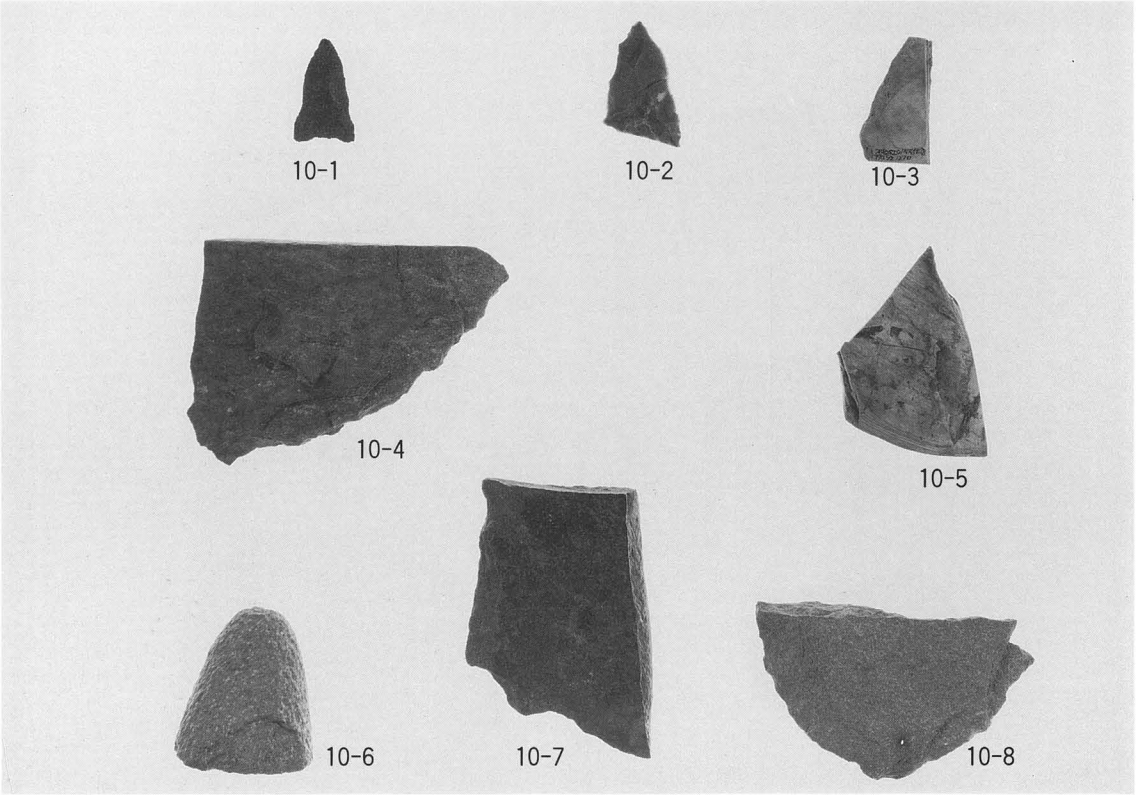
石台遺跡SI01出土土器（1：3）



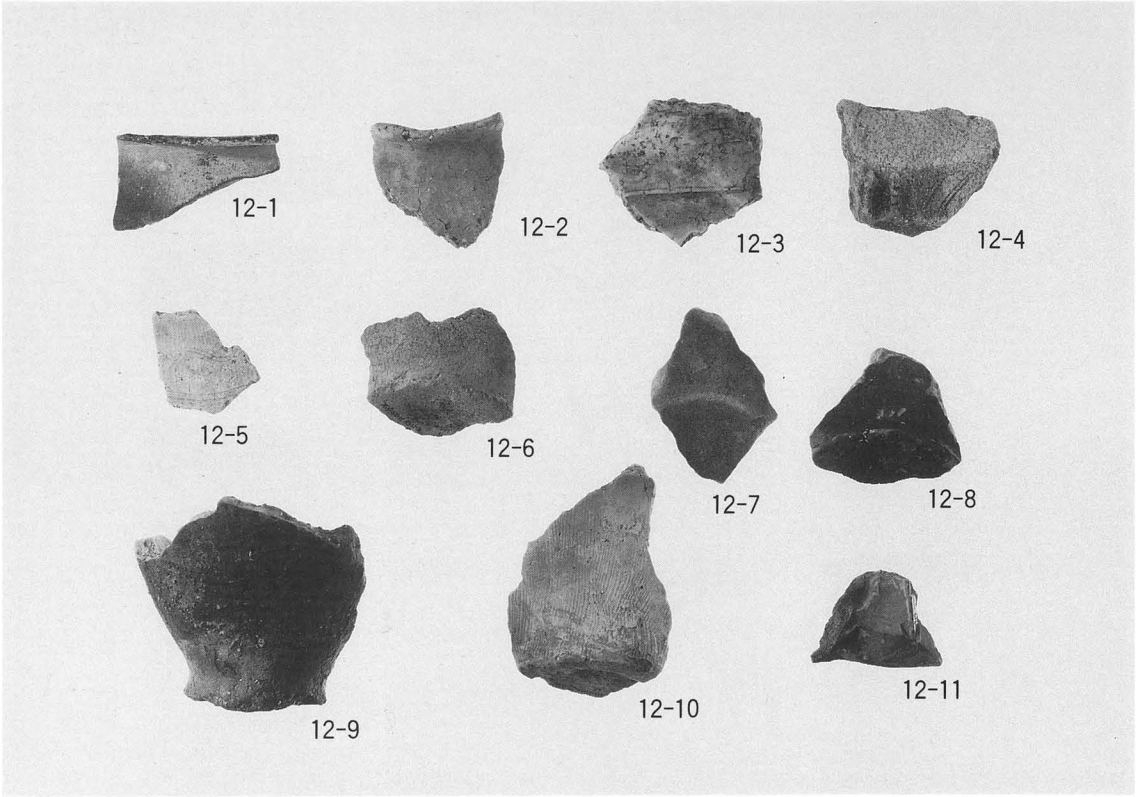
石台遺跡SI01出土土器(1：2)



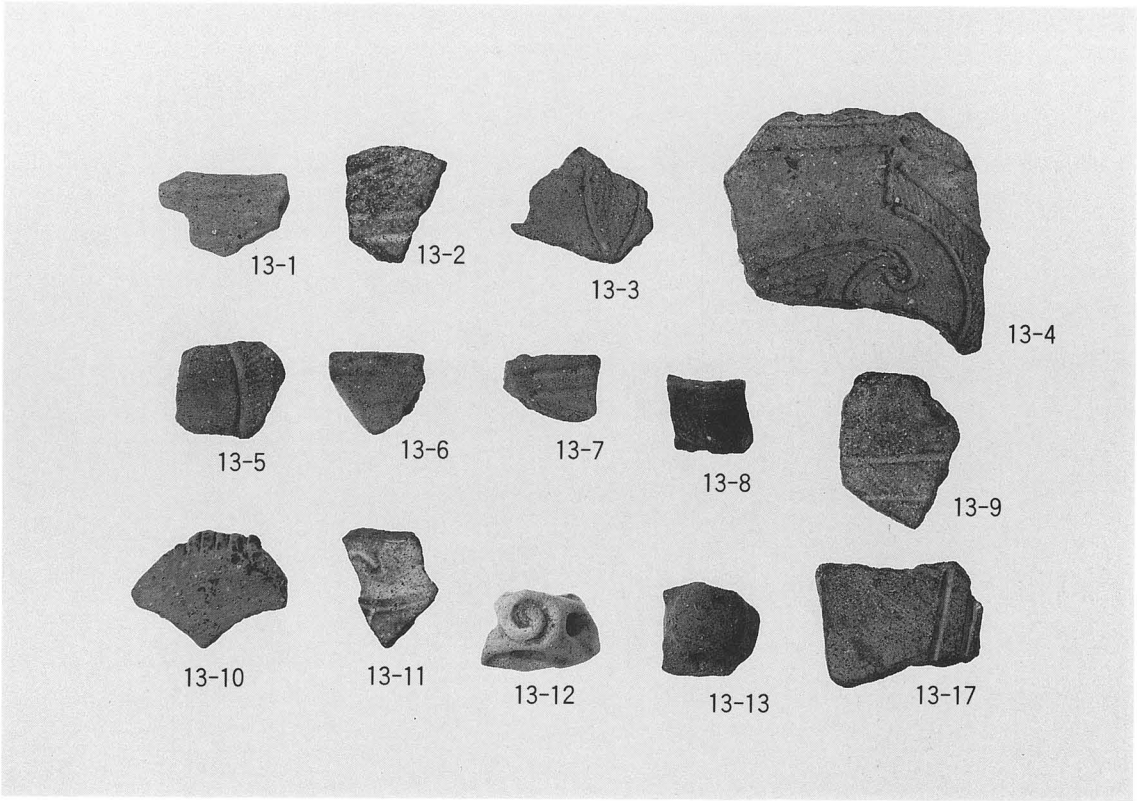
石台遺跡SI01出土土器(1：3)



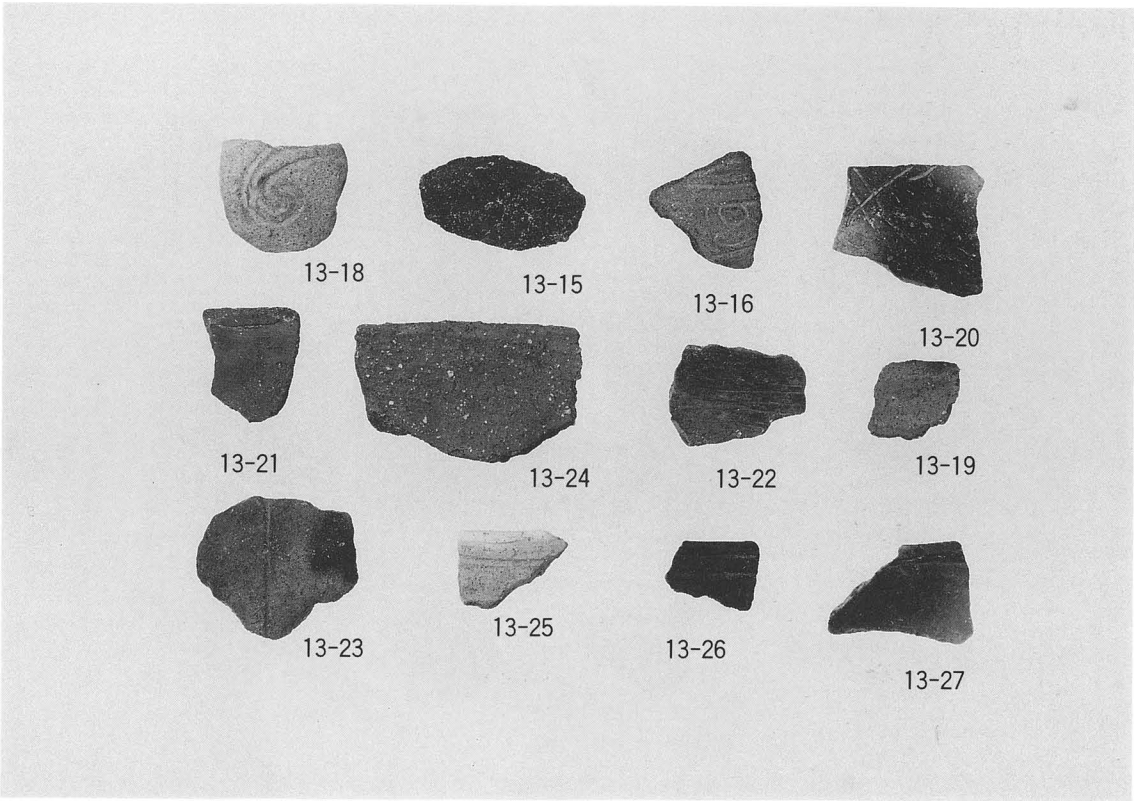
石台遺跡SI01出土石器（1：2）



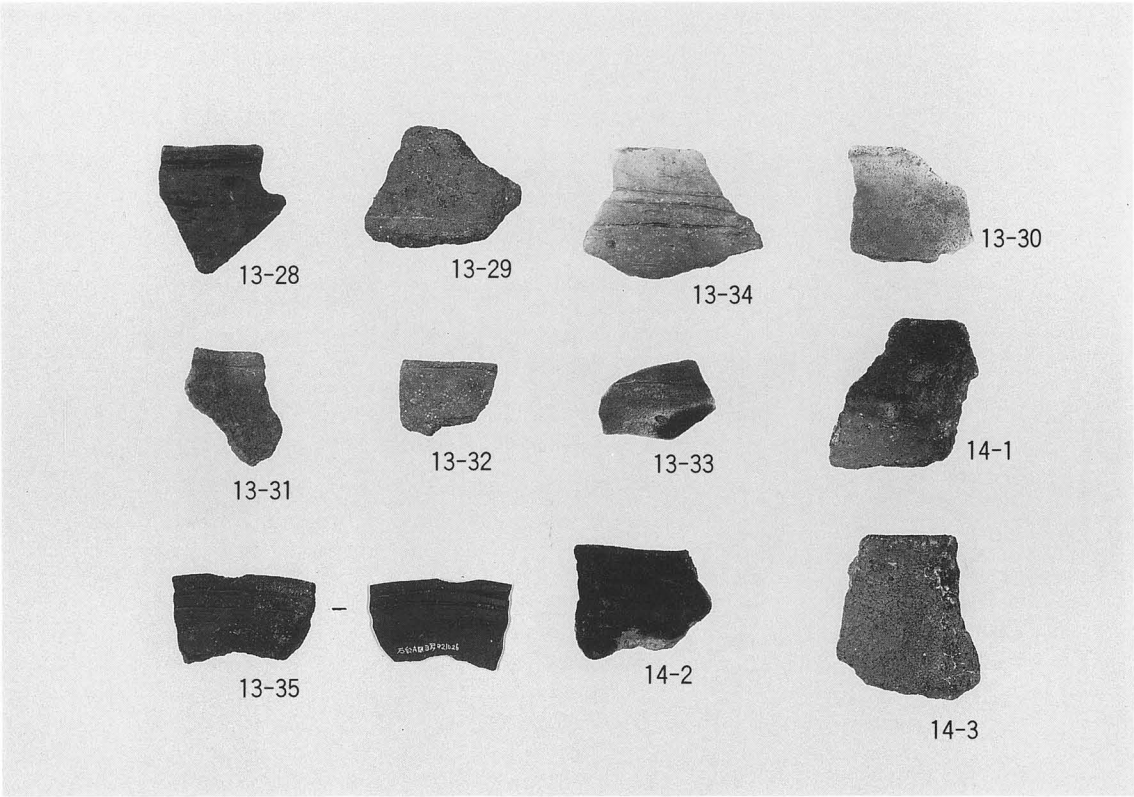
石台遺跡SD01出土土器・石器（1：3）



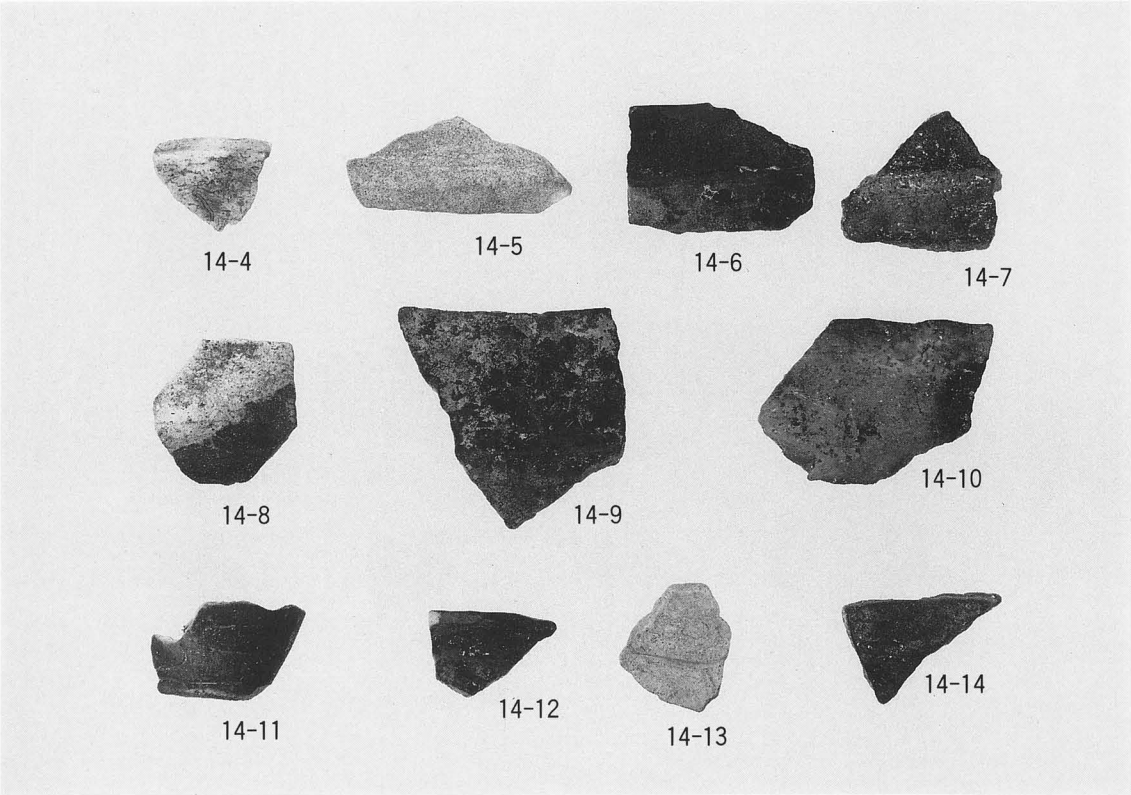
石台遺跡A区第３層出土土器（１：３）



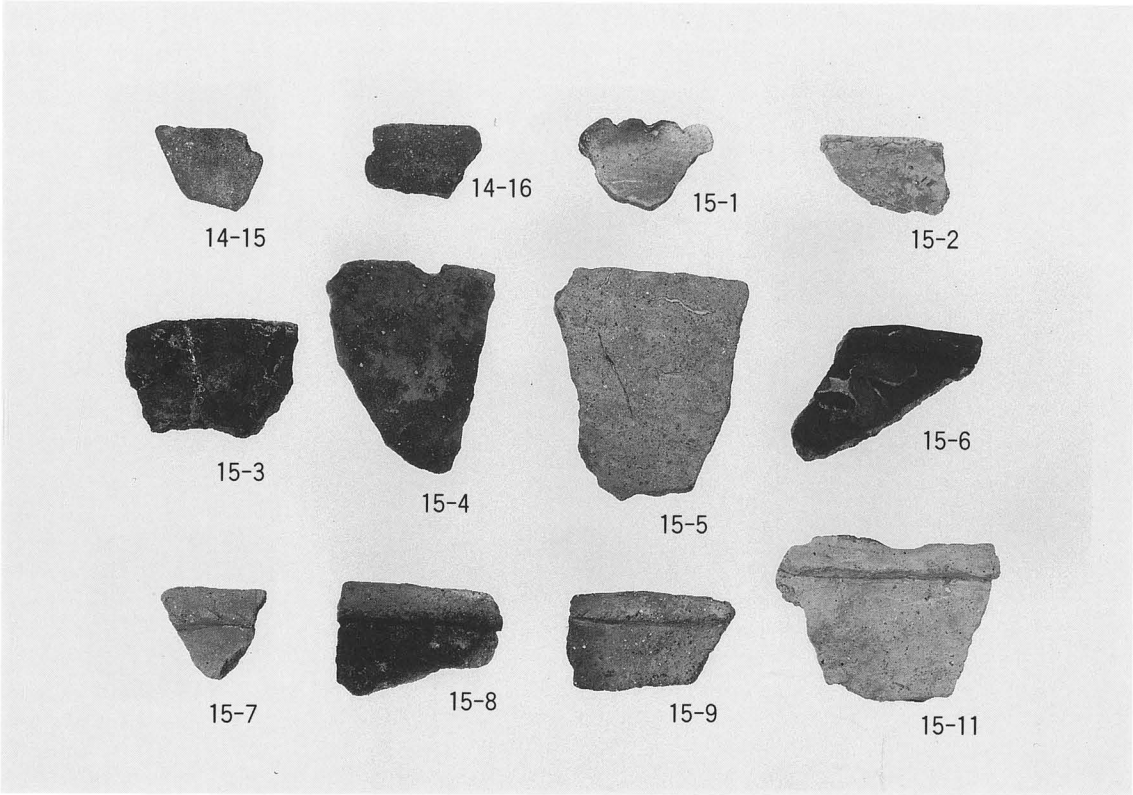
石台遺跡A区第３層出土土器（１：３）



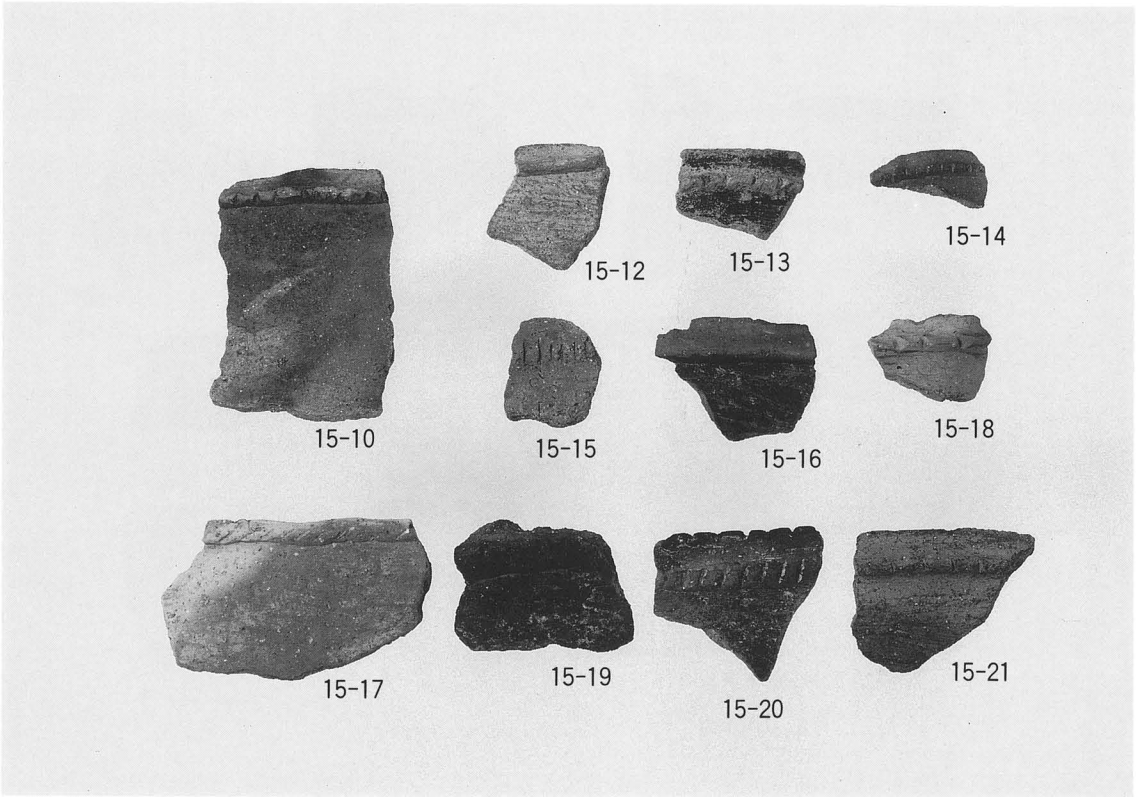
石台遺跡A区第３層出土土器（１：３）



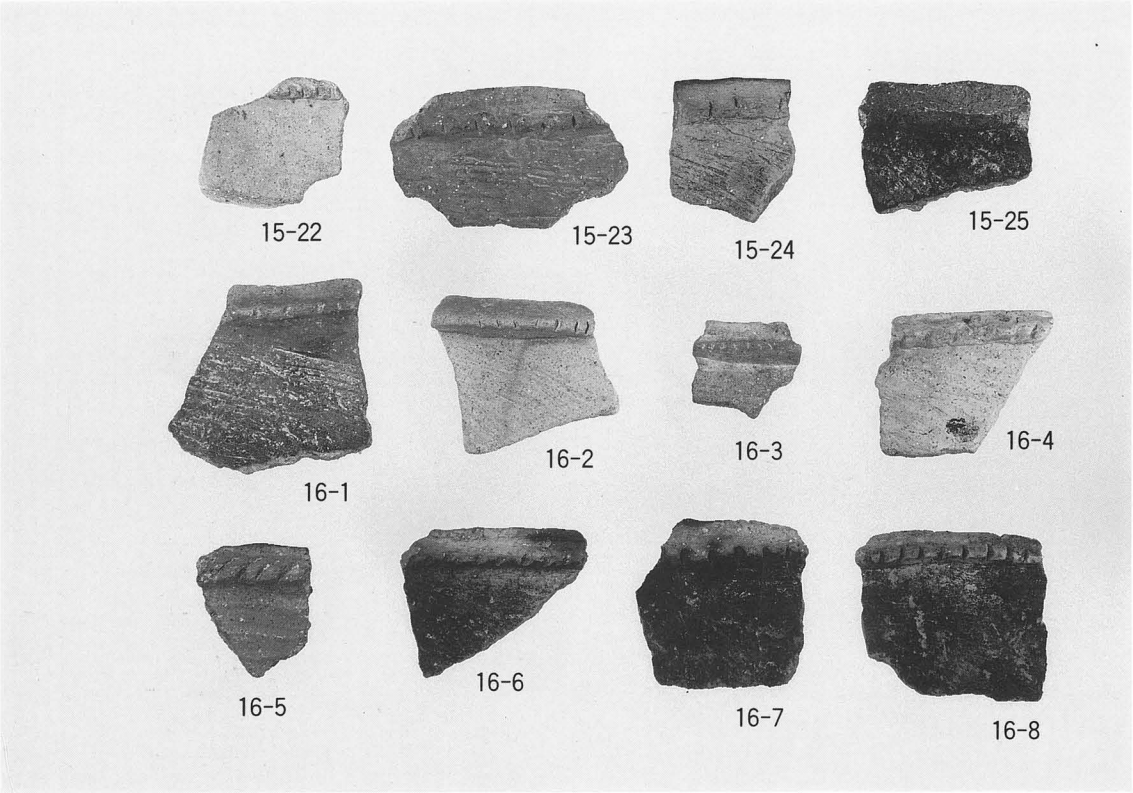
石台遺跡A区第３層出土土器（１：３）



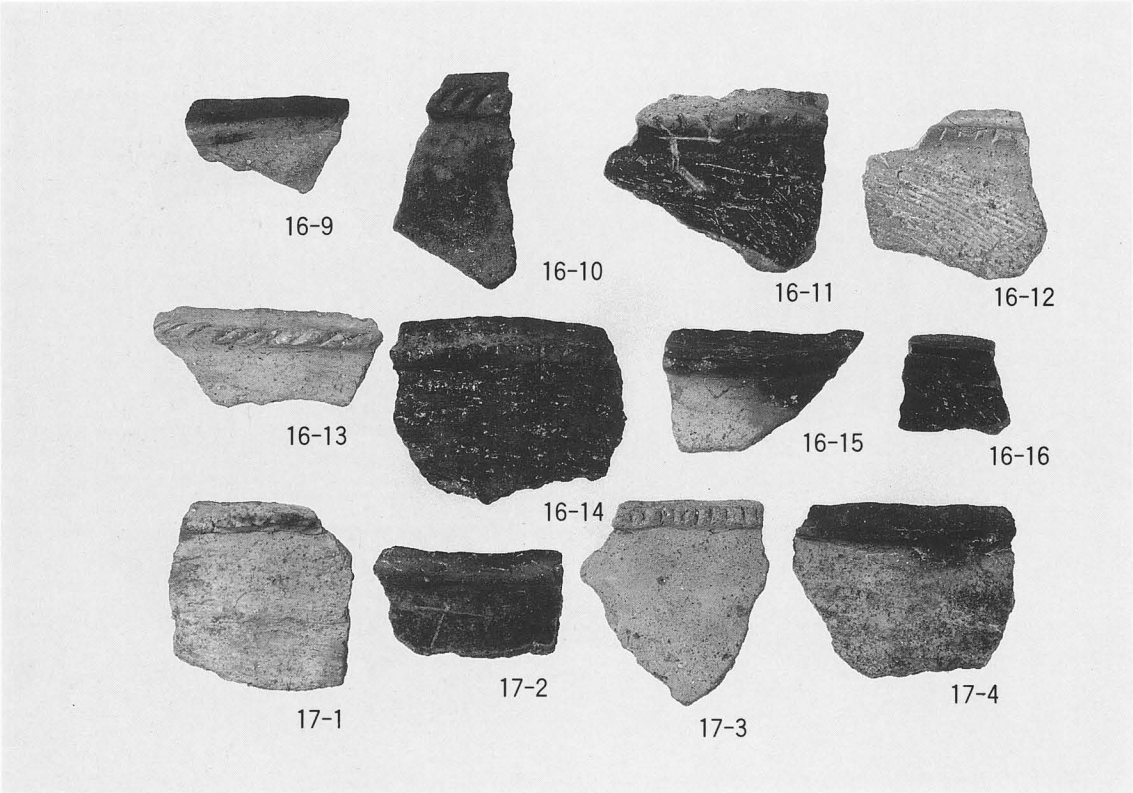
石台遺跡A区第３層出土土器（１：３）



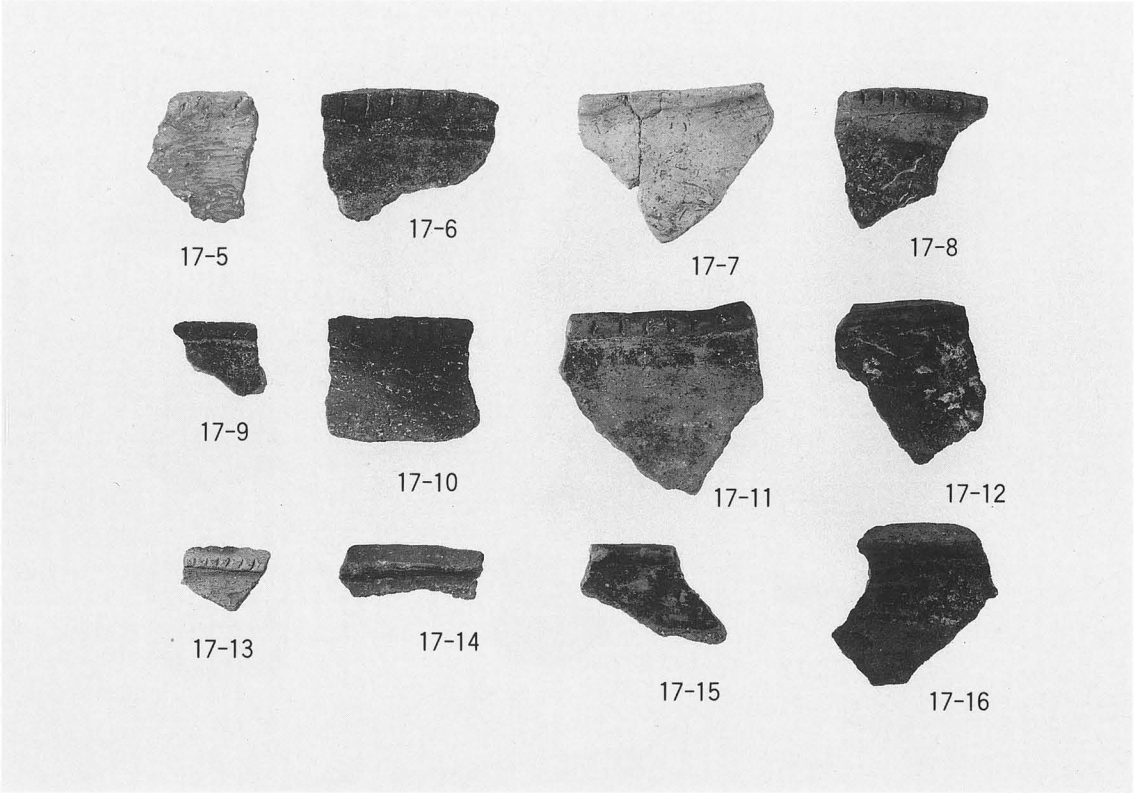
石台遺跡A区第３層出土土器（１：３）



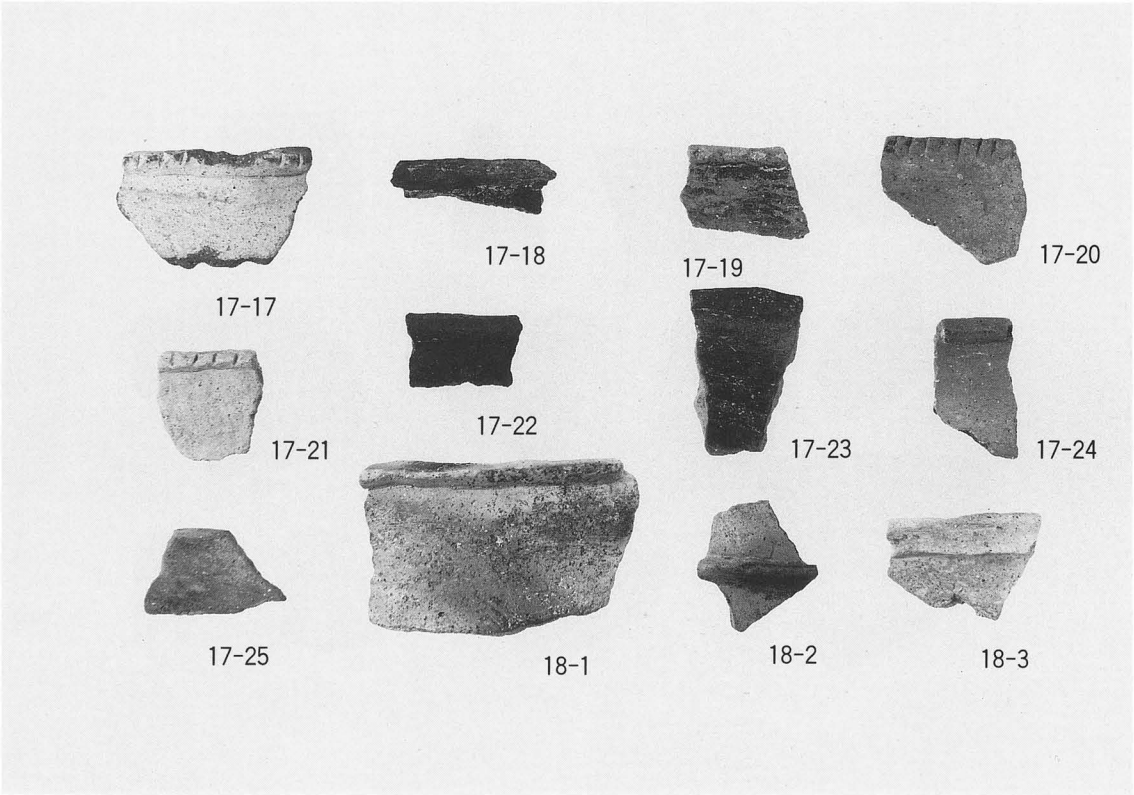
石台遺跡A区第３層出土土器（1：3）



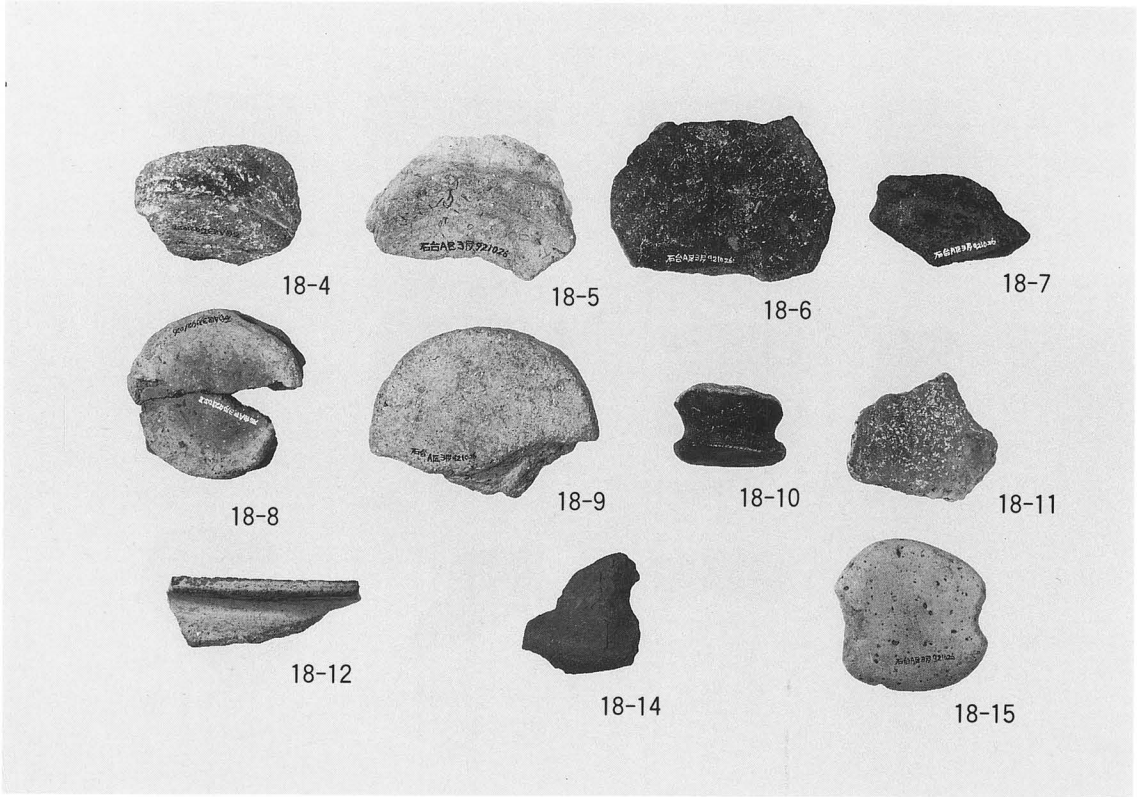
石台遺跡A区第３層出土土器（1：3）



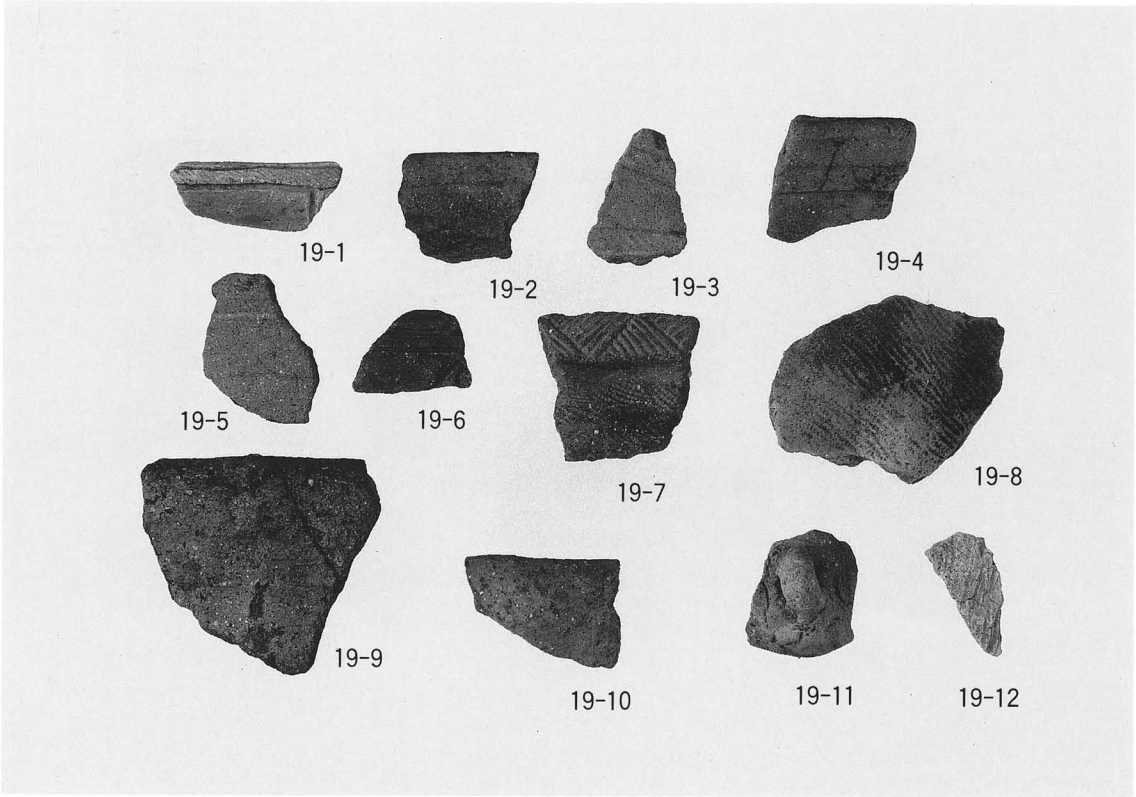
石台遺跡A区第３層出土土器（1：3）



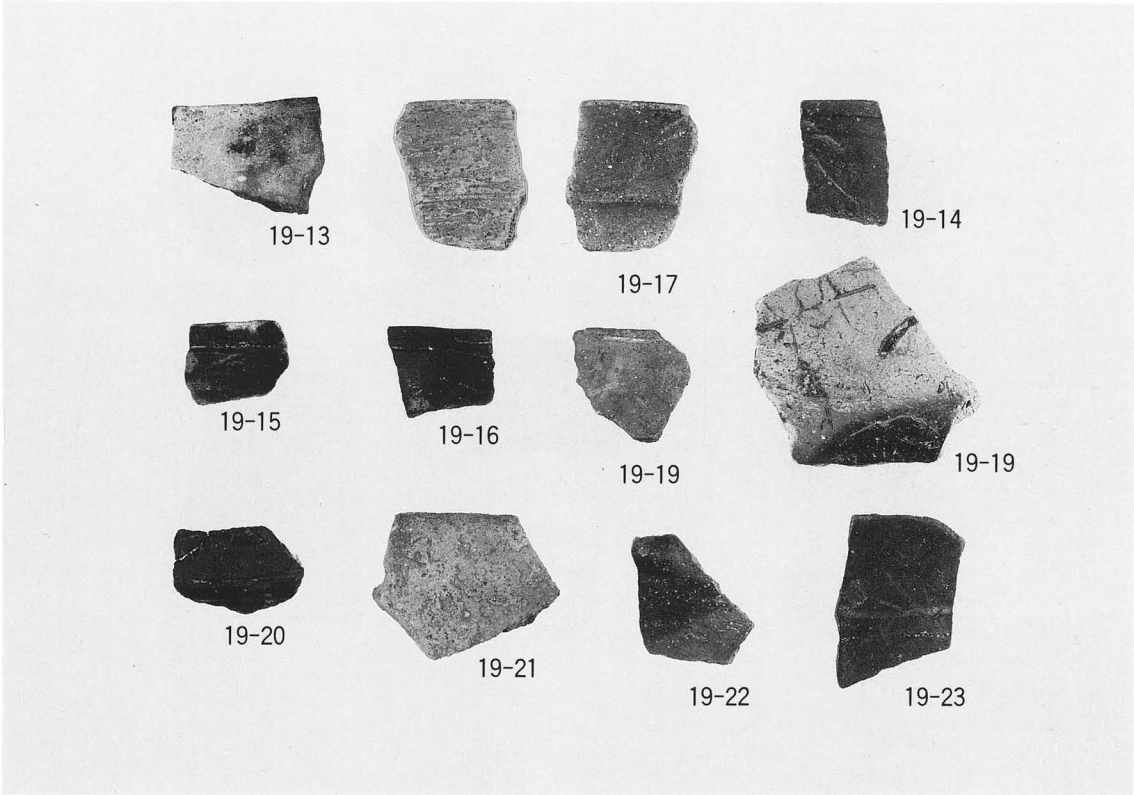
石台遺跡A区第３層出土土器（1：3）



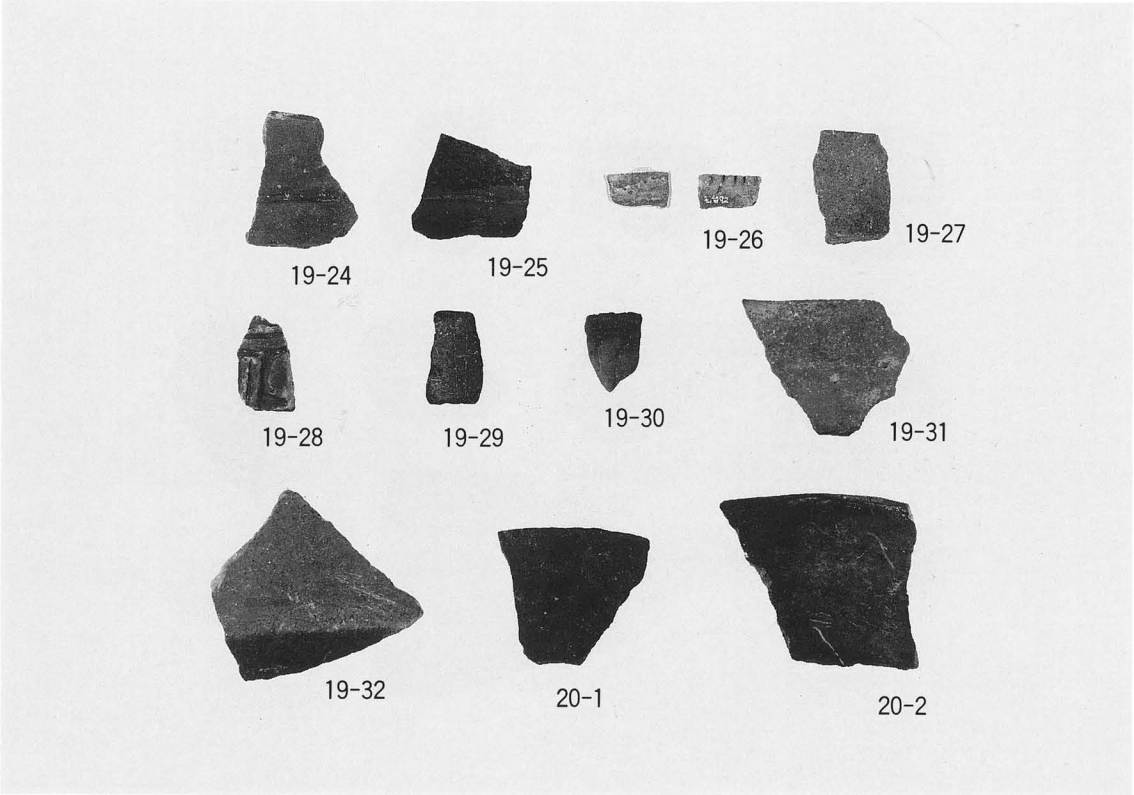
石台遺跡A区第３層出土土器・石器（1：3）



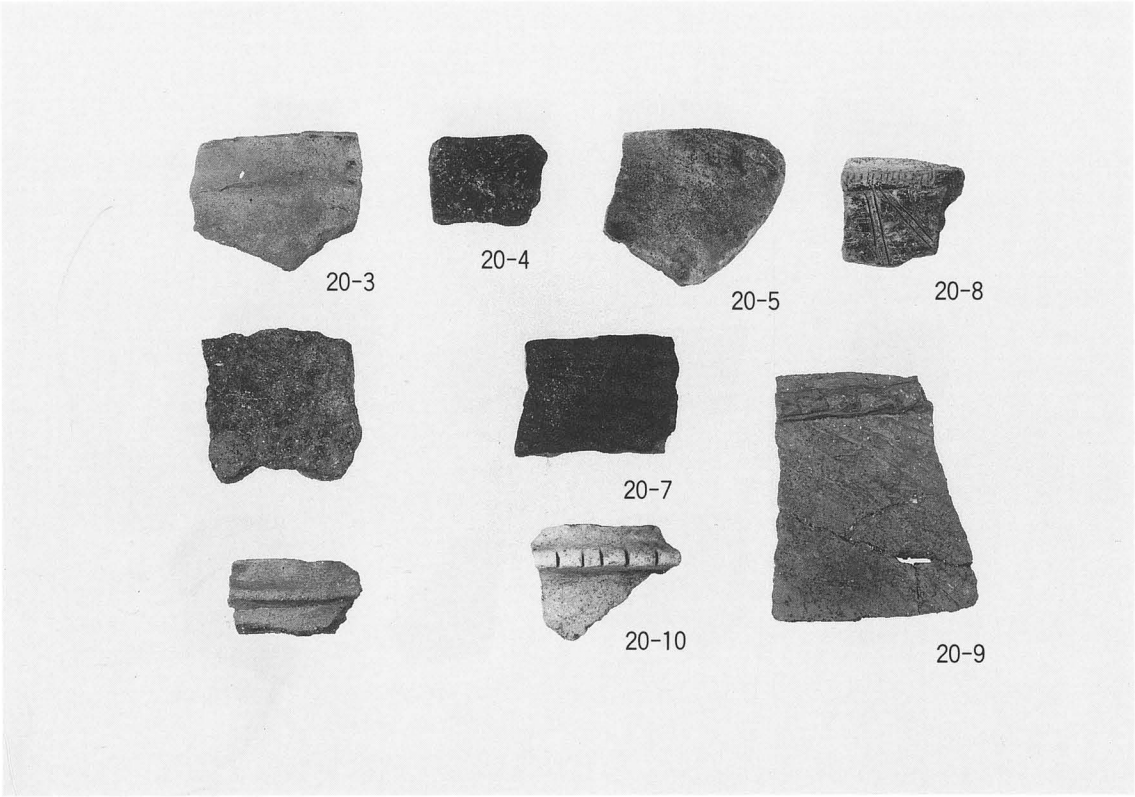
石台遺跡出土土器（1：3）



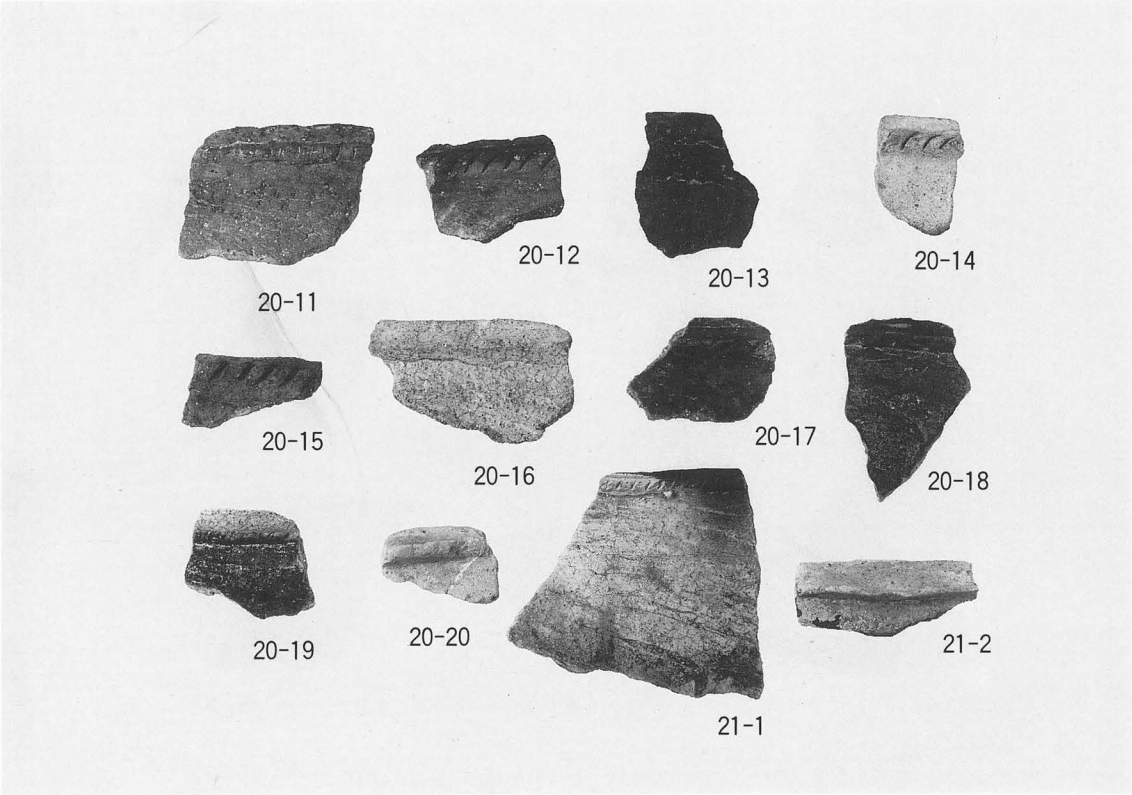
石台遺跡出土土器(1：3)



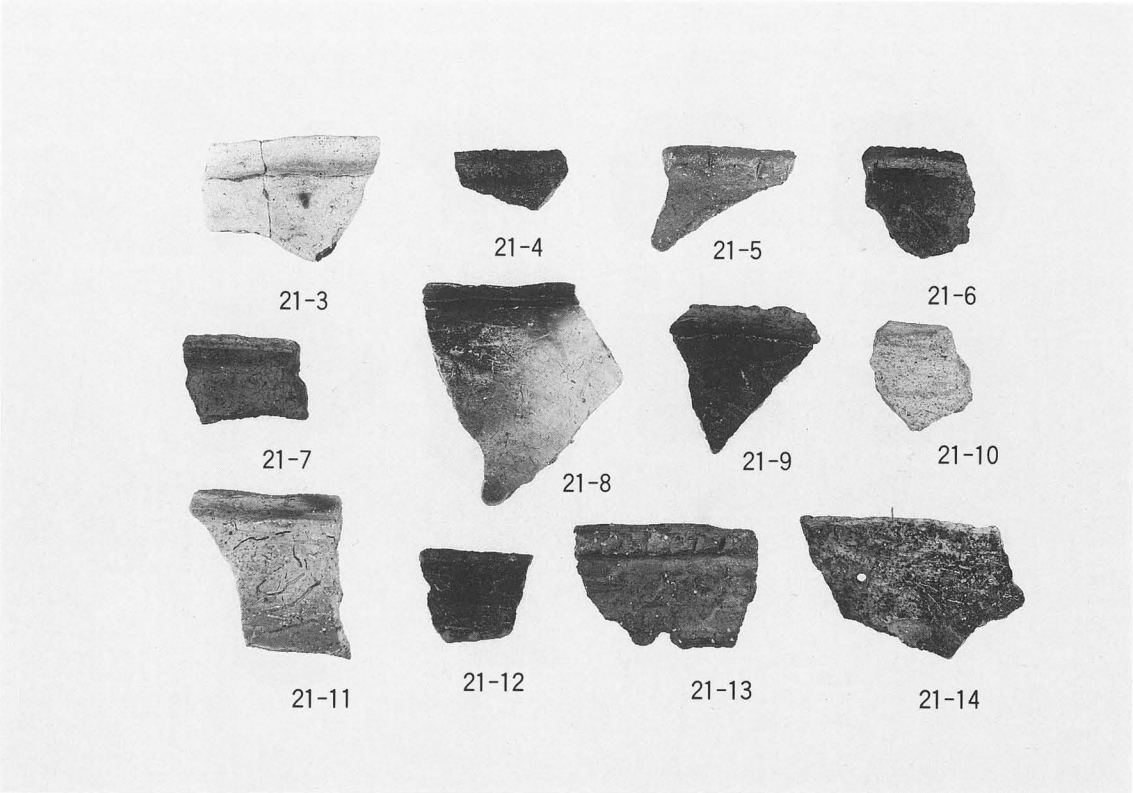
石台遺跡出土土器(1：3)



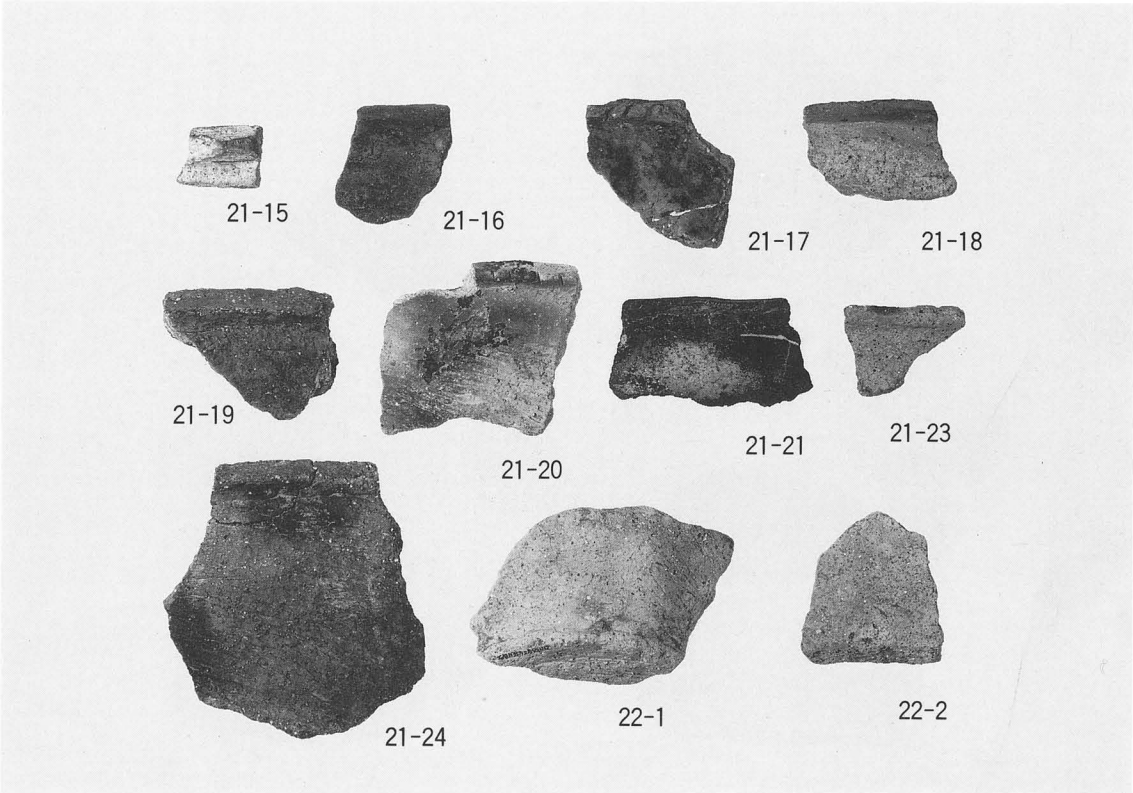
石台遺跡出土土器(1：3)



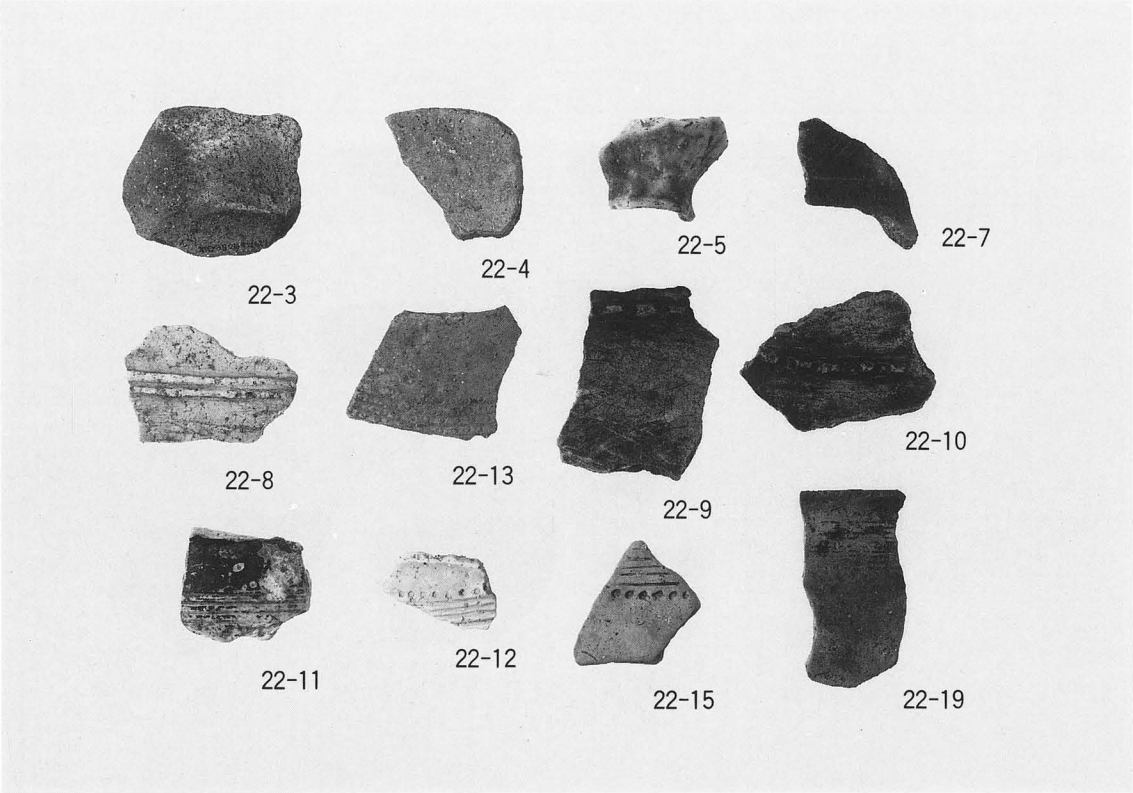
石台遺跡出土土器(1：3)



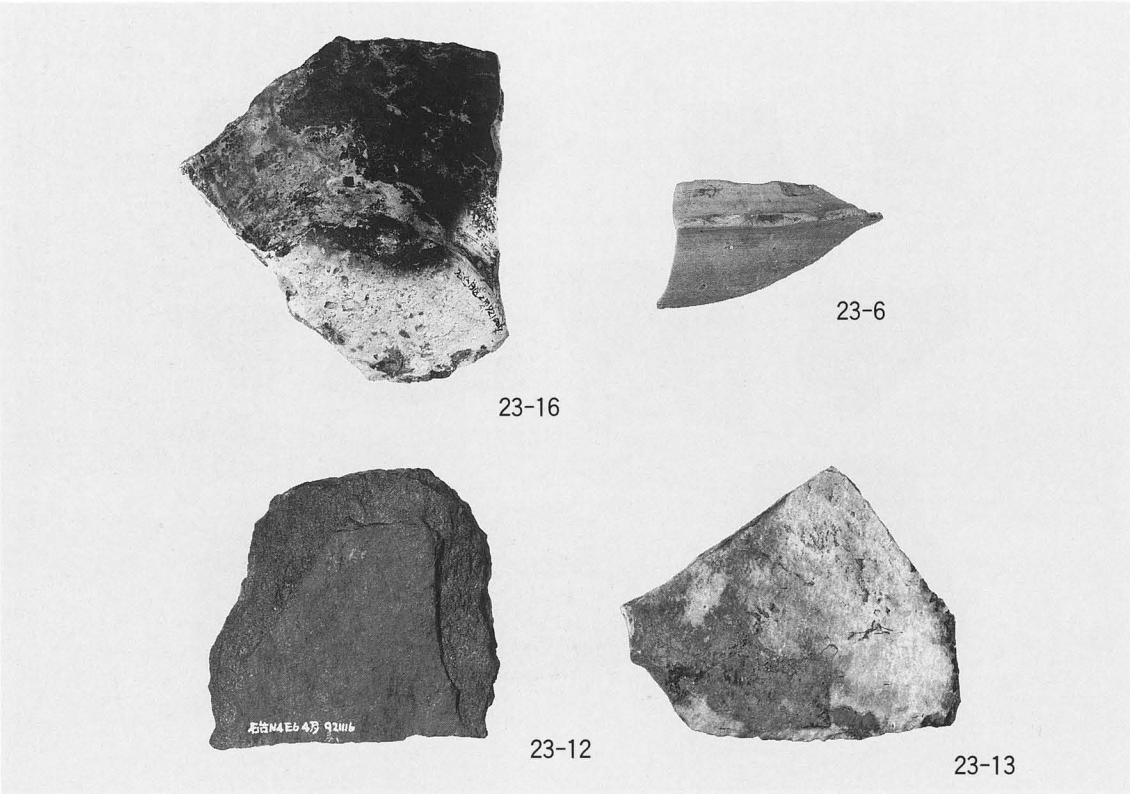
石台遺跡出土土器(1：3)



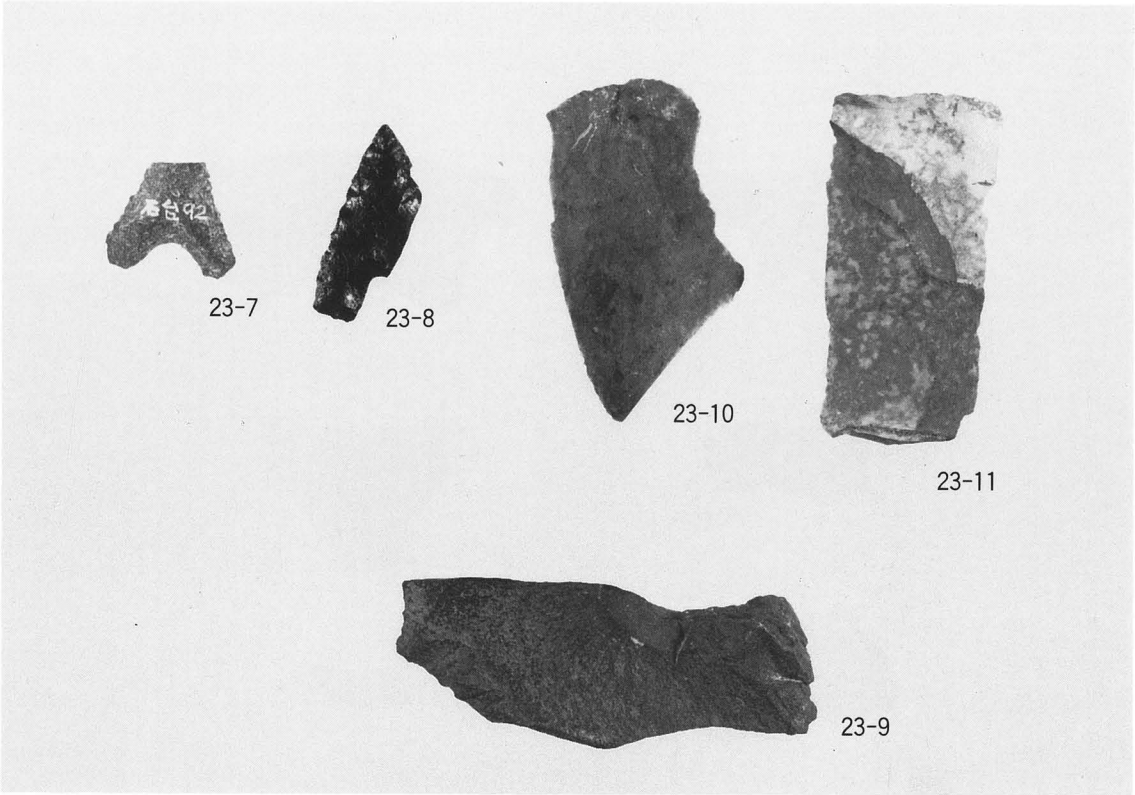
石台遺跡出土土器(1：3)



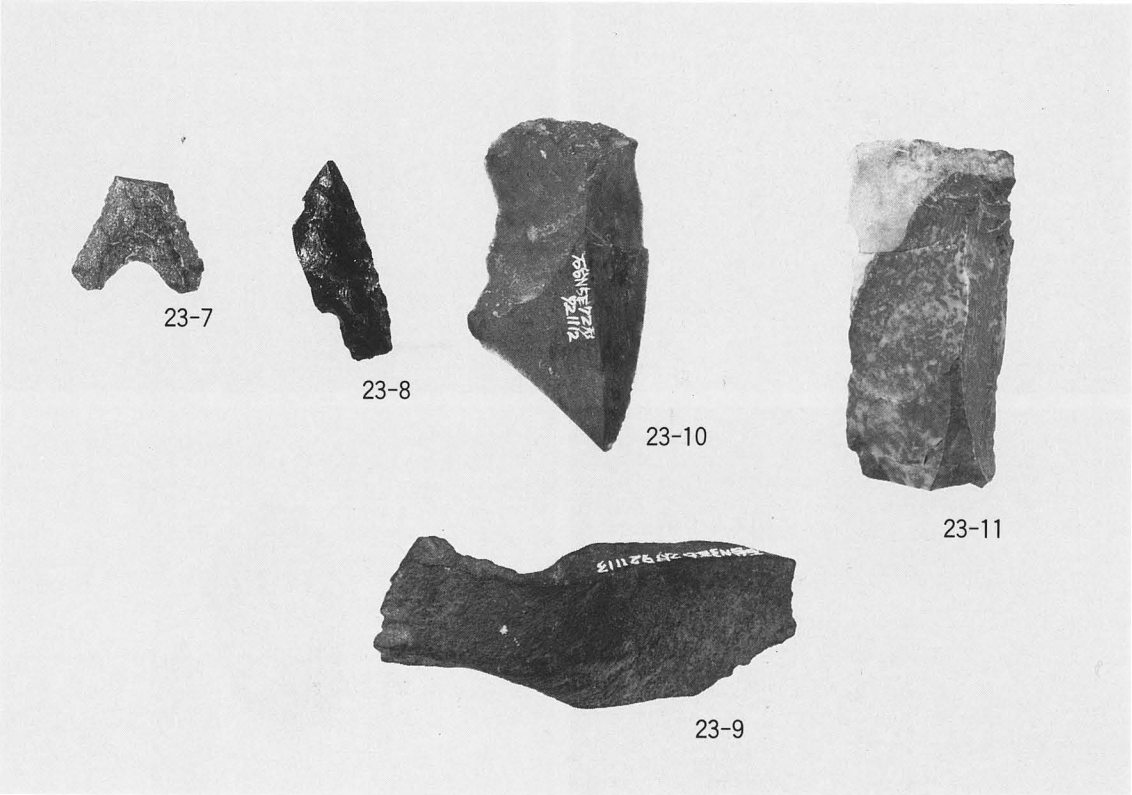
石台遺跡出土土器（1：3）



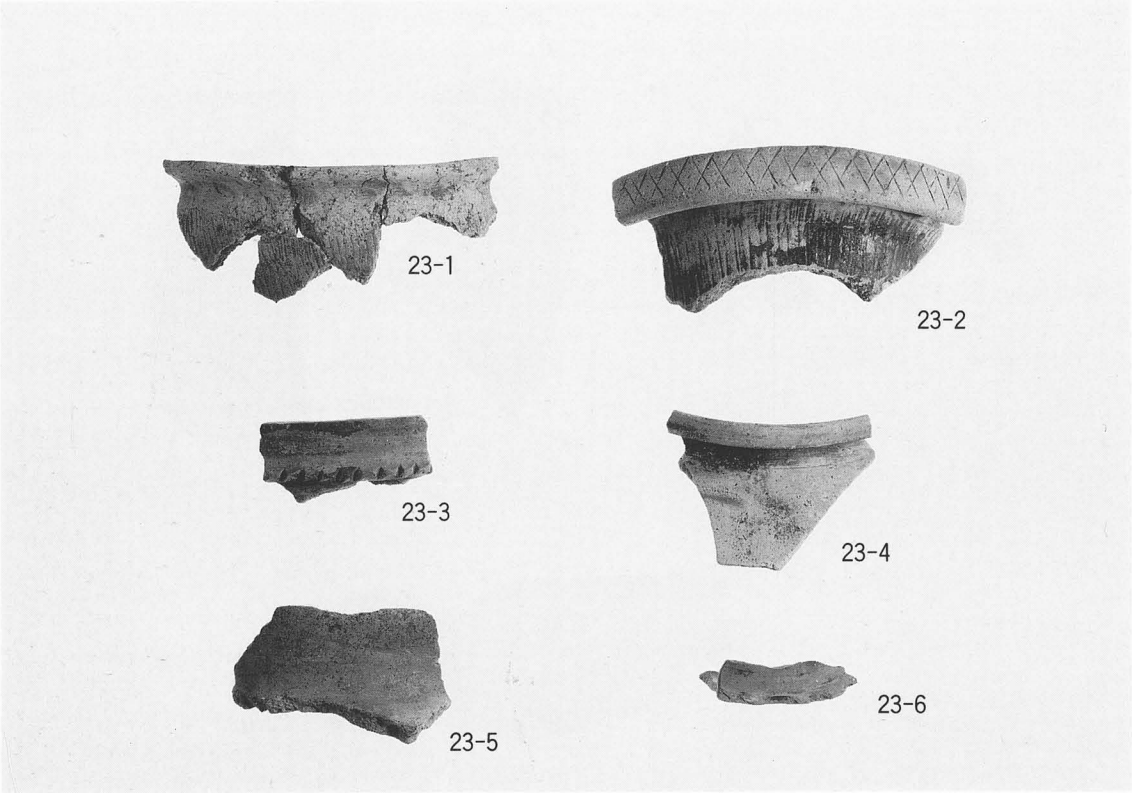
石台遺跡出土土器・石器（1：2）



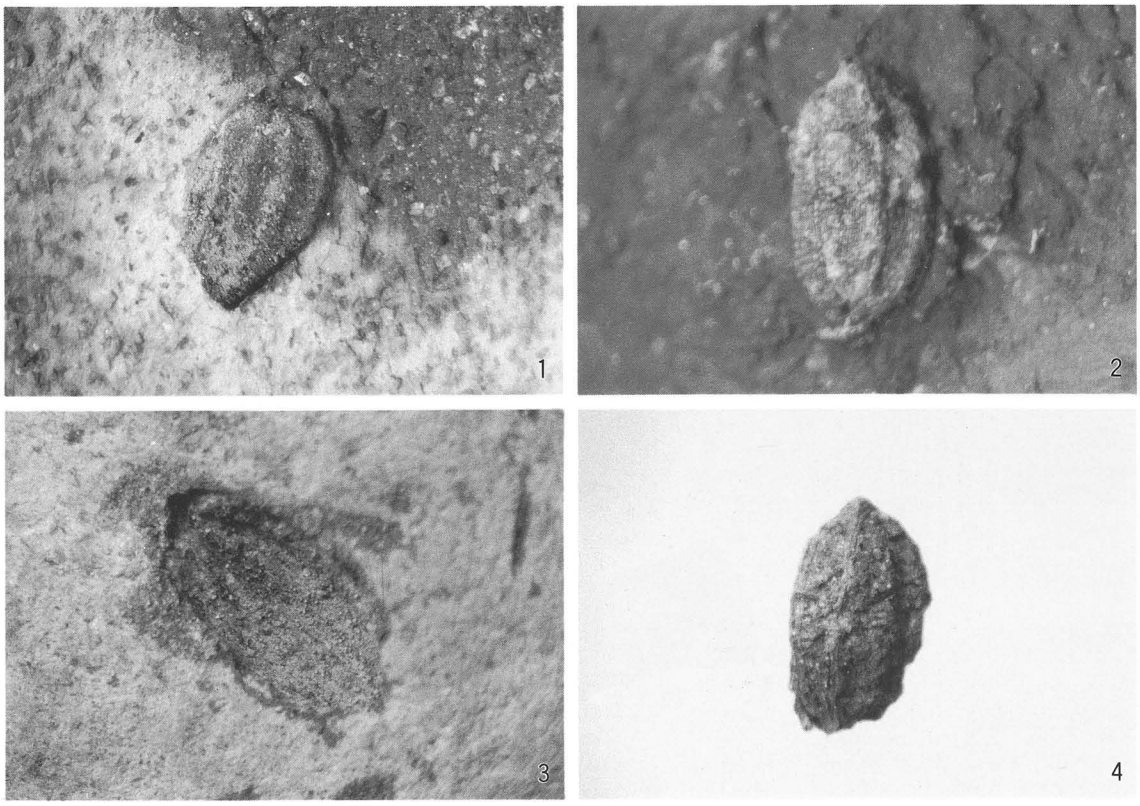
石台遺跡出土石器(表)(1:1)



石台遺跡出土石器(裏)(1:1)



石台遺跡出土土器(1：3)



モミ圧痕およびモミ(1.第13図33 2.第8図7 3.弥生前期底部 4.3の中に残存したモミ)

石台遺跡周辺の風景(1977年当時,恩田清氏による)

石台遺跡1977年の調査地点(同)

図版28

石台遺跡土層堆積状況(同)

石台遺跡土層堆積状況(同)

石台遺跡遺物出土状況（同）

石台遺跡遺物出土状況（同）

石台遺跡遺物出土状況（同）

石台遺跡「炉跡状遺構」（同）